
鏡の境界線

猫目 利石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の境界線

【Nコード】

N3654J

【作者名】

猫目 利石

【あらすじ】

1191年、十字軍とイスラム勢力は、聖地エルサレムを巡って熾烈な争いを繰り広げていた。そのため聖地には混乱が起き、市民の間に恐怖と不安が広まった。この争いを収束すべく、アサシン教団は、両軍幹部の暗殺を決行。教団のメンバー・アルタイルが刺客に送り込まれた。

この話はあれから約800年後

2013年 日本を舞台に

一暗殺者 アサシン とテンプル騎士団の子孫達が互いの血で綴った物語。

アサシクリードについての知識等があると読みやすいかもしれません。

第0話：始動

1436年

フードの中の黒髪が風に揺れる。

紅いラインが特徴的な白衣を身に纏った青年の名前はアルタイル。

「……………あ」

アルタイルの視線の先には、初老らしい老人と老人を囲む顔に笑みを浮かべた兵士たちがいた。

「や…やめてください！」

老人の困憊した声と表情に、兵士たちは薄ら笑いで老人を突き飛ばす。

通りを歩く人々は横目で見ながらも、面倒事に巻き込まれないよう足早に通り返り過ぎていく。

一人の兵士が剣を抜く。

太陽の下に鈍色鈍色の刀身が輝き、老人ははっと息を飲んだ。

アルタイルはその問題の集団へ歩みよりながら、左手を反らす。老人を囲む兵士はアルタイルが近づくの気がつかない。

内側の左手首から、しゅっと音を立てて飛び出る刃。

アルタイルの【アサシンブレード】が兵士の背から胸を貫通した。

「がっ………!!」

力が抜け重くなっていく身体がのし掛かる前に、アサシンブレードを引き抜く。

再度、左手を反らす 収納される、隠し小刀の音の小さい金属音。

アルタイルは左腰の鞘から銀色の直剣ストレートを抜き放ち、片手で構える。

「あ………アサシンだー!!」

兵士の一人が叫ぶ。

周りの兵士が腰から鈍色の剣を抜いた。

そして、兵士はアルタイルに剣を向ける。

「死ね!!」

一人の兵士が力任せの剣を振るってくる。

アルタイルはその兵士の剣を軽く受け流し、剣が止まる瞬間を狙って剣を巻き上げはね飛ばし、がら空きの胸をざっくりと斬る。

「ぐわあああっ!!」

兵士の胸から噴き出す鮮血が、フードの中のアルタイルの頬にかかる。

背後に殺気を感じ、振り向くアルタイル。

殺気の正体は右手の剣をアルタイルへ向けて横に薙ぐ兵士だった。

アルタイルはその剣撃をしゃがむことによって回避する。そして、曲げた膝をそのままの勢いで伸ばす。下段からの突き。それは、兵士の喉を裂き、脳を貫く。

「何事だ！……アサシン！？」

騒ぎを聞きつけた兵士が駆けつけてきた。

「…^{きり}限が無いな」

アルタイルは剣を構える兵士に背を向けて駆け出す。ここでの一見を遠目で見ていた市民がさつと道を空ける。

「おい、待て！！」

後ろには無数の足音。

待てと言われて待つ筋合いは無い。

一騎士道 フェアプレイ なんてものは暗殺者からすれば戯言だ、と心の中で毒づく。

「逃がさないぞっ、アサシン！」

アルタイルは家の壁を蹴り、壁の窪みくぼに手を掛ける。

窪みから窪みへと手を掛けて登っていく。

「アサシンはあそこだっ！」

屋根の上に居た番兵が叫び、肩から弓と矢を手に取り、構える。

しかし、アルタイルは右肩の肩当てのナイフホルダーから抜き放つ。

アルタイルの手から投げ放たれたナイフが番兵の眉間みげんを正確に射抜く。

「うぎゃっー！」

よろよろと番兵は呻き声を上げながら歩いて、屋根から落ちた。

「仲間がやられたぞ！」

アルタイルを追って来た兵士が家に梯子はしを掛けた。

アルタイルは家に掛けられた梯子を蹴つって、梯子に？つかまる兵士と倒す。

「ぎゃあああああああああ！」

響く悲鳴をBGMにアルタイルは再度、駆け出す。

屋根から屋根へと飛び移り、兵士との距離を離す。そして、屋根から宙へと舞う。

アルタイルの身体を包みこむ空気の圧。

流れる町の光景。

目の前に迫ってくる藁わらの敷き積もった荷車。

衝撃を受け流しやすいうちに空中で身体を一回転させる。

回る視界。

背中から藁に飛び込んだ。

「アサシンはどこだ!？」

「探せ!！」

ドタバタと荷車の周りを通り過ぎる兵士たち。

兵士たちの警戒が薄くなるまで時間がある。

アルタイルは何故こんなことをしているのか思い出そうと記憶の海を探る。

答えは、一年前にあった。

第0話：始動（後書き）

7月20日：年代表記

8月13日内容追加（少し）

第1話：日常

2013年

アサシンクリードというゲームを知っているだろうか。

内容は、凄腕の暗殺者であるアルタイルが、とある任務に失敗して「マスターアサシン」の称号を剥奪され「見習いのアサシン」に降格させられてしまう。彼は、汚名返上として9人の標的を暗殺する任務に就くが、やがてその標的達に何らかの繋がりがあることに気付き、やがて彼と彼の子孫は陰謀に巻き込まれる、というもの。

詳しくは、ウイキペディアを参照するといひ。

俺は神使蓮^{かみつかれん}。今年で17歳になるパルクール部に所属する黒い髪の毛が自慢の高校二年生だ。

誕生日は5月27日だ。

さて、今日は日曜日。

学校は休み。

部活も休み。

簡単にいえば、ゲームやり放題だ。

もちろんやるゲームはアサシンクリード2だ。

詳しくはウイキペディアやYOUTUBEの動画を見るといい。

先日買ったばかりなのでストーリーはあまり進んでいない。

さてと、一狩するか。

ストーリーはある程度進み主人公のエツイオが父の隠し部屋で見つけ、アサシンの白衣を身に纏うところまでいった。その時だった、ケータイの着信音が鳴ったのは。誰だ、俺のアサシンライフを邪魔するのは。ケータイの画面に表示されてるのは、親友の名前。親友の名において許してやろう。今回だけだからな。

『おい、蓮！！出来たぞ、例のやつ！！』

彼の名前は佐藤大輔^{さとうだいすけ}。

男のくせに裁縫部に所属する変なやつだ。

「そうか。いつ取りに行けばいい？」

『今すぐ来れるか？見せたい物があるんだ』

「わかった」

寝巻きから普段着に着替えて家の戸締りをして家を出た。目指すは佐藤家。

インターホンを鳴らす。

「はい」

家の中から若い女性の声がした。

1分待つ。

今は四月とは言えやや肌寒い。もう一枚着てくるべきだったか。2分待つ。

やっと家のドアが開き、中から大輔の母が出てきた。

「あら、蓮君久しぶりね」

「ご無沙汰です」

「大輔は二階よ、上がった」

そう言うと大輔の母は寝室に戻って行った。

昼は家で家事をし、夜はコンビニで仕事しているので朝はきついのだらう。

お疲れさまです、と心の中で呟いて靴を脱ぐ。

だいた目標は二階にいるらしい。

階段を上る。

そこには、大輔の部屋と書かれたドア。

この先にあいつは居る。

軽くノックしてドアノブに手をかける。

そこにいたのは

「エツイオ!？」

フードを被っていて顔は見えないが、まさしくその服はアサシンク
リード2の主人公エツイオ・アウディトーレだ。

白衣に走る紅いライン。

腰の紅い腰帯。

ワンシヨルダー式のマント。

左腕の籠手。

「どうだ、親友？」

「なんだ、お前か」

コスプレした大輔だった。

というか、ここは大輔の部屋なのだから当然だ。

「それで、これの感想は？」

「さすがお前だ」

ゲームの中からそのまま取り出したような完成度だった。さすがに裁縫部に所属するだけはある。

「それで、俺に見せたい物とは？」

「これだよ、これ」

大輔が差し出したのは、左腕の籠手。

「アサシンブレード？」

「いいから見てるって」

大輔が左手を大きく反らすと、大輔の左手首から勢いよく何かが飛び出す。

「中々の出来じゃないか」

しゃつと音と共に飛び出したのは、小刀だった。

「刃はついてないぞ、危ないし法に触れるからな」

再度、しゃつと音を立てて必殺の刃は鞘に戻る。

「それで十分だ」

左腕の手首に鞘がついていて、小指に付けられたリングを引っ張ることでもリングと鞘をつなぐ紐が引かれ刃が飛び出す仕組みで、刃を鞘に戻すにはもう一度リングを引っ張ればいいそうだ。

しかし、本当に刃が付こうものならば俺は警察に逮捕されかねない。

「材料の関係や財産の問題上、一つしか作れなかったけどな」

「一つだけで十分だろ」

「まあね、じゃあ約束通りこれと衣装やるよ」

約束、それは俺と大輔がテスト前に交わしたモノ。

俺がテストで大輔の順位を上回っていたらアサシンの装束と【アサシンブレード】は無料でもらう。

逆に俺の方が下だった場合、俺は校長先生の机の中に大事にしまつてある孫娘（14歳）の写真をとってくる。

そんな約束が俺と大輔の間にあった。

というか、これは約束というより賭けに近い気がするがスルーの方針でいいだろう。

「本当に良いのか、これ」

結果、俺は150人いる一年の中で68位。
大輔は75位。
つまり、この約束は俺の勝ちだった。

「良いよ、お前にやる。俺じゃ恥ずかしくてな」

大輔が頬を指で掻き、そっぽ向く。

しかし、今では大輔がこう言っているものの、もし大輔が社会の記号問題をすべて記号で答えていたら（大輔は全部、記号じゃなくて単語で答えた）、もし、大輔が理科の問題でちゃんと単位まで書いていたら。

俺は今頃、校長の叱責を受けていただろう。

いや、叱責だけではすまないだろう、と考えたところで思考をストップさせる。

そう、これらはもしもの話だ。

俺は気を取り直して

「ありがとな、親友」

満面の笑みで礼を言う。

しかし大輔はもう付き合うのも面倒だといつかのように欠伸を一つした。

「じゃあ、俺は寝るよ。徹夜での作業だったからな」

「ああ、おやすみ」

今は安らかに眠れ、我が友よ。

俺は大輔の部屋を後にした。

第1話・日常（後書き）

7月20日：年代表記

第2話：境界線

家に帰ってみれば、Xbox360とTVの電源が点きっぱなしだった。

電氣代がもつたいない。

今の時代は省エネが重要だ。

みんなは注意しろよ。

EXbox360とTVの電源を切ると、服に手をかける。

着るのは親友からもらったアサシンの白衣。

さすが親友、俺のサイズをわかっけていらっしやる。

そつえば、フードって周りが見にくいな。

これをかぶって敵兵と戦うだなんて俺には無理だ。

と言うより、俺の敵は勉強と教師なので関係ないか。

俺はパルクール部に所属する普通の高校生。

他人よりかは運動神経は良くても、実は忍者の末裔だとか、信長の

隠し子の子孫だとかじゃない。

あくまで、普通なのだ。

父はただのサラリーマンで、手から炎が出せるわけでもない。

いたって普通の人間だ。

母も同様。

実は何処かの金持ちの娘でもなけりゃ、名家の血縁者でもない。

そして、少しだけ万能な普通の兄。

頭が良く、運動神経も抜群。

俺と違って人見知りをしない、社交的で多弁な兄。

2歳年上の兄。

しかし、普通の家庭。

しかし、普通の家族。

普通に囲まれた生活を過ごす、普通の高校生。

それが俺だった。

「ふ、ふあー」

欠伸がでた。

俺も少し寝るかな。

最近、夜に寝る間も惜しんでゲームをすることが多かったからその代償が来たのだらう。

「うつ、やべえ。頭がクラクラしてきた……」

俺はそのまま倒れこむようにベッドに身と意識を投げ出した。

白。

白、白。

白、白、白。

白一色の世界。

普通の生活を送る高校生の目に飛び込むは白一色。

普通の家庭で過ごす高校生の目に映る色は白一色。

普通の生活が、人生が続くと思っていた。

いや、続くとしか思えなかった。

続くと信じていた。

だからこそ、今。

……って、何。パニックになっているんだ俺は。

意識があるとはいえこれは夢に決まっているだらう。

それか、妄想……いくらなんでも妄想はないだろう。
そうであつたら困る。

白一色の世界。

どんな妄想だよ。

『残念、これは幻覚でもなければ、夢でもない』

幻覚や夢でなけりゃ、目に映るこの光景は一体何なんだ。
妄想か？

『妄想でもないわ』

じゃあ、何なんだよ。

他になにがある？

『現実よ』

最悪だ。

幻聴相手に喋りかけるだなんて、頭がイカれたか、俺。

『くどいだろうけど、これは現実』

じゃあ、俺に話しかけてるお前は誰だ。

『私はミラ。鏡の神様』

やばい。

ここにも頭がイカれた奴がいる。

『貴方には、これから鏡の向こう。異世界に旅立ってもらいます』

何故、俺が異世界に行かなけりやならない？
どう考えてもおかしいだろ。

『鏡の向こうは貴方の居た世界とは真逆。科学の代わりに魔法が発達した世界』

なんだその、ファンタジー世界。
今時の小学生でも「は？」ってなるわ。

『魔物が歩き周り、騎士や魔法使いが剣や魔法を駆使し、国と国が戦争する世界』

えらく物騒だな。

平和ボケしてる日本人である俺は拒絶反応に耐え切れず、現実逃避するのが積の山だ。

『貴方はそこで、勇者アルタイルの末裔として生活してもらいます
アルタイルって、あのアルタイル？』

『そう、あなたの大好きなアサシンクリードの主人公のアルタイル』

おお、それは面白そうだな。
少しだけ興味が湧いた。

『貴方が異世界に行かねばならない理由は貴方と同じ異世界人が向こうの世界で知識を使い、科学が急激に発展したことにあります』

発展しては駄目なのか？

『このまま発展し続ければ、世界の均衡は崩れ、あちらの世界とこちらの世界が接触してしまいます』

接触するとどうなるんだ？

『世界は一つに溶け合い、やがて一つの世界になります』

それで、世界の人々はどうなる？

『健在です、二つの世界の人々も、動物も魔物も』

やばいじゃないか。

平和ボケした俺と全国の佐藤さんが死んでしまう！！

『魔物を全て殲滅したとしても、魔法を使える人と使えない人がいます』

人種差別か？

『貴方が向こうの世界ではいけないことは、科学に関する知識の使役、及び血脈を残す行為。』

血脈とはなんだ？

『子供よ。貴方は向こうで子供を作ってはけません』

もしかして、一人の時でも？

『勿論です。いかなる時でも出してはいけません』

俺に死ねと言うのか!?

『……いえすゆーきゃん』

できねえよ。

『次は、貴方の身体についてです』

俺の身体について?

『貴方の持つ魔力は0〜1です』

普通の人とは?

『魔法を使わない人でも最低100、使う人になれば1000を超えます』

俺弱いじゃん。

『ですが、貴方は魔法使用不可の代償を差し引いても十二分にトツレベルの騎士と互角に渡り合えるほどの身体能力です』

せつかくのファンタジーなのに魔法が使えなけりや意味が無い。

『貴方の身体は魔力で構成されていて、身体に循環させることにより、脅威的な回復力を持ちます』

俺は人外かよ。

というか、1しか無いじゃん。

『無論、魔力をコントロールするうちに貴方も一般人と同じ様に成長します』

頑張れば、魔法を使えるようになるわけか。

『次は、貴方の今着ているその服はそこら辺の鎧より堅く、そこら辺の服より軽く、ある程度の魔法の威力を減少させます』

もう服じゃねえよ、それ。

『次に武器ですが、エツイオ・アウディトーレ並に色んな物を使いこなせます。練習次第では、彼を上回ることさえ可能です。』

全ては、俺次第か。

RPGゲームはあんまりやったことないけど大丈夫だろうか。

『アサシンブレードに刃をいれて、私の力で強度と切れ味を底上げしました。これで、チャンバラしても大丈夫です。自己修復機能も付いてますから刃こぼれしても自動で新品同様の使い心地です』

すごいな、アサシンブレード。

『初期装備はこれだけです。頑張ってください』

これだけかよ、勇者の剣はどこ行った？

『最後はアップグレードです』

おお、強化できるのか？

『アップグレードの条件は、特定の人物または魔物の討伐です。死ぬ気で殺らないとこちらが死にますので気を付けてください』

無理だ。

絶対死ねるよ。

『勇者アルタイルの伝説通りに行動しても、アップグレードは可能ですが、時間がかかります』

伝説とは？

『現地人に聞くと良いでしょう』

そういえば、言葉は通じるのか？

『貴方のいた世界と同じです』

そうか、ならいい。

『健闘をお祈りします』

死ぬ気で祈ってください。

そして俺は歩きだす。

鏡の向こうへ。

境界線を越えて。

今、旅立つ。

第2話：境界線（後書き）

誤字脱字や感想をお待ちしています。

第3話：異世界

目を開けるとそこには木があった。

右を見ると木。

左をみれば木。

見渡す限り、そこには森が広がっていた。

どうせなら、どこかの神殿の中が良かった。

ついでに言っと、人がいて「私が貴方を召喚しました」的なこと言ってくれるとよかった。

いきなり森の中じゃどっちへ進めばいいのかわからない。

第一、迷子になったらどうするんだよ。

まあいい、あそこの高い木に登って周りを確認しよう。

かの有名なアルタイルも高い建物に登って町の配置を頭に叩き込んでたしな。

丈夫そうな枝を選び手をかけて、少しずつ登って行く。

この木の一番高いところまで登ってわかった事。

東の方に大きな城が見えることと、西の方に山があること。

そして、この木の下に藁わらが無いことだ。

アルタイルも高い建物に登った後は、下方の藁に飛び込む【イーグルダイブ】というほぼ自殺行為に等しいことをして、建物から降りる。

このまま【イーグルダイブ】したら間違はなく死ぬだろう。

このまま、助けを待つという手もあるのだが、助けを待っている間に俺の精神は死ぬ。

すんげえ高いもん、この木。

やばい、俺の息子もヒュンってなってる。

俺がどうしようか迷っていると、一匹の獣が俺のいる木に近づいてきた。

あの獣の毛のモフモフ具合はかなりのものだ。

俺にはわかる。

あいつの背中なら俺を受け止めてくれる。

あいつの背中に飛び降りて、あいつが襲ってくる様なら逃げればいい。

戦う？

何それ、食えるの？

大体あの3mを超える巨体のアイツにアサシンブレードだけで倒せると思う？

どう考えても無理だ。

きつと厚い脂肪に阻まれて致命傷を与えないだろう。

だが、背に腹は変えられぬ。

さあ行くぞ、無限の彼方へ！！

俺の身体を包みこむ空気の圧。

流れる光景。

目の前に迫ってくる獣のモフモフの背中。

衝撃を受け流しやすいように空中で身体を一回転させる。

回る視界。

背中から獣の背中に飛び込む。

死ぬかと思った。

だけど、そんなのは一瞬で気が付けば身体をモフモフした物が包んでいた。

さあどうする、おれ。

このまま寝る

戦う

和解の道を考える

やっぱりね、命の恩人、いや恩獣おんじゆうと戦うのは気が引ける。
別に怖いからではない、多分。

『我が背中の君よ』

……ん？

なんだ、耳の鼓膜じゃない。

なんかこう……頭に直接響いてくるようなこの声は一体なんだ？

『そなたは、白衣の勇者アルタイルか？』

「お前か、俺に話しかけている奴は？」

俺の質問に声の主は答えなかった。

『ふむ、彼の末裔か』

末裔とは俺のことを言っているのか？

『アルタイルは、強かった。我らが幾ら束になろうとも彼には傷一つ負わせることが出来なかった』

何か、一人で語りだしたよ？

『彼はその頃の長とある契約を結んだ。彼と彼の血縁者を支える藁となることを』

もしかすると、あれか？

あの木の下で待機していたのはアルタイルの末裔である俺が居たからか？

悩んだ意味ないじゃん。

『町でも我の手の者が各所に居る。迷ったら話しかけるといい』

町にもいるのか、お前ら。

『荷車を引く者もいれば、家畜として生活する者もいる』

すげえな、お前ら。

『これからそなたは、東のアナトーリアへ行き装備を整え王女様にこれを渡してくれ』

東って、あの大きなお城？

『そうだ。そこでこの手紙を王女様に渡してくれ。このペンダントを見せればすぐ通らせてくれる』

毛と毛の間に挟まっていたのは、いたって普通の手紙と、ローマ字のAを象ったペンダントだった。かたどき
というより何処行く気だ、こいつ。

さっきから歩いているのはわかるのだけど、こいつの体毛の中にあるので外の景色はわからない。

『降りる。ここからは徒歩だ』

体毛の中から出るとすぐそこに、あの大きな城の城壁が見えた。

『そつだ、そなたの名は何と言いつ?』

ああ、そういえば名乗ってなかったな。

「俺は蓮。神使蓮だ」

『レンか。いい名だ。』

「お前は?」

『我が名はウールだ』

羊かよ、お前。

つか、見た目通りの名前だな。

……あれ?

こいつ装備を整えろとか言ってたけど、お金は? 金はどうすんの?

俺、この世界のお金持ってないよ?

「ちよつ、まっ、俺はここらどうすればいいっ!?!」

フードの中に手を入れ頭を掻き筆る。

「うがーっ!」

とりあえず叫んでみたが、俺の叫びは虚しく虚空を響かせ消えただけだった。

何この虚脱感？

前途多難という言葉は俺の為に存在する言葉なのさっ！！

第3話：異世界（後書き）

誤字脱字の報告や感想お待ちしております。

第4話：王女イルネ・ハシーシュ・フェルト

異世界ってすごい。

だって金髪や赤髪が普通に居るんだもん。

お、ウールみたいなのがで荷車をひいてる。

頑張ってるな。

次に目を引いたのは、見たことも無い不思議な形の果物や野菜。どれも初めて見る物ばかりだ。

「どうだい、おいしいトマトだよー」

元気な緑髪のおやじさんが差し出すのは

「何だこれ？」

トマトのトの字も無い異形の物体。

強いて言うならば、紫色のトゲトゲした球体。

これがトマト？

ありえないだろ。

むしろ、変色したもやっとなボール？

「そこのお兄さん、一つどうだい？」

ん？

俺のことか？

「試しに一個食ってみて、うまかったら二つ買ってくれよ」

しかし、俺には金が無い。

俺は意を決して言う

「すみません、今は一文無しなんです」

恥ずかしいが本当の事なので仕方ない。

「ハハハ、盗賊にでも盗まれたかい？」

おやじさんはがははと豪快に笑い俺の背中を叩く。
少しだけ痛かった。

「ええ、お恥ずかしながら」

心が少しだけ痛かった。

異世界から来たのでお金を持ってない、だなんて言える訳が無い。

「それは可哀相に。あ、そこのお姉さん一つどうだい？」

そこに居たのは、20歳ぐらいの金髪の女だった。

何なに気に話し相手を変えたな。

お金持ってないと知ればすぐそれだ。

世界違えど、大人の考え方は同じだな。

取りあえず批判するのは悪い癖だ、治そう。

気を取り直して目的地を見る。

目指すは、王女もへの下だ。

こんなところで時間をつぶすより、王女のそこ行くほうが重要だ。
ん？

まあいいや。

まずは、城の門だな。

おお、でっけーな。
遠くからでも大きく見えたけど、近くで見るとまた一段と大きく見えるな。

「おい、そこのお前！！このアナトリア城に何の用だ！！」

門番が声をかけてきた。

落ち着け、COOLになるんだ、俺。

ウールが言うにはペンダントを見せれば良いんだな、確か。

「ここ王女様に用件がある。門を通してくれ」

そう言うと懐からもらったペンダントを取り出す。

ええい、頭頭が高い、控えおろー。

門番の顔色が青くなる。

「も、申し訳ありません！！勇者様アサシンとは気付かず！！」

水戸光圈になった気分だ。

ん？

まだいるのか。

待合室で待つこと10分。

「おお、そなたが勇者か！待っておったぞ！！」

おお、たくましいお髭だことで。
板垣退助もびっくりなお髭の王様。
そして、この世界で珍しい黒髪だ。
歳のせいかわ髪が混ざっているものの中々の髪のみだ。
しかし、俺は王女に会いに来たんだ。

「今回は、王女様に用があつてアナトーリア城へ立ち寄りまして。
王女様はどちらに？」

「勇者よ、令娘はおらん」ここにおります、クシャトルカ国王」

ん？

ああ、さっきからついてきてたのは王女か。

あの、トマト（仮）を売つてたおやじさんが言つてたお嬢さんがこいつ。

……やばい。

本来はもう少し驚くべきシーンなのに、なんか冷静に対処しちまつてる。

まあ、ただのストーカーかと思つたが、大物のストーカーだとは。でもさつきまでこいつ、金髪じゃなかつたか？

いまでは、日本人顔負け、もとい髪負けの黒髪だ。

一体なにがあつたんだ？

染めたか？

「申し訳ありません。自己紹介が遅れました、アナトーリア帝国第34代目王女イルネ・ハシーシュ・フェルトです。」

というか、服すら変わつてね？

どんな手品だよ。

第4話：王女イルネ・ハシーシュ・フェルト（後書き）

アクセスが1000を超えました。

感想等や誤字脱字の報告お待ちします。

第5話：彼の残したモノ

「自分は、蓮。神使蓮です。こちらこそよろしく申し上げます」

「それで、私に用件があると言いましたが、その用件とは？」

「貴女にこの手紙を」

そう言いウールから預かった手紙を渡す。

王女はウールからの手紙を読むと、その顔を驚愕に染めた。

「まさか、テンプル騎士団が…!?!」

テンプル騎士団だと？

この世界にも騎士団は存在するのか。

アサシンクリードに登場し、アルタイルが所属するアサシン教団と敵対しており、世界征服を目論^{もくろ}む悪役組織だ。

少し厄介なことになりそうだな。

「クシャトルカ国王に申し上げます、騎士団にエデンの果実の在り処を知られてしまったようです！」

エデンの果実とは、俺にも詳しくはわからないのだが、人の心を操ることができる野球ボールサイズの道具だ。

「勇者様、アサシン・アルタイル様より預かっている物がございませ。どうぞ、こちらへ」

イルネがそう言い俺を手招きする。

「では、失礼します」

王様に頭を下げ、退室する。

「着きました、この扉の向こうにそれはあります」

案内されたのは、階段を下りた地下。

「それ？」

「はい、この先は勇者様のみしか立ち入ることが出来ません。故に誰も預かったモノを見た者は居ないのです」

アルタイルの残したモノか。
一体なんだろう。

「では、ペンダントを扉の中央に差ししてください」

よく見れば、扉の中央に窪みがある。

ここに差すのか。

「差ししましたら、右へ90度回転させて下さい」

ペンダントを回すと扉の向こうで何かが落ちる音がした。
軋む音を発しながら扉は開いてく。

部屋の中は真っ暗だった。

光すら通さない、闇。
漆黒。

それは、暗殺者の生き様の様だった。
影から影へ。

影に生き、影に消える。
ならば、やることは一つ。

【イーグルアイ】
識別する事のできないモノを識別できるようになる、アサシン必須のスキルだ。

「これが…?」

俺の瞳に映るのは、床に走る一本の線。
とりあえず、この線を辿るとしよう。

この先に待ち受ける遺産とは何か。
彼が残した遺産とは。

目指すはアルタイルの遺産。

第5話：彼の残したモノ（後書き）

誤字脱字の報告や感想お待ちしています。

第6話：彼の過去

ひたすら、暗闇の中を歩く。
ただ一本の線を頼りに。

5分ほど歩いたところで、変化があった。

「トイレに行きたい」

俺の身体が尿意を訴えてくる。

どうする？

引き返すべきか？

『どうせ誰も見ていないんだ、誰にもバレやしないさ』

心の悪魔が囁く。

『こんな暗闇じゃ、誰もわからないさ』

まあ、確かに。

しかし、こんな所で用を足すのは気が引ける。

『そんなのは最初だけだ。慣れちまえば平気さ』

慣れたら駄目だろ。

『昔の人は草むらでやってたんだぞ？』

我慢だ、我慢。

『おい、俺を無視する気か？』

無視だ、無視。

さらに5分歩いた（我慢した）ところで、変化があった。ちなみに、漏らしたわけでは無い。変化があったのは周りの方だ。

「なんだ、これ……？」

いきなり、周辺に光ができたのだ。

松明たいまつに火が灯り、周囲の光景が見えるようになった。

目の前には、人の形をした石像があった。

石像の人物は深くフードをかぶっており、顔を見る事は出来ないが、俺には分かる。

「アル…タイル？」

かすれた声でその者の名を言う。

石像は何かを掲げていた。

それは【エデンの果実】と呼ばれるモノだった。

アルタイルの残したモノはこれの事か？

『一つ、罪無き者を傷付けるべからず』

何処からか男の声が聞こえてくる。

『二つ、常に深慮深くあれ』

また男の声だ。

「誰だ、何処に居る!？」

『三つ、兄弟の身を危うくする事なかれ』

鼓膜に聞こえる男の声の台詞セリフは何処かで聞いたことがある。
たしか、暗殺者の三つの掟とかいうやつだ。

「何処に居る、姿を現せ!!」

俺は辺りを見回しながら叫ぶ。

『アサシン勇者の血を引き継ぎし者よ、我が名はアルタイル・イブン・ラ・アハド』

「アルタイルだと!？」

声の主は自分をアルタイルと言う。

自分は伝説のアサシンドと。

声は語る。

『私はマリアと東へ行く為、船に乗った。しかし、その船は運悪く転覆し、私とマリアは海に投げ出された。』

本当にアルタイルなのか？

疑問が浮かんでは沈んでいく。

『気が付けば私とマリアは見知らぬ大地に居た。知らない大地に聞いたことも無い名前の国、そして、異形の怪物。ここが異世界だと気付くのにそう時間はかからなかった』

鏡の向こう。

鏡の神様。

ミラ、お前は何がしたいんだ？

俺に何をさせたい？

何が望みだ？

『この世界の人は魔術を普通に使う。どれも自分の居た世界ではありえないモノだった』

そう、俺にとっても魔法の存在は空想上のモノだと思っていた。

この世界に来るまでは。

鏡の神様に会うまでは。

『魔法の使えぬ私が盗賊に狙われるのは当然の事であった』

声に影が射す。

『突然だった、マリアが殺されたのは』

思わず言葉を失う。

『私は初めて【エデンの果実】を復讐の道具として使った。その後後悔の連続だった。悔やんでも悔やんでも、悔やみきれなくて私は自ら命を絶とうと思った、その時だった、マリアからの手紙を見つけたのは』

知らなかった、彼がそんな事にあつてたのは。

そして、これが鏡の話。

鏡の中に存在する。『もし、アルタイルとマリアが異世界に飛ばされたら？』と言つもしもの話。

そして、これがもしもの話に運命を狂わされた物語。

『彼女は、もしもの時を考えて私に宛てた手紙だった』

石像の持つ【エデンの果実】が光を放つ。

その光は俺を飛び越し、俺の後ろの壁に当たる。

その光は映像を映していた。

彼のこの世界でした事。

その全てがそこにあつた。

『二度とマリアみたいな犠牲者が出ぬよう私は【エデンの果実】を使い、平和な世界を造ろうとした。しかし、【エデンの果実】に魅せられた者たちが、これを何としても我が手中にしようとして武装蜂起した。それがテンプル騎士団の始まりだ』

光は人同士の戦いを映す。

切られては切り返し。

斬られては斬り返す。

そんな繰り返し。

『私はアサシン教団を創設した。そして、15年に渡る戦はアサシン教団の勝利に終わった。しかし、完全に騎士団を潰せた訳ではない。私と同じ様に異世界から異世界の技術を、力を持って異世界人がこの世界に来るだろう。だから私は、【エデンの果実】を10等分にしそれぞれ大陸の十箇所隠した』

光は地図を映す。

地図には赤い点が10個あった。

『ここに眠る【エデン^{ユニ}の果実】もそのひとつ。もし騎士団の手に渡るような事があれば、この世界は彼らに支配されることになるだろう』

この世界でも騎士団は騎士団か。

『集めよ、我が末裔よ。そして【リングゴ】を騎士団の手に落ちぬよ』

一拍置いて声は言う。

『そして、俺の代わりに【リングゴ】を誰にも触れられないように壊してくれ』

いいだろう、あなたのやり残したことをやってやる。

アルタイル像から【エデンの果実】を取る。

後は俺に任せろ、と言い、この場を後にする。

「あ、やべえっ！！」

ダムは崩壊しかけていた。

第6話：彼の過去（後書き）

遅れました、すみません。

第7話：会話

トイレ何それ？
食べるの？

「やってしまった」

前方の湯気立つ水溜り。

水溜りの正体はアレだ。

アルタイルの話を聞いている時はすっかり忘れていたが、話が終わると同時に尿意が再び襲って来たのだ。

あれこれ数十分我慢していた俺に耐え切れるハズもなく、アルタイルの石像の裏で行為に及んだのである。

後悔はしていない。

さて、やる事が出来たことだし、帰るか。

歩くこと数分、やっと入り口にまで戻ってきた。
とても長い旅だった。

そう、とても長い旅だった……。

「お帰りなさい、アサシン勇者様」

扉を開けると、眩いばかりの光と声が飛び込んできた。
声の主は、イルネ・ハシーシュ・フェルトか。

「俺を待っていたのか？」

「はい、クシャトルカ国王より伝言があります」

ああ、髭のたくましいおじさんか。

「お疲れ様です。こちらでお部屋を用意したので泊まっていくと良い、だそうです」

「そうか、感謝する」

なにせ、一文無しだからな。

最悪野宿かと思っただが……とりあえず、早くお金が欲しいです。少しだけニートに嫉妬した俺が居た。

「では、案内します」

「……………」

数分歩いているが、会話がまったく無い。

これでは、無言のプレッシャーに圧死されそうだな。なんと少しでも、会話をねば。

「そつだ、なんで君は俺が勇者だと分かったの？」

俺ながら良い質問だ。

「君……？君とは私の事ですか？」

ごめん、それ質問の答えになってない。
むしろ質問を質問で返してるよ。

「聞いているのですか？」

というか、俺が聞いているんだけど？

「ああ、聞いている」

「では、質問に答えてください」

最初に質問をしたのは俺なんですけど？
俺の質問の方が先だったよね？

「君は君。他に誰が居るんだ？」

「私は君ではなく、イルネ・ハシーシュ・フェルトです」

ああ、そう言うことか。

「じゃあ改めて聞くけど、イルネはなんで俺が勇者だと分かったの？」

「まずは貴方のその雰囲気ですね」

「……貴方？」

これは仕返した。

「貴方は貴方。他に誰が居るんですか？」

……デジャブ？

これ、なんてデジャブだよ。
仕方無いな。

「俺の名前は貴方ではなく、レンだ。まあアルタイルでもいいが」

「ああ、そう言うことですか」

そう言い、納得したような表情で頷く。
つか、わざとやってるだろ、あんた？

「はて、なんの事かわかりませんか？」

ニヤニヤとした笑顔で話しかけてくるイルネ。

「いいや、なんでもない」

少しだけ、彼女の事が分かった気がする。

第7話・会話（後書き）

月曜日から、自然学習へ行ってきましたので、4日間更新できません。

第8話：仲間

イルネに案内された部屋は普通の部屋だった。
そう、普通の部屋。
ある一点を除いて。

「ここにもアルタイル、か」

部屋のと真ん中にアルタイル像が突っ立っていた。

「もう、寝よう」

数十分後、俺はまだ寝付けずにいた。

もちろん、寝付けないのには理由がある。

アルタイル像の視線だ。

アルタイル像がずっと部屋の真ん中から俺を見ているのだ。

「眠れねえ」

ガサッ

部屋の外に誰か居るな。

念の為にベッドの下に隠れるか。

ガチャ、ギギギ。

誰かが入ってきたな。

ソイツはベッドの傍へ歩いて来た。

ベッドから上半身を出し、相手の足首を掴みベッドの下へ引きずり込む。

左手を反らす。

左手首の鞘から飛び出る刃。やいば

そして、飛び出た刃を素早く相手の首筋に突きつける。

その名も【アサシンブレード】。アサシン必須のアイテムだ。

「用件はなんだ？」

「……。」

「もう一度聞く、用件はなんだ？」

「…勇者アサシンの暗殺」

テンプル騎士団の回し者か？

「どこの回し者だ、お前」

「テンプル騎士団」

やっぱり、あいつ等か。

もう俺の事はあいつ等に知れ渡っているのか。

予想以上に早いな。

「じゃあ、お前の名前は？」

「…ストレイド」

「俺が聞きたいのはコードネームじゃなくて君の名前」

「ウエンディー・ファンクションだ」

「ウエンディー。お前に選択肢をやる。俺の手となるか、今すぐここで死ぬか」

要は、スパイになるか死ぬかだな。

「だ、誰がお前如きに！！私は神にこの体と魂を捧げた身。いまさら、死など恐れるものか！！」

死を恐れない、か。

「残念だ、いまずぐ楽にしてやる」

左腕に力を込める。

ふに

左腕に触れる柔らかい感触。

それは女性のみしか持ち得ることの出来ないものだ。（肥満体質な男性を除く）

思わず飛び退こうとしたのだが、場所が悪かった。

ここは、ベッドの下。

俺はあえなく後頭部をベッドに強打した。

「……。」

下から冷たい視線が。

「おい、何か言えよ」

無言はやめてくれ、頼むから。

「……。」

あくまで黙りきるつもりか。

「お前が何も話さないならお前は俺の奴隷になれ、話すのなら俺の相棒にしてやるっ」

「ど、奴隷になってまで辱めを受けるくらいならば、今ここで舌を噛んで死んでやる！！」

俺はソイツの口の中に右手の指を入れる。

「どつだ、これでおまえは舌を噛んで死ぬことはできない……ぞっ！
？」

痛い。

コイツ俺の指ごと噛んできやがった。

仕方無い。

ほんとは、こんな物は使いたくなかったんだけどなあ。

『仕方無い。お前は俺の仲間だ、相棒だ』

【エデンの果実】の欠片を魅せる。

欠片とは言えこの力は少し危険だな。

気を抜くと俺まで魅せられそうだ。

「今後ともよろしく勇者^{アサシン}。」

罪悪感が俺の心を走った。

第8話・仲間（後書き）

感想等お待ちしております。

裏話：イルネ視点

彼は本当に勇者アサシンなのだろうか？

どう考えてもありえない。

実はテンプル騎士団のまわし者ではないか？

頭から疑念は立ち去るところか、その数を増やしていく。

「試してみましようか」

独り言は私の悪い癖だ。

しばらく自問を続けていると彼が帰ってきた。

彼が本物が確かめてみましようか。

「お帰りなさい、勇者様」

「俺を待っていたのか？」

貴方のせいで足が痛くなってしまいましたよ。

私は何分、いえ何時間待ったと思います？

もう日が暮れてしまいましたよ。

「はい、父上より伝言があります」

はやく、トイレへ行きたいです。

というか、何故私はずっとここに立ち続けていたのでしょうか。

こんなに時間がかかると知っていれば、トイレに行っていたのに。

「お疲れ様です。こちらでお部屋を用意したので泊まっていくと良い、だそうです」

私は平静を装い、父の使いが言っていた伝言を伝える。

彼を案内するまでだ。

頑張れ、私。

我慢するんだ、私。

「そうか、感謝する」

「では、案内します」

「……。」

彼が本物かどうかなんて、どうやって確かめれば良いのでしょうか？よく考えてみれば分かりませんわ。

「そうだ、なんで君は俺が勇者だと分かったの？」

これはチャンスだ。

彼が本物かどうかの。

「君…？君とは私の事ですか？」

しかし、許せないモノがある。
名前の事だ。

「聞いているのですか？」

「……………」

「ああ、聞いている」

聞いているなら答えなさい。

「では、質問に答えてください」

「君は君。他に誰が居るんだ？」

「私は君ではなく、イルネ・ハシーシュ・フェルトです」

みんなそうだ。

私の名前を呼んでくれるのは、母上と父上だけだ。

昔は良かった。

乳母のタリアアさんもメイドの方々も皆、身分に関係なく接してくれた。

でも今は……………」

「じゃあ、イルネはなんで俺が勇者だと分かったの？」

「まずは貴方のその雰囲気ですね」

民間人のような無警戒というよりは、騎士とかそういった者達の警戒のような雰囲気だった。

「……貴方？」

わざと言ってしているのでしょね。
さしずめ、先ほどの報復のつもりでしょうけど、私には通じませんわ。

「貴方は貴方。他に誰が居るんですか？」

この廊下には召使はおるか、私とレン以外に誰もいない。
いるとすれば、頭の中のお友達くらいではないだろうか。

「俺の名前は貴方ではなく、レンだ。まあアルタイルでもいいが」
今更ながら頷くそぶりをみせる。

「ああ、そう言うことですか」

そんな演技はバレバレだというように疑念の視線を送る勇者。
さては、『わざとやってるだろ』と思っているのでしょね。

「はて、なんの事かわかりませんが？」

あくまで、ポーカーフェイスな私。

「いいや、なんでもない」

結局、彼が勇者かどうかは分からなかった。

「あつ、少し辛いですね」

レンを部屋まで案内したあと、私は人目も気にせず廊下を駆けた。

私は無事、時間内に目的の場所にたどり着けた。

あと10秒でも遅れていたら危ないところでした。

することは終わったのでスッキリした気分を胸に自分の寝室へ向かう。

私は寝室へ辿り付くまで、今日のことを振り返っていた。

私が彼の存在に気付いたのは、偶然だった。

私がつものように城から城下町を眺めている時のことだった。

突然、アスピシアンの方角にて膨大な魔力が収束しだしたのだ。まさか、テンプル騎士団が儀式魔法を！？

あれだけの魔力をぶつけられたらこのアナトーリアは壊滅するだろう。

「イクパール【神壁】！！」

次の瞬間、透明なガラス状の壁が四方に展開、部屋と私を包み込んだ。

私が今、出来る最大の守護結界系の魔法だ。
しかし、これだけでは私と私の部屋ぐらいいしか護れないだろう。

「…………え？」

突然、森に現れた魔力が霧散しつつあった。

「儀式魔法に失敗したのでしょうか？」

一応、騎士団の手の者が城下町に入りこんでいるかもしれない。

「ディストレション【変換】」

自慢の黒髪がみるみるうちに金髪へと変わる。

と言うのは嘘で、ただ単に金髪のかつらを被っただけである。
服も上に少しばかりボロいコートを羽織る。

これで変装は完璧だ。

さあ、城下町へ行ってみましょう。

召使や門番に気付かれぬよう城の裏口から出る。

城下町の様子はいつも変わらなかった。

ある一点を除いて。

白いフード付きの白衣を纏った青年がいた。

別に居るだけなら良い。

フードも旅の者や一部でファッションとして使われているため許容範囲内だ。

怪しいのは彼の態度だ。

まさに挙動不審だ。

それでいて、何かを警戒しているような視線の走らせ方。

「何だこれ？」

青年の視線の先にはトマトがあった。

そのトマトはここから見るかぎり普通のトマトだ。

「そこのお兄さん、一つどうだい？」

トマト売りのおじさまが青年に話しかけた。

「試しに一個食ってみて、うまかったら二つ買ってくれよ」

「すみません、今は一文無しなんです」

一文無し？

それほどの服装でいて？

「ハハハ、盗賊にでも盗まれたかい？」

「ええ、お恥ずかしながら」

確か、騎士団は専用の金貨しか持っていないとか聞いたことがある。まさか、彼も騎士団の一員か？

「それは可哀相に。あ、そこのお嬢さん一つどうだい？」

「いいえ、今はお腹がいっぱい」

ああ、フードの青年が行ってしまつ。
待つて。

イーグルアイズ
【鷹の義眼】を使う。

「……え？」

魔力が見えない？

嘘、なんで？

【鷹の義眼】を使うことによって、魔力の流れや魔力の系統を認識できるはずなのだが。

おかしい。

彼には魔力がないのか？

実際にはあるのだが、彼の場合は本当に魔力が少ししかなく、少しでも集中力を切らすと見逃しそうな程だった。

「少し後を追ってみましょうか」

独り言は私の悪い癖だ。

裏話：イルネ視点（後書き）

自然学習から帰ってきましたのが三日前。
更新が遅れてすみませんでした。
誤字を修正しました。

第9話：夜は長い

「いいおもちゃを持っているようだな、アサシン？」

声の発信源は目の前に居るウエンディーからじゃない。
そして、【エデンの果実】の存在を知っている？

「私にもそれを貸してくれないか？」

テンプル騎士団からの刺客は一人だけじゃなかったってことが。

「もし、嫌だと言ったら？」

「武力行使する。そして、お前もついでに殺す」

ハッキリ言っなよ。

もう少しオブラートに包んで言えよ。

「じゃあ、逃げる」

「いいのか、アサシン。お前の兄の事は知りたくないのか？」

兄^{けん}。

それは、最低最悪の生物。

俺はあのバカ兄貴のせいでいつも影に隠れてしまっていた。

頭が良くて、運動神経抜群。

そして、女と駆け落ちしたとかしてないとか噂の兄貴。

只今、音信不通である。

「兄貴を知っているのか…？」

この世界に兄貴が来ているのか？
だとしたら一体何をしているんだ？

「ああ、知っている。鬱陶しいほどにな」

この世界で何をやらかしたんだよ。
うちのバカ兄貴は。

「どうだ、アサシン。こちら側に来ないか？」

「こちら側とはなんだ？」

ベッドの上側のことか？

「お前の知らないところで起きている戦に勝利し、世界を手に入れる側のことだ」

やはり騎士団は騎士団か。

この【エデンの果実】の力を使って世界征服を企むとは。
なかなかの悪役っぷりだな。

「せっかくのお誘いだが、断ろう」

俺は勇者だ。

魔王の手先になるものか。

「そうか、残念だ」

ベッドを貫いて飛び込んで来る剣。

ウエンディーを突き飛ばし、自分も横に転がりベッドの下から脱出する。

剣は見事俺の頭のアツた場所を突いて床を抉っていた。ベッドを剣で突き刺してる相手を確認する。

ああ、あのベッドフカフカで気持ち良かったのになあ。

「ほお、この剣を避けるか。さすが、アサシンといったところか」

神（自称）に身体を強化されたぐらいだからな。

「まあ、主人公だからな」

相手に聞こえぬよう、小さい声で呟く。

「まあいい、片付ける」

窓から。

ドアから。

天井から。

計5人の男どもが出てきた。どこから湧いてきやがった。

「テンプラーレッド!!」

赤い十字架を背負った赤いマフラーの大男が叫ぶ。
暑苦しいことこの上、極まりない。

「テンプラーブルー!!」

青い十字架を背負った青いマフラーのノツポが喚く。
見るからに肉不足だ。

「テンプラーイエロー!!」

黄色い十字架を背負った黄色いマフラーのデブが唾を飛ばす。
すんげえ、汗臭い。

「テンプラーピンク!!」

桃色の十字架を背負った桃色のマフラーの女おとこがおかま変態宣言する。
人生終わってるな。

「テンプラーゴールド!!」

金色の十字架を背負った金色のマフラーの露出凶が自らのゴールド
ンなアレを見せ付ける。

まあ、危ない所にはマフラー（ふんどし）があるから良しとする。
城の警備は相手に筒抜けってわけか。

「さあ、どうするアサシン？」

戦うに決まってるだろ。

第10話：夜は続く

『俺は敵じゃない』

光を放つ左手の【エデンの果実】。

正面から武器を持った大の大人に戦いに行くのは正直無謀すぎる。せめて、武器らしい武器を手に入れてからだな、正面突破するのは、やがて男どもの目の焦点が合わなくなり、

「そつだな、俺らは友達だもんな！」

レッドが叫ぶ。

他の奴らもレッドの言葉を機に

「同じカレー同窓会のメンバーだもんな」

とイエロー。

「さあ服を脱いで一緒に穢れなき新世界へ旅立とう！」

とゴールド。

っていうかこの世界にもカレーってあるのか。

そして、ゴールド。

お前は自重しろ。

「【エデンの果実】を私によこせ」

しかし一人だけ、しっかりと刃物のように鋭利な視線を放つ者がいた。

【エデンの果実】が効かないだと？
どれだけチートなんだよ。
実はお前がラスボスとか裏設定とかあるの？

「驚いているようだな、アサシン？」

ああ、驚いているとも。

「それじゃあ、種明かしといこうか」

そう言っただけが掲げたのは、腰に提げている袋。
そして、袋の中身は。

「そう、お前の持っているのと同じ【エデンの果実】の欠片だ」

奴の左手の内には、俺の【エデンの果実】と同じ光を放つ【エデンの果実】が握られていた。

「何故、お前がそれを持っている…？」

「愚問だな、アサシン。リンゴの在り処を知ってるのはお前だけではないということだ」

やばいな。

これじゃ、【エデンの果実】を取りに行くのも大変そうだな。

「それじゃ、第2ラウンドでも始めるか」

今夜は長くなりそうだな。

第11話：駆けつけた愉快な仲間たち

「おいー十字架 クロス 一色 カラーズ、いい加減遊ぶのはやめろ」

くろすからーず？

一変態の五人組 こいつら のことか。
どうせなら、変態ゴールドと愉快な仲間たちだろ。

「仕方ねえな、本当は丸腰の相手しかも子供を大人数で弄り殺すだなんてしたくなかったんだけどな。」

「おい、レッド何を言っているんだよ。『俺たちは仲間だろ？』」

何故だ、【エデンの果实】の力は効いてる筈だ。

「まさか、お前らも【エデンの果实】の欠片を…？」

なんでテンブル騎士団が【エデンの果实】の在り処を知っているんだよ。

おかしいだろ。

「テンプラーズの持つてる【エデンの果实】は私が持つ【エデンの果实】のコピー品だ」

コピーできるのかよ、これ。

「残念ながら他人の心までは操れないが、【エデンの果实】の力を打ち消すことができるのだ」

まあ、コピー品だからな。

「だがなアサシン。他の【エデンの果実】は騎士団の手の者が持っている、残念だったな」

ピンチだぜ、ピンチ。

七対一だぜ。

「残るは俺の【エデンの果実】だけってことか」

「理解できたようだな、アサシン。」

しましたよ、嫌になるくらい。

「さあ、七対一だ。いくらアサシンと言えど武器無しに戦って勝てるかな？」

「いや、七対三だ」

主人公がピンチの時には、大抵仲間が駆けつけたり新しい技が目覚めるものだ。

まあ、俺の場合は仲間と呼べるかどうかも怪しいがな。

その黒い白衣に走る紅いライン。

腰の紅い腰帯。

ワンショルダー式のマント。

左腕の箆手。

「来るのが遅いぞ、バカ兄貴」

こんな状況だ。

味方になってくれるのはありがたい。
しかし、なんで今になって現れた？
あんたは、今度は何を企んでるんだ？

「可愛い弟のピンチに現れない兄がいるもんか」

心を読むだと？

この世界では読心術は初期スキルなのか？

クソ、かつこつけやがって。

主人公の座は俺の物だ。

いくら血が繋がっているとはいえ、これだけは譲れないぞ。

「いつから俺の兄貴は二人になった？」

じゃなかったら七対三にならない。

「見て分からないのか？」

分からないから言ってるんだよ。

「あの子が三人目だ」

兄貴の視線を辿ってみる。

その先には。。

「…ウインディー？」

綺麗な装飾の施された刀身の細い剣を正面に構えたウインディー・
レイピア

ファンクションの姿があった。

「なんでお前が…私の体に一広範囲型の火炎系魔法　バクダンを憑けただろっ?」

俺の質問は無視ですか。

「フン、やはり気付いていたようだな、さすが私の妹だ」

まさか自分の妹を爆弾にするだなんて。

うちのバカ兄貴でもそんなことはしない、多分。

「じゃあ、俺はこの五人組を相手するから弟と君はあそこの怖いお姉さんの相手をしてくれ。こっちが片付き次第そっちを手伝うから」

「おい、武器無しに敵のリーダーの相手はキツイぞ。兄貴は何か持っていないのか?」

実際には【アサシンブレード】があるのだが、これは本来戦闘用ではない。

「無い。まあ、成るように成るさ、頑張れ」

これで死んだら、あんたの所為だからな。

第12話：伊達に勇者じゃない

「妹とて私の邪魔をするのであれば容赦はしない」

「いや、そこは容赦しろよ」

「見かつこよく聞こえるセリフだが、実際に言われると恐怖しか感じない。」

「…そういえばお前にはまだ名乗ってなかったな、私の名はウィンシー・ファンクシオン。テンプル騎士団のリーダーだ」

今更過ぎるわ。

「アサシン、お前も名乗れ」

ここで本名だしたら暗殺者失格だよな。

一つだけ、頭に思い浮かんだ名前がある。

「俺はアルタイル。勇者だ」
アサシン

やっぱりアサシンと言ったらこれしかないだろ。

エツィオ・アルディトーレでもいいけど、あれはH男エツィオだもんな。

「では、一戦交えるとするか」

張り詰めた空気。

肌に突き刺さる殺気。

隣で散る火花と人の命。

宙を舞う青きマフラー。
その持ち主はもういない。

交わる視線。

静寂を切り裂いたのは、ウィンディーだった。

細剣を構えながら自分の姉へと一直線に駆ける。
レイビダ

ウィンシーの懐に潜り込むと構えた細剣を下から上へと斬り上げる。

それを姉は右腰から引き抜いた白い直剣で軽く受け流す。
ソード

相手の表情を見るからに動きを読んでいると推測できる。

俺も参戦するか。

左手を思いつきり反らす。

内手首から飛び出す刃。

俺の唯一の武器、【アサシンブレード】。

ミラの言うことが本当ならばチャンバラぐらいできるハズだ。

一步、二歩。自分とウィンシーとの距離を詰める。

俺の動きに気付いたウィンシーが左腰から黒い反りの有る曲剣を引
ブレード

き抜いて迎撃体勢をとる。

三步、四歩　　左腕を振り上げる。

全身を使って、軋ませて、しならせて、上段から左腕を振り下ろす。

だが、彼女は右腕の黒い曲剣を構え顔面を護ろうとする。

次の瞬間、俺の【アサシンブレード】の刃が曲剣の刃を叩いていた。

耳に響く、金属と金属のぶつかる音。

飛び散る火花。

しかし、彼女の腕はびくともしない。

「はあっ！！」

右足で相手の腹部を蹴り上げる。

彼女はそれを後ろへステップすることで回避する。

「しまった！」

予想外なのが、ウエンディーも斬撃の後に蹴りをしていたようでウインシーが回避したことによって

彼女の足と俺の足は直線上に並んでしまったことだ。

今更勢いの付いた足を止める事が出来るはずもなく。

案の上、脛すねと脛がキスをした。

「うぐっ!?!」

と俺。

「くっ!?!」

とウエンディー。

あの弁慶も涙を零すのも納得だ。
痛い。

すんげえ、痛い。

「馬鹿め」

痛みに悶える俺を彼女が見逃すはずもなく。

「死ね、【フレイムブレイド火炎の剣】！」

炎を纏うウインシーの剣。

その剣の横振りを左手の【アサシンブレード】で受け止める。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
真つ赤な血がわき腹から、右肩から噴き出す。
これは、誰の血？

俺の血。

痛みと共に俺の腹から、肩から血がぼたぼたと音を立ててこぼれ落ち
ちて行く。

床に真つ赤な血が広がっていく。

赤い池が出来ていた。

ぴちゃり、ぴちゃり、血がこぼれ落ちる。

あの剣から、俺の血が。

第13話：夜の終わり

「ほお、すごい生命力だ。さすが、アサシン」

ウインシーが感嘆の声を洩らす、今の俺には聞こえない。
腹と肩が焼けるように痛い。

でも、まだ生きている。
生きているんだ。

「殺^キるなら心臓を狙わなくてはならないな」

血は止まり始めた。

まだ、俺は戦える。

「伊達に勇者じゃないことさ」

兄貴が俺の前に立つ。

テンプラーズと戦ってるはずの兄がここにいる。

それが意味することは彼らの死だった。

決して広いとは言えないこの部屋の端で折り重なり倒れる身体。

自分の持ち主に穴を開ける青い十字架。

穴の開いた身体。

手足が不自然な方向に曲がる身体。

手が、足が皮一枚で繋がる身体。

俺が居た世界では一度も見ることがない。

俺は命の無い身体の事を何と云うか知っている。

死体。

伸縮する胃。

波打つ背中。

喉にこみ上げる熱い何か。

俺は必死に込み上げるモノを抑えようとするが、遅かった。
我慢の限界だった。

自分の口から白い床へと吐き出される嘔吐物。

その放つ異臭は生臭い血の臭いと混ざり更に強烈な臭いと化していた。

「どうやら死体を見るのは初めてのようだな、アサシン」

ウィンシーが言う。

「当たり前だ。当然、見たこともなければ殺したこともない」

ウィンシーへと言葉を返す。

「そんなことでは、私は倒せんぞ？」

ウィンシーの言う事は正しい。

この世界では、前の世界の常識が通じないことも知ってる。

「お前とは違い、他人の命を思いやる心があるんだよ」

俺の代わりに兄が答える。

しかし、俺は他人の命を大切にしようだとか思わない。

「まあいい、ここは退く。次に会う時に期待する」

ウィンシーは左右の腰に掛けてある鞘に二本の剣を差しながら窓際まで後退する。

「また会おう、アルタイル。」

窓から身を躍らせるウィンシー。

「待て!！」

窓まで走ってそこからウィンシーの姿を探したが、窓から見えたのは城下町とそれを照らす月だけだった。

「さすがに自動修復機能付きの【アサシンプレード】でもこれはキツいな」

兄が折れた【アサシンプレード】の刃を持って来た。

「レボナルド・ラウインチという男を訪ねろ。城下町の北区だ。俺からの紹介だと言えればいい」

俺は折れた【アサシンプレード】を兄から受け取る。

【アサシンプレード】の刃は修復機能のせいか刃こぼれはしていなかった。

「そのレボナルドというのは知り合いか？」

「ああ、そのようなものだ。とりあえず、空気化している彼女をどうにかしてくれ。視線が怖すぎる」

兄はさっきから黙り込んでこちらを睨み付けているウェンディーを指差す。

「時間か。蓮、この世界でお前が何をしよう構わないが、俺の邪魔だけはするな。わかったな？」

念を押す兄に頷く俺。

「じゃあな」

兄はそう言うと腰に差した銀色の直剣で何も無い空間を斬る。

銀色の閃光の走ったところには穴ができていた。

虚空。

兄はその穴へと足を踏み出した。

穴は兄を飲み込むとその口を閉じた。

そこで、アルタイルは記憶の海を探るのを止めた。

兵士たちもあきらめた頃だろう。

アルタイルは藁の山から出ると、アサシン教団の支部へと歩き出した。

第13話：夜の終わり（後書き）

感想等お待ちしております。

第14話：レボナルド・ラウインチ

1436年

アサシン教団の支部の入り口は屋根にある。関係者以外に悟られないようにするためだ。しかも、普通の入り口から入れば中は花屋や民家といった念の入りようだ。

「おお、アルタイルか！」

アサシン専用の入り口から入ったアルタイルに声を掛けてきたのは、協力者である赤い髪を後ろで束ねたレボナルド・ラウインチという男だ。

「なんだ来ていたのか、レボナルド？」

「ああ、それで私の作品の感想は？」

「さすが、レボナルドだ」

アルタイルは左腰の直剣に視線を落としながら答える。
この銀色に輝く片手用ワンハンド両刃直剣ロングソードとまだ右肩の肩当てとナイフホルダーはレボナルドがアルタイルのために作った物だ。

「だがこの直剣は片手用にしては少し重くないか？」

この直剣の色は白銀色。

金色の縁取られたこの剣の美しさは芸術品の域であるが、その見た目とは裏腹に凶悪なまでの切れ味と頑丈さを兼ね備えた業物だ。しかし、長所があれば短所もある。それがこの重量だ。

「それは慣れるしかないな。大体、私はアルタイルの様に片手で持てないぞ？」

「俺は身体を鍛えているからな」

「まあ、重さの件は短直剣か短曲剣で解決するしかないな」

「短剣系なら鞘はブーツに付けてくれ」

「ブーツにか？…別に構わないが」

アサシンクリードリネージを観ればわかる通り彼の短剣の鞘は右のブーツに付いている。

「鞘は右のブーツでいいな。他にご注文は？」

「いや、いまのところは特にない」

アルタイルは数秒考えるそぶりを見せたあと答えた。

「明日には出来ると思うから明日のお昼ごろに私の工房へ来てくれ」
レボナルドは顔に満面の笑みを浮かべながら、作るぞーっとな声を張り上げながら帰っていった。
アルタイルはスキップしながら怪しい笑みを浮かべながらエウサレ

ムの町を歩くレボナルドの姿を想像して苦笑する。
不審者として番兵に捕まらなければ良いのだが。

「どうだ、サーダナ・バ・アーラットの情報は集まったか？」

レボナルドと入れ違いにやって来たのはウエンディー・ファンクシ
ヨンだった。

そしてウエンディーの言うサーダナとは、エウサレム貧困地区で武
器商人達を牛耳る闇商人の男のことで、暴力を厭わない非情な性格
から、業者達に怖れられている。

そんな彼の正体はテンプル騎士団の幹部で、団員の武具は主に彼の
買い集められたものだ。

「奴は明日、エウサレムの貧困区へ護衛を数人引き連れて武器を買
いに行くそうだ」

「そうか、ぬかるなよ？」

「ああ、必ず仕留めて【エデンの果実】の欠片を回収する」

アルタイルはまだなにか言いたげな顔のウインディーに背を向けベ
ッドに飛び込む。

睡魔はすぐに襲ってきた。

第14話・レポナルド・ラウインチ（後書き）

7月20日・年代表記

第15話：追跡

吹き付ける風がフードを撫でる。

アルタイルは教会の屋根からエウサレムの貧困区の町並みを眺める。ターゲットであるサーダナ・バ・アラーットは6人の護衛を引き連れて出店の品に視線を走らせている。

アルタイルはそのまま宙へと踊り出た。

藁の山から出て、サーダナの後ろを歩くアルタイル。

「おい、この剣は一本何f（フイリツマ）円（マ）だ？」

ターゲットは出店の店員に剣の値段を聞く。

「はっ、その剣は一本6300fでございます、サーダナ様」

店員（カウ）が頭を垂れる。

「こんな鉄くずが6300fだっつ、ふざけてるのか!？」

「い、いえ、おふざけなど、そのようなことはっ」

店員が慌てて否定するがサーダナは怒りを静める様子は無い。

「こんな店など!?!」

サーダナは護衛の一人に何かを命じる。
命じられた兵士は腰の剣を抜くと店の商品を壊し始めた。

「行くぞ」

サーダナは店内で暴れる護衛はそのままに違う店へと5人の護衛を
引き連れて歩いていく。

「や、やめてください!」

店員が店で暴れる兵士の腰にしがみつき、やめるよう懇願する。
こんがん

「離せ!」

兵士は自分の腰にしがみつく店員を引き剥がした。
尻餅をつく店員に右腕の剣を振り上げる兵士。

「ひっ!」

店員は顔面に腕を交差させ頭部を守ろうとするが、そんなものでは
上段からの振り下ろしを防げるはずが無い。

アルタイルは兵士へと駆け出す。

兵士は自らに接近して来るアルタイルに気付かない。

地面を蹴り、自分に背を向ける兵士に飛び掛る。

左手を外側へ反らす。

飛び出る刃は兵士のうなじから喉を貫いていた。

そして、命も。

「ぐぶっ!」

店員が倒れこむ兵士の下敷きになったが、死ぬよりはマシだろう。アルタイルは騒ぎが大きくなる前にこの場から離れた。

「品切れだと!?!」

ターゲットのサーダナはまた違う店で怒鳴る。

「申し訳ありませんっ!」

店員が頭を地面に擦り付けながら謝罪する。

「こんな品揃えの悪い店などいらん!」

今度は二人の兵士に命じる。

「バカめ……行くぞ」

サーダナは護衛を3人引き連れて隣の店へと歩き出す。

「そ、そんな、待ってください、サーダナ様!」

店員がサーダナに手を伸ばそうとしたが、兵士にその手を拒まれてしまった。

「その汚らしい手で、サーダナ様に触れようとするとは!」

一人の兵士が店員の後ろに回りこみ脇の下から腕を回し、ガツチリとホールドする。

そしてもう片方の兵士が身動きの出来ない店員の腹に拳を入れる。

何度も何度も。

しかし、アルタイルは動けなかった。
まだ隣の店にターゲットがいるのだ。

ここで兵士を殺して、ターゲットが異変に気付きでもしたら次のチヤンスはもうないだろう。
アルタイルは唇を噛んだ。

「これ以上、父さんをイジメないで！」

店内から聞こえる少女の声。

「へえ、まさかあんに娘がいるなんてな」

兵士の一人が下卑た笑みをこぼす。

「どうか、どうか娘だけはっ！」

「うるさい！」

動けなかった。

振り降ろされる剣をただ見ることしかできなかった。

地面にゴトリと落ちる首に少女の悲鳴。

地面にうつ伏せで倒れる男はもう自分の娘と言葉を交わすことはない。

「ちょっとおじさんと遊ぼうか？」

兵士が店の中にズカズカと入って行く。

再度店内から響く少女の悲鳴。

今ならターゲットに気付かれることもなくあの二人を殺^やれる。

衣服に手を掛ける兵士の首筋に【アサシンブレード】の刃を突き立てる。

「ぎゃっ」

「おい!どうし…たん、だ?」

もう一人の兵士の瞳に映る白いフードと左手の刃。次の瞬間、兵士の首に刃が突き立てられた。

第16話：一人目

「おっ、お前が殺たのか…?」

店の入り口には3人の兵士とターゲットであるサーダナが立っていた。

おそらく、女の子の悲鳴を聞きつけて来たのだろう。

アルタイルは振り向きざまに、右肩のナイフホルダーからナイフを抜いて、兵士に投擲する。

アルタイルの左腕から投擲されたナイフは兵士の左目を射抜いた。

「ぐっ、ぐぎゃああああ！」

兵士が自分の左目を手で押えた後、絶命する。
そのナイフは毒付きだ。

「キ、キサマ！」

一人の兵士が腰の剣を抜き放ち、こちらへ駆けてくる。
アルタイルは駆けて来た兵士の剣を持つ方の手首を掴み軌道を反らす。

そして、その勢いのまま兵士の太腿を断つ。
更に蹴る。

片方の足が太腿から無い兵士は蹴りの衝撃に耐え切れず転倒する。

「いっ」

兵士が槍を構えて突進してくる。

【カウンターキル】

さっきの兵士にもしたがこの兵士もやりやすそうなので実験台になつてもらう。

突き出された槍をアルタイルは身体を左にずらすことによって回避する。

そして、槍を掴み相手側の柄を蹴り上げる。

兵士の手から開放された槍を一回転させて、刃が有る方を相手に向けて刺す。

突き出した槍は兵士の腹部を貫いていた。

「サーダナ様、ここは私に任せてお逃げ下さっ」

片足を失った兵士の胸に白銀色の直剣を突き立てる。

「ひっ、ひい!!」

ターゲットのサーダナがアルタイルに背を向けて走り出す。

「た、助けてくれえ！」

さすが人間の生存本能と言うべきか、サーダナはエウサレムの貧困区を物凄い速さで駆けていく。

アルタイルは建物の屋根に上り、その姿を追う。

「衛兵！」

ターゲットは見回り中の衛兵に駆け寄って行く。

「アサシンだ、アサシンが追って、くぎゃあ！」

4人の衛兵の前。

ターゲットのうなじに突き刺さる刃。
はためくマント。

白いフード。

アサシン。

次の瞬間、アルタイルとサーダナはこの世界から消えた。

「もう終わりだな、サーダナ？」

何も無い、白一色の世界でアルタイルは目の前に居る男に問いかける。

「アサシンか……。お前は何の為にその剣ちからを振るう？」

サーダナはため息を一つ吐くと、自分を殺した男に問う。

「俺はこの世界を守る為に、この剣を振るう。ただ、それだけだ」

「この世界の住民ですらないのか？」

「何故、そのことを知っているんだ…？」

「私もお前と同じ異世界から来た人間だからだ」

アルタイルは言葉を失った。

「この世界には管理者が必要だ」

男は語る。

この世界の影を。

そこで必要になる力。

【エデンの果实】

「そろそろ時間だな、アサシン。私は先にあっちに逝^いってるよ」

「ああ、安らかに眠れ」

男は自分の夢を語り、眠る。

第17話：逃走

『無事殺すことができたようね』

一年ぶりに聞く、女の声。

それは、鏡の神様と名乗る女の声だった。

「久しぶりだな、ミラ。そして、何のようだ？」

『あら、この世界は私が貴方の為だけに造った世界なのよ？』

男の息絶えた世界で、勇者と神は言葉を交わす。

「俺の為だと…?」

なんとも壮大なプレゼントだ、と呟く。

『で、これはその男の【エデンの果実】の欠片よ』

足元に転がって来る丸い物体。

『それで、【アップグレード】はどうするの?』

「何を強化アップグレードできるのか、説明が欲しい」

足元に転がる【エデンの果実】の欠片を拾い上げながら言う。

【Hidden Blade プラス +】右手に【アサシンブレード】を追加する。

【Hidden gann】【アサシンプレード】に小型の拳銃^{ピストル}を仕込む。

【Hidden Poison Blade】【アサシンプレード】に特殊な毒針を仕込む。これによって対象に幻覚を見せて錯乱させる。

目の前に現れる文字。
要は二刀流か銃か毒ということだ。

「じゃあ、【Hidden Blade^{プラス}】で

【Hidden gann】と【Hidden Poison Blade^{プラス}】の文字が消え、
の文字が光を放つ。

思わず閉じた瞼を開けると、そこには【アサシンプレード】があった。

『アップグレードはこれで終わりね。他に何か聞きたいことはある？』

「俺の今着ているこの服と【アサシンプレード】の耐久度について、お前に聞きたいことがある」

『私が答えられる範囲内ならば、良いわ』

「一年前、ウインシーの剣は俺の服を貫き、【アサシンプレード】

すらも壊した。俺のこの服はそこら辺の鎧より堅く【アサシンブレード】はチャンバラも可能じゃなかったのか？」

脳内にあの時の光景が甦る。よみがえ

初めての敗北。
痛み。

『ええ、貴方の【アサシンブレード】もそのアサシンの装束もかなりの業物わざものよ。でもね、その男が言っていたように異世界に来たのは貴方だけじゃない。彼女も異世界からこの世界に来た人の一人なの。当然、アップグレードもしているでしょうね、彼女は』

「それは……本当なのか？」

『しかも、相手の命を奪う代わりに相手の持つ能力や力を自分の物にできるという、まさにチートの化身のような女よ』

「聞かなければ、良かった…」

『そこに転がる男も元はチート人間だったのよ？』

男が護衛を雇う訳。

自分に背を向け、逃げ出した訳。

「つまり、ウインシーに一度殺されて力を取られたって事か……？」

『聞いたって良かったでしょ？』

「いや、更に俺の不安を煽あおっただけだと思っ」

『用は気を付けてねって事よ』

「ああ、死なないうちを付けるよ」

『じゃあ、また二人目を殺した時会いましょう』

崩れる白い世界。

再び構築される世界。

色づく世界にアルティールとサーダナの亡骸は戻って来た。

「さっ、サーダナ様！」

「アサシンだ、殺せ！」

4人の衛兵がそれぞれ得物を手に駆けて来る。

男の亡骸を置いて教会の壁を蹴る。

窓の枠組みに手を掛ける。

「番兵、そっちにアサシンが行ったぞ！」

教会の屋根で見張っていた番兵が自分を呼ぶ声に振り向く、が遅かった。

番兵の足にアルティールの手が掛かっていた。

小指だけを反らす。

飛び出る刃は番兵の脛^{すね}を貫いていた。

そして、アルティールは手を引き番兵を屋根から引き摺^ずり落とす。

「ああああああ！」

小さくなつてく番兵の悲鳴。

そして、何かがどすんと落ちる音。
それを機に番兵の悲鳴は聞こえなくなった。

「あそこに居るぞ！」

教会の屋根に飛翔する矢から逃げるように屋根を走る。

「居たぞ、あそこだ！」

次から次へと無限に湧き出す番兵を無視して屋根から屋根へと飛ぶ。
敵の追跡を振り切って、アサシン教団の支部へ帰還すればミッション完了だ。

「逃がすものか！」

目の前に踊り出てきた勇敢な兵士にタックルをぶちかますアルタイル。

「おわっ…ぎゃあああああああ」

追跡から逃れるには、まず身を隠して兵士の警戒度を下げるしかない。

何とか身を隠す場所はないか視線を周囲に走らせるアルタイルの目に飛び込んできたのは、窓全開の二階建ての家。
窓から見える部屋の中にはだれもいない。
絶好の隠れ場所だ。

「梯子はしを持って来い！」

アルタイルは全開の窓に飛び込んだ。

第18話：エイフ

「どこだっ!」

梯子を使って屋根に上ったのである。兵士たちが屋根で騒ぐ。

兵士たちはしばらく屋根の上をうろついていたが、数分経つと兵士も諦めたようで梯子を使って屋根から降りて行く。

アルタイルは安堵の息を漏らす。

「そろそろいいだろう」

アルタイルは一人呟くと窓に手を掛けた。

これ以上長居してこの家の住民に騒がれでもしたら面倒なことになる。

しかし、長居しなくてもこの家の住民がこの部屋に入って来ないという保障はない。

つまりは、ドアを開けて人が入ってきたのだ。

そして、偶然にもその人物と目が合ってしまった。

「待ってください」

部屋に入ってきた人物は窓から出ようとするアルタイルに声を掛ける。

「こちらを向いてください」

アルタイルは相手を刺激しないようにゆっくりと振り向く。

そこにいたのは15才ぐらいの白い髪の女の子だった。

「顔を見せてください」

アルタイルは一瞬、迷うそぶりを見せたあとフードに手を掛ける。フードをとると露わになるアルタイルの顔。

それは、一年ぶりに見せる蓮の顔だった。

だが、一年前とは違い伸びた髪を後ろで束ねている。

「先ほどは助けて頂き、ありがとうございました」

少女は頭を下げる。

「ああ、君はさっきの…」

「はい、武具屋エイフのエイフ・P・フルです」

その名前は、品切れの店の名前だった。

「君の父を助けられなくて、ごめん」

「いいえ……バカだったんです。私が父の言いつけを守って家の中に隠れていれば……」

エイフが顔を伏せる。

「……ひっく」

「もしかして泣いてる…?」

しゃくり上げるエイフを抱きしめて言う。

「大丈夫、サーダナは死んだから。もう奴がこの店に来ることはないよ」

「はい……あり、がとつ……」

「何しているんだろう、俺？」

たくさんの料理を前に自問するアルマイル。テーブルを挟んだ向こうにはエイフがいた。

「どうですか、味付け……薄くなかったですか？」

さすが貧困区と言っべきか。

「いや、ちよつどいいぐらいだ」

Side：エイフ・P・フル

「待ってください」

私は立ち去ろうとする白い背中に声を掛けた。

「こちらを向いてください」

白いフードの男はゆっくり焦らすかのようにと振り向く。

しかし、肝心の顔は深く被ったフードの所為で見ることができない。

「顔を見せてください」

一瞬の間を置いて、男はフードに手を掛ける。

そして、露あらいわになる、その顔。

ハッキリ言えば、特徴のない顔だった。

珍しい黒髪でやや整った顔立ちをしているものの、気を抜けばすぐに忘れてしまいそうな顔だった。

「先ほどは助けて頂き、ありがとうございました」

私感謝の言葉を述べ、頭を下げる。

何かをしていないと父の最期の姿が頭のなかに浮かんでくるのだ。

『どうか、どうか娘だけはっ！』

唇をきつく噛み締める。

「ああ、君はさっきの……」

白いフードの男は思い出したように口を開く。

「はい、武具屋エイフのエイフ・P・フルです」

その名前は、品切れの店の名前だった。

もうその店には店主が居ない。

そして、私の父さんも……。

「君の父を助けられなくて、ごめん」

それは違います。

すべては、私が……。

「いいえ……バカだったんです。私が父の言いつけを守って家の中に隠れていれば……」

目の奥が熱を持つ。

思わず、顔を伏せる。

「……ひっく」

堪^{こた}えても堪^{こた}えても、堪えようとしても。

口からは嗚咽が漏れるばかりだ。

「もしかして泣いてる……？」

困ったような声が聞こえる。
違うな、困った声が聞こえる。

「大丈夫、サーダナは死んだから。もう奴がこの店に来ることはないよ」

ふわっと身体が温かくなった。
きつと抱きしめられているのだろう。

「はい……あり、がとつ……」
「ごいま、す」

ちゃんとお礼の言葉を言わなくちゃいけないのに、私の口から出るのはしゃくり混じりの言葉だった。

第18話：エイフ（後書き）

A Cつながりでアーマードコア4アンサーをプレイしました。

第19話：旅人協会

「存外、馬鹿な事をするものだな…お前も」

アサシン教団の支部に帰って来たアルタイルを冷たく評価するウィンディー。

「番兵共の目の前でターゲットを殺す暗殺者がどこにいる？」

番兵たちの目の前でターゲットを殺して、騒ぎを作った暗殺者がそこには居た。

その名も、アルタイル。

「ゲームと現実の違いは違うわけか…」

アルタイルはウィンディーに聞こえぬよう小声で呟く。

「何か言ったか？」

「いや、なんでもない」

訝しげな視線を向けるウィンディーから目を逸らすアルタイル。

「はしゃぎ過ぎたな、当分はテンプル騎士団に手を出さない方がいい」

「そうだな、じゃあ旅人協会キルトに行つて依頼クエストでもやつておくよ」

「そうか、では私も同行しよう」

装備を取りに行くと言つとウィンディーはアサシン教団の支部の奥に入つていった。

「俺も装備を変えるか…」

今、装備しているものはどれも対人用の物だ。
対モンスター用ではない。

右肩の肩当てを肩から外し、代わりにベルトを巻く。

壁に掛けてある鈍色の輝きを放つ身の丈より少し程度小さい大剣。
ツルハンバスターブレード
両手片刃直剣を背中に掛けて、ベルトの止め具で固定する。

「準備できたぞ」

銀色に輝く胸当て。

白銀の光を放つ左手の盾。

身の丈を超えるほどの長さを持つ巨槍。

「久ぶりに見るな、その格好」

「当然だ。これを着るのは久ぶりだからな」

奥からウィンディーが戻ってきた。

「では、行くでしょうか」

第20話：受注

旅人協会ギルドは彼の有名な暗殺者、アルタイルが組織したらしい。この世界に来たばかりのアルタイルは一文無しだ。

例え、通貨を持っていてもソレは違う世界の通貨だ。

この世界では使えない。

当然、働かねば金は手に入らない。

無論、人から奪うなど暗殺者の信条に記されずとも己の信条に反していた。

アルタイルは己の力と価値を売り、金と名声そして居場所を手に入れた。

旅人協会のメンバーはフードは被らずともどれも白を基調としたものに身を包むのは、アルタイルに敬意を払ってのことだ。

まあ、そのおかげで騎士団の奴らには誰がアサシンだなんて分からないだろう。

フードで顔も隠しているしな。

アルタイルは誰に話しかけるでもなく、ウエンディーと町を歩く。

「今日、見回りが終わったら酒飲みに行かねえ？」

左から太い声がした、知らない声だ。

アルタイルの左隣を番兵たちが歩いて行く。

番兵たちの背中を横目で追った。

不審な行動をとらなければ問題ない。

しばらく歩いていると目的地に着いた。

旅人協会は二階建ての酒場で構成されている。

一階は素人の旅人でも受注可能な【ファースト】で、誰もがここから始まる。

この【ファースト】でいくつかの依頼を成功させ、ギルドに貢献することによって成功ポイントを取得し、ポイントが一定ポイントを超える事によって、二階にある【エース】にて、高額報酬な依頼を受注出来るようになる。

当然、遂行困難な依頼が多く、命を落とす旅人も出るそうだ。

「何をばけーっと突っ立って居る？」

ギルドの入り口で呆けるアルタイルにウィンディーが注意する。

「少し考え事をしていた」

「考え事も程々にしとけよ？」

そう言いウィンディーはギルドの戸をくぐる。

それに続いてアルタイルもギルドの戸をくぐる。

「鮮血子羊の討伐成功に乾杯！！」

「おおっ、この肉つめえな！」

「それは、鮮血子羊の肉です」

「よしつ、毒蛙ホリスシンの討伐をするぜっ」

ギルドの酒場は昼夜問わず賑やかだ。

「アルタイルは何を受注するんだ？」

依頼書の貼られている依頼掲示板の前に立つアルタイルとウィンディー。

「そうだな……脚棘蜘蛛アハクネスの討伐にしようかと思う」

「アハクネスか？」

脚棘蜘蛛アハクネス、それは棘蜘蛛アハクの群れを統一する一頭《リーダー》で、その名の通り脚の棘が特徴だ。
ちなみに、アハクの方は棘と言っても毛のような物しかないので、違いは一目で分かる。

「私は蜘蛛くまが苦手だ」

「……………？」

「私は蜘蛛が大っ嫌いだ。というか、虫の存在自体すら嫌いだ」

「じゃあ、無面白蛾ゲルニルにするか？」

「……………死にたいようだな？」

無面白蛾ゲルニル、それは蛾。

デカイ蛾^が。

そして、白いウィンナー。
しかも伸びる。

白くて大きい蛾の頭に伸縮自在の腐ったような白いブヨブヨの皮膚の頭をつけたような容姿をしている。

ちなみに、頭とはいってもあるのはパツクリと裂けた口しかない。ほらゲームに出てきただろ？

まさにあんなのだよ。

「フルフルはカワイイから大丈夫だろ？」

「虫に変な愛称を付けるな、馬鹿者。大体、なんでフルフルなんだ？」

「フルフルはフルフルだ、それ以外の何者でもない」

「私は時々、お前が分からなくなるよ……」

はぁーとため息を吐くウィンディー。

「じゃあ、お前は何ならいいんだ？」

「うーん、じゃあ岩蟹^{グライザミ}か毒蛙^{ポリスシン}とか？」

岩を背負った巨大蟹と毒液を吐く巨大蛙。

「グライザミは兎^とも角^{かく}、ポリスシンは遠慮^{えんりよ}したいな」

「では、思い切って赤棘竜^{ギオデニス}にするか？」

体中に赤い毒のある棘を持つ竜。

「倒せない事もないが、お前は出来るのか？」

「問題無い」

「とりあえず、死ぬなよ？」

「貴様こそ死ぬなよ？」

アルタイルは、掲示板から依頼書を取ると受付嬢のいるカウンターへと歩き出した。

第20話・受注（後書き）

7月11日：内容追加

第21話：依頼

「4ヶ月と13日ぶりですね、アルタイル」

そう言いアルタイルに話しかけてきたのは、この旅人協会キル下の受付嬢兼アイドルのリリアム・ヲシユコツトだ。

透けるような白い髪を背中まで伸ばし、肌も髪に負けないくらい白い。

まさに、世界中の人に理想の女性をアンケートした結果を人の形にさせた感じだ。

美少女。

それは、彼女のためだけに在る言葉と言っても過言ではないだろう。ちなみに彼女がこの旅人協会の受付嬢を務め始めて2年経つらしいが、誰も彼女の笑った顔は見た事がないと言う。

眠れる氷の美少女という名で近隣の国までその名を轟トビかせているらしい。

旅人の間では、起こす（眠りから）＝彼女が笑うと言う隠語が生まれた位だ。

「そうなのか、リリアム？」

「…はい、そうです」

しかし、彼女が笑ったところを見た者はいない。

「今回も討伐系ですか？」

「ああ、今回も討伐系だ」

「今回も、ですか」

リリアムはもを強調して言うと、アルタイルの手から依頼書を奪い取り、ペンを走らせる。

「今回の相手は赤棘竜ギオデニスですか……」

視線は依頼書に向けたまま、アルタイルに話掛けるリリアム。

「何か、問題でも？」

「……いえ、なんでもありません」

「参加メンバーはいつも通りの貴方とウィンディーさんですね？」

「ああ、そうだ」

「では、ここにサインを」

アルタイルはリリアムからペンを受け取ると、依頼書の右下にある空欄にアルタイルと書いた。

「……………気を付けてくださいね」

リリアムの言葉は、酒場の旅人たちの声にかき消されてリリアムに背を向け出口へと歩いて行くアルタイルの耳に届くことはなかった。

『ギオデニス
赤棘竜の討伐』

成功条件：四日以内に^{ターゲット}対象討伐し、対象の額にある【真紅の角】を納品すること。

失敗条件：対象を討伐できぬまま四日経過すること。

場所：ロウレンカの森の北区

報酬：8500f
^{ファイリシア}

注意：未確認の魔物が周辺をうろついているとのこと。

ロウレンカの森はエウサレムの町から少しばかり南へ下ったところ
にあり、この森は薬草が採れることで有名だ。

「なんかジメジメしていて蒸し暑いな、この森は」

ウィンディーが周りの木々を見回しながら言う。

「確かに、この暑さは異常だな」

アルタイルは前回、^{レットラム}鮮血子羊の討伐をしに何度かこの森へ足を運んだことがあった。

「前来たときはひんやりしてて気味が悪かったぐらいなのだがな」

ウィンディーは周りの木々を見回しながら言う。

「それで、対象ターゲットのギオデニスは何処どこにいるんだろうな？」

「これだけ蒸し暑いおあかたのだから、大方洞窟で涼んでいるのだろう」

「ロウレンカの森で洞窟と言えば、あそこしかないよな？」

ロウレンカの森には洞窟は一つしか存在しない。

ロウレンカの森の奥地に在るかなりの大規模な洞窟だ。

「当ては無いのだから、行って損は無い」

「そうだな、行くだけ行ってみるか」

アルマイルとウィンディーは森の奥地へと歩を進めた。

「何か居るな……………」

「何かの呻うめく声こゑがする。

「ああ、何にか居るな……………」

ウィンディーもそれに同意して、洞窟の奥から聞こえてくる呻うめき声

に耳を傾ける。

現在、アルタイル一行はロウレンカの森の奥地にある洞窟の入り口に来ていた。

「ウィンディー、お前に聞きたいことがあるんだが……?」

「実は、私もお前に聞きたいことがあるんだ」

「ギオデニスの呻き声ってあんな禍々まがまがしい声だったか?」

「実は、私もその事を聞こうとしていた」

「ハプニング発生のフラグはいつ立ったんだ……」

アルタイルは地面に手を着き、がくつとうなだれる。

「例えば、依頼書の隅に未確認の魔物がうろついていると書いてあったな……」

ウィンディーが遠い目で呟く。

その時だった。

洞窟の奥が煌めいたかと思えば、こちらへ何かが飛翔してきた。それは、全身を紅い棘の鎧に包まれた竜だった。

「ギオデニスっ!?!」

「避けるんだ!!」

アルタイルは右へ、ウィンディーは左へ飛んだ。
ギオデニスは二人の間を通り過ぎ、ロウレンカの森の木々に突っ込んでいった。

やがて、ギオデニスは森の木々を吹き飛ばしながらその動きを止めた。

アルタイルは土煙立つ森を立ち上がりながら状況を確認する。

「大丈夫か、アルタイル？」

「一応はな」

ウィンディーに生存報告しながらもその視線はギオデニスの吹っ飛んでいった方から離さない。

「ギオデニスは新技でも習得したのか？」

「それは厄介やっかいな事だが、どうやらそうではないようだ」

土煙が晴れるとそこには、紅い瞳を爛々らんらんと輝かせたギオデニスがい

った。
しかし、その視線はアルタイルやウィンディーを捕らえてはいなかった。

「おい、アルタイル。あれを覚えてみる」

その視線の先には

第21話：依頼（後書き）

久しぶりの更新です。

今思えば、後書きを書くのも久しぶりな気がします。

最近、学校の行事が忙しく……………。

すみません、言い訳です。

しかし、別れの三月がやってきましたね。

卒業式ですよ、卒業式。

同時に出会いの春ですね。

入学式ですね。

とりあえず、感想等お待ちしております。

第22話：機械仕掛けの巨人

「なんだ、あれ……？」

ウィンディーの口から言葉が漏れる。

ギギギと歯車の歯と歯の噛み合う音。

霞んだ鈍色の装甲。

人の形をしているが、明らかに人より大きな4メートル前後の身体。

そして、巨大な拳。

「何故、この世界に機械が？」

4メートル前後の巨体を持つそれは、通称ロボットと呼ばれる類の物に酷似していた。

しかし、それは空想上の物であって現実に存在する物ではない。

「この世界にあんな物を造れる技術は無いはずだろ？」

「それは、どうかしら？」

脳裏に響く自称神の声。

その声は不思議とアルタイルを冷静にさせた。

「兎に角、貴方がこの世界に来た理由。あれが機械仕掛けの巨人。」

蓮が勇者としてこの世界に来た理由。

問題はテンプル騎士団だけではなかった。

いつの時も問題は一つとは限らない。

ただそれだけ。

「そのエクスなんたらを倒せと？」

『当たり前じゃない。観光に貴方をこの世界に飛ばした訳ではないのよ？』

「……まあ、やるだけやってみるさ」

背中の両手ツィハンバスターブレード片刃直剣の柄に手を掛けながら答える。
既に相手は拳を構えている。

「来るぞっ!!！」

ウィンディーが叫ぶ。

それを機に機械仕掛けの巨人が地を駆ける。

「せいっ!!！」

接近。 接近。 接近。 接近

！

振りあがる拳。

背中から抜き放たれる片刃直剣。

「抜刀!!！」

腕に伝わる振動。

飛び散る火花。

陥没する地面。

「ちいっ」

片刃直剣で相手の拳を受け流す。

そのまま拳はアルタイルの後ろにあつた木を粉碎する。
前転。

巨人の股をくぐり、背後を取る。

「はあああつ！」

槍の如く突き出された片刃の剣は巨人の背中を

。

第22話：機械仕掛けの巨人（後書き）

右手を怪我しました。

左手のみで打っているので大変です。

それと、評価が30点を超えました。

正直、感動しました。

こんな、作者の妄想でも読んでくださる人が居るのだと。

たとえ、左手しか使えずとも更新します。

神様、仏様、読者様に誓って。

23話：竜と巨人

広がる波紋と弾かれる剣。^{つよげ}

それが意味することは、

「くそつ！」

機械仕掛けの巨人は頭を180度回転させ、アルタイルを正面に捕らえる。

人間には実行不可能な、機械だからこそできる動き。

とっさの出来事に対応出来ないアルタイルに巨人は一容赦なく、その巨大な拳をぶつける。

死。

「アルタイル!!!」

アルタイルと拳の間に割り込んだ影が叫ぶ。

「ウインディー!?!」

ウインディーは左手の白銀の盾を構える。

しかし、来るべき衝撃は訪れなかった。

「あれは……!!」

深紅の棘と鈍色の拳が。

紅き竜と鈍色の巨人が。

互いの得物を以て、ぶつかり合う。

「ギオデニスが……？」

友情的なあれで加勢しているわけでは無いのは、分かっている。
何よりもあの瞳めがそれを語っている。
あの瞳は、好敵手を見付けた時の瞳だ。
そう、ウィンシーが兄を見る時の瞳だ。

「おい、アルタイル」

「ああ、分かっているさ」

ツィハンバスターブレイド
両手片刃直剣の柄を握り締め、激しく交わる1匹と1体の竜と巨人
を視線で追う。

「まずは、機械仕掛けの巨人からだ」

「ギオデニスは後回しなのか？」

「ああ、おこ困じになつてもらおう」

「まずは、私がエクス・マキーナの側面から突進するから、お前は
すき隙を見て奴の頭部にその剣を叩き込め」

ウィンディーは言うが否や、槍を構え機械仕掛けの巨人へと駆ける。

「はああああつー!!」

声を挙げて、巨人の側面に神速の槍を叩き込む。
たと喩え、その装甲に傷付くことは無くとも、隙を作ることはできた。
大きくよろめく巨人に対し、竜はその強靭きやうじんは顎あごでその頭を砕くだかんと

する。

そして、アルタイルはがら空きの背中へ剣を突き刺す。

「なにっ!？」

巨人はまたしても、アルタイルへとその巨大な拳を伸ばす。

案の上、巨人の頭部はデオギニスの顎によって噛み砕かれる。

しかし、巨人はそれを意に介さぬ様子でアルタイルを捕らえんと両腕を振り回す。

その攻撃に対してアルタイルは直剣を横に構え、拳から自分の身を守る。

「やばいな……これ」

腕に衝撃が来る度。^{たび}

火花が散る度。

片刃直剣はぎしぎしと音を立てて軋む。^{きし}

元々、この剣は盾として使うようには設計されていないのだ。

バキンッと音を立てて折れた直剣と地面に映る人影。

「どつりゃあああ!！」

空から聞こえてきた声は女子の言うような掛け声ではない。

どうやってあんなに高くジャンプしたのかは知らないが、彼女が今にも右手の槍を投げんとしていることだけは分かった。

「避けるよ、アルタイル!」

無論、避けるに決まっている。

重力+ウィンディーの筋力+槍本体の重量。

それを以てすれば、巨人の分厚い装甲を貫くことはそう難しいことではない。

結果、巨人の胸部から背部までを文字通り串刺しにした。

23話：竜と巨人（後書き）

右手がほんと痛いです。

それは兎も角、最近ラノベにはまり始めました。

アスラクラインやムシウタに限っては全巻を大人買いするという始末。

経済的にも痛いこの頃。

皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

自分は右手のことを除けば、元気です。

友達に気持ち悪がれるぐらいに。

今思えば、心も痛かったです。

それでは、感想等をお待ちしております。

間話：急

アルタイル「どうも、主人公のアルタイルです。以下ア」

ウィンディー「一応、ヒロインのウィンディー・ファンクションだ。以下ウィンD」

ア「今回は、特別企画としてちょっとした疑問やらなにやらに答えたいこうという話です」

ウィンD「……作者が話の続きを考えきれなかったのではないか？」

ア「バ、バカ！それを言ったら……」

僕はちゃんと考えましたよ。

ア「ほら、来た」

ウィンD「すまない、私のせいで……」

なんか、避けられている！？

一応、作者なのに？

ア「どうするんだ？やっかいなのが出てきたぞ？」

ウィンD「仕方無い、【疑問に答える】のコーナーに行こう」

スルーですね。

分かります。

疑問に答えるのコーナー

ア「じゃあ、【疑問に答える】のコーナーだけど、作者がいきなりするものだから質問はおろか感想さえ来てないぞ?」

ウィンD「全くだ。無計画にもほどがある」

すみません。

今度からはちゃんと予告します。

ア「じゃあ、俺たちで考えるか?」

ウィンD「そうだな」

ア「俺から一つ、『ウィンシー達が使う魔法とは何?』」

お答えしましょう。

【魔法】とは、自らの血まじみくから何かを発生させることのことを言う。何かとは言っても、実際は火と氷の二種類しかない。

ア「ウィンシーの使ったのは、確か……【フレイムブレイド火炎の剣】だったな?」

そう、彼女が使った【火炎の剣】は二種類ある魔法の火の分類に属する。

火の属性に分類される【魔法】の事を【一火炎系の魔法】と言い、

血から高熱を放つ炎を発生させる。(熱には個人差があるが、ある程度は調整可能。)

しかし、炎自身が放つ熱によって血が蒸発してしまい持続させるのは難しい。

同時に、ゲームに出てくるファイアみたいに飛ばす事は可能だが、せいぜい1メートル程度まで。

ウィンD「私もある程度は使えるのだが、花火程度が限界だな」

また、氷の属性に分類される【魔法】の事を【氷結系の魔法】と言い、血から冷気を放つ氷を発生させる(大きさは使う血によって調節可能。形は頭の中でイメージすればどんな形でも作製できる。)

【火炎系の魔法】とは違い、自ら発する熱で蒸発することがないのが持続性がある。

A「要するに、どこぞの忍者みたいに血を使ってドカーンとやるわけだな？」

いや、蛙や蛇は出てこないよ？

ウィンD「じゃあ、次は私だな。私の質問は、私の名前についてだ」

A「名前？由来とかか？」

ウィンD「いや、私はいつからウィンディー・ファンクションになったのか疑問なのだが？」

……………あ。

ア「なるほど、確かにおかしいな」

ウィンD「だろっ?」

ア「ウィンディーじゃなくて、ウエンディーだもんな」

ウィンD「そうだ。私は元騎士団所属であって傭兵じゃないぞ」

やってしまった。

つい、機動兵器を操る傭兵の名前を……!

ウィンD「つい、だど?ふざけているのか?」

ふ、ふざけてなどおりませんって。

ア「俺は知らないぞ?」

ウィンD「ならば、あえて言ってやるっか?1つの生命を想うそれを愚かと呼ぶか、とな」

そ、そのセリフはっ!

某傭兵の最後の言葉!!

よし、これからもウィンディーで……。

ウィンD「死に急ぎたいか?」

ちよ、タイム。

この作品は作者がいるからこそ、更新できるんだぞ? わかったら、その槍を降ろせ……すみません、降ろして下さい。

ウィンC「そこまでにしておけ、妹」

ア「ウ、ウィンシー・ファンクション!？」

ウィンC「いかにも。私が、ウィンシー・ファンクションだが？」

ア「お前、よくも俺の前にノコノコとっ!?!」

ウィンC「ノコノコではない、クツパだ」

ア「マ〇オかよ!?!？」

ウィンD「……………」

今回の特別ゲストは、ウィンシー・ファンクションです。
まずは、自己紹介を。

ウィンC「ウィンシー・ファンクションだ。いつきに敵兵を叩く、遅れるなよ?。」

さすが、分かっているらしい。

某傭兵のネタを自己紹介に混ぜるとは。

やるな、おぬし。

ウィンC「では、代償にラストは私の勝利で終わらせるんだぞ?。」

はい、喜んで!

ア「待て待て待て!作者が賄賂ロイヤロにつられていいのか!?!」

……。
と、とりあえず、ウィンシーの自己PRをつ。

ウィンC「そうだな…得意な武器は細剣の【レイテルパラッシュ】で、今は双剣だが金に余裕ができれば買い換えたい。資金援助してくれる人を募集中だ」

ぜひこのお金をお納めくださ……。
や、槍が背中に!?

ウィンC「どうしたのだ、妹よ?」

A「確信犯だろ、お前?」

ウィンC「なんのことだ?」

ただいま、ハードモードに挑戦中です。

ウィンC「4つつの『Answer』《答え》が、私を待っているのだ」

A「待つてねえよ、つか帰れよ!」

ウィンC「ああ、帰って続きをプレイするか」

「ウィンD」………出番

間話・急（後書き）

いきなりですみません。

今度からは予告ぐらいはしてからやるつもりです。

というわけで、質問を受け付けています。

感想やメッセージにドシドシ送ってくださいね。

第24話：目標達成…？

「やったか……？」

動きを止めた機械仕掛けの巨人に折れた両手片刃直剣を構えながら近づく。

折れているとは言え、何も無いよりはマシだ。

「用心しろよ、アルタイル」

「ああ、分かっている」

折れた直剣で、胸の装甲板を突く。

「……………」

返事がない。

ただの屍しかばねのようだ。

「ああ、見事に折ってくれたよ両手用片刃直剣。記念すべきレオナルドの試作4321号が……」

「む？4257号ではなかったのか？」

「ああ、4257号か。あれは、斧槍ハルバードだぞ」

「そうだったか？」

「ほら、あの中から非常食のトマトが出てきたやつ」

「ああ、あの腐ったトマトが出てきたアレか」

魔物の目の前で談笑を繰り広げる男女の姿があった。
というか。
俺たちだった。

「しまった、まだ俺たちは何も目的を達してないよな？」

「ああ、そうだな」

耳元で聞こえる低い獣の唸り声。
そして、吐息。

「いつせいのーで、振り向くぞっ？」

「分かった。ちゃんと振り向けよ？」

「分かってるよ」

「「いつせいのーで……」」

走る。走る。走る。逃げる。

「おいつ、振り向けよ！」

「貴様こそっ！」

要するに、二人そろって逃げたということだ。

「どうする、二手に別れるか？」

「集合地点はいつもの場所だ！」

アルタイルは右へ。

ウィンディーは左へ。

それぞれ、こちらに來ないことを願いつつ別れた。

ア『来るなよ。来るなよ。頼むからウィンディーの所へ行ってくれ』

ウィンD『寄るな、来るな、近づいてくるな!!』

赤棘竜の視線が捕らえたのは、アルタイルだった。

「なんで、俺なんだああああ!!」

食べるならウィンディーの方が美味いに決まっている。
そつに決まっている。

「くそつ、帰ったら何か奢おしってもらつぞつ!!」

頭の中にウィンディーのほくそ微笑む顔が浮かんだ。

第24話：目標達成…？（後書き）

アーマードコア ラストレイヴンポータブルが4日に発売しました。
読者の皆さんも見ました？

AC最高です。

ACがアサシンクリードと読むか、アーマードコアと読むかは貴方次第。

第25話：目標達成

「あっち行けよ、あっち!!」

ロウレンカの森の疾走するアルタイル。

彼はまだ諦めてなかった。

『なんで、ウインディーの方へ行かないんだ!?!』

実にしつこい。

例えるならば、ゴキブリ並みのしつこさ。

嫉妬しつとぶが深い日本人の血が裏目に出たようである。

「せいやっ!!」

脚に力を入れて、身体を回転させる。

振り向いた先には、こちらへ駆けて来るギオデニス赤棘竜の姿。

アルタイルは素早く右手のツィハンド両手用片刃直剣投擲する。

アルタイルの右手より投擲された折れた片刃直剣は見事な曲線を描いて、ギオデニスの額に突き刺さる。

不幸か否か、そこには【深紅の角】があつて

グオオオオオオオ!!

「ひっ!」

ぺきつと音を立てて折れた。

角のあつた額には、アルマイルが投擲した片刃直剣が突き刺さつていた。

自慢の角をへし折られたことに怒っているのか、ギオデニスの放つ殺気は先ほどよりも増えた気がする。

いや、増えたと言つべきか。

只今、ギオデニスは殺気35パーセント増量キャンペーン中である。もつとも、そんなキャンペーンはお断りだが。

「なんでこうなるんだあああ！」

死なない身体であつたとしても痛いを受け付けない。

それが、アルマイル。

無益な戦いを避ける。

それが、アサシン。

武器が無ければ逃げる、それだけ。

【アサシンブレード】？

なにそれ、食えるの？

一方、ウィンディーはと言つと。

「ふ、ふふ。あははははは」

笑つていた。

ギオデニス
あんなものに追いかけられたのだ。

しかも、これウィンディーの初ギオデニス戦。
精神的にきついものがあつた。

ギオデニスはアルタイルの方へ行った。

緊張が解けて、その場に座り込む。
膝も笑っていた。

「……情けないな、私」

ため息を吐いて、ある方角を見つめる。

その方角はアルタイルが逃げていった方角でもあり、ギオデニスが追いかけて行った方角であった。

そして、アルタイルは。

「神を恨んでやる」

なんで自分があんなのに追われなくちゃいけないのだ。

自分をこんな目に遭わせる神なんて豆腐の過度に頭をぶつけて死ねばいいのに。

追われるも何も、追われる原因は自分にあつた。
というより

「俺じゃん、依頼を受注したの！」

自分が原因だった。

「いいだろう。俺も男だ、正々堂々と一騎打ちといこうじゃないか」

『さつきから責任を他人に押し付けていた男の台詞かしら？』

「ほっとけ」

足元の石ころを拾い上げる。

しかし、こんな物でギオデニス不倒せるとは思っていない。

これは、時間稼ぎ。

ウィンディーが槍を回収し、合流するまでの。

「……………」

アルタイルの耳に飛び込んだのは、爆音。

アルタイルの目に飛び込んだのは

「エクス・マキナ機械仕掛けの巨人！？」

原型すら留めていないものの、それはあの機械仕掛けの巨人だった。

頭部は首から上が無く、胸部には大きな穴が穿たれ、鈍色の装甲からは輝きが消え失せていた。

「また厄介なものが来たよ……………」

肺に溜め込んだ空気を吐き出す。

その名も、ため息。

早くも、一騎打ちじゃなくなった状況に対してのため息だった。

『あんな槍で止めを刺せるわけじゃないじゃない』

「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

『貴方の拳で息の根を止めてやるのよ』

機械が息をするのかは兎も角、拳で止めを刺すのは無理があると思う。

『ほら、あの胸の穴から見えるあれが弱点よ』

ぽつかりと開いた胸部の穴の奥にはカプセル状の水槽があった。

「ウィンディーの槍は貫通したはずだろ……？」

『あれは、次元が違うのよ』

「二次元か？」

通称、アニメーションのことである。

『馬鹿なの？』

どうやら不正解のようだ。

『異世界に繋がっているのよ』

「異世界？」

『だから、純粋な魔力の塊である勇者である貴方にしか止めは刺せないのよ』

「なるほどな」

『貴方の拳があの水槽を貫けば人形は倒せるわ』

機械仕掛けの巨人

機械仕掛けの巨人と赤棘竜が死闘を繰り広げる中、自称神のレクチャーを受ける勇者。

『助太刀しないでいいの、あの紅いの負けそうだよ？』

巨人の巨大な拳が竜の頭部を捕らえる。

巨人はそのまま拳に力を込める。

数十メートル離れたここまで竜の頭蓋骨のぎしぎしと軋む音が聞こえてくる。

『もう終わりみたいね』

竜はその手から逃れようと必死にもがくが巨人は手を緩めるどころか更に力を込めていく。

『今よ、アルタイル』

終わりはあっけなかった。

機械仕掛けの巨人が赤棘竜の頭部を握り潰した時、同時にアルタイルの拳が機械仕掛けの巨人の弱点である水槽を貫いたというだけ。それが、結末。

アルタイルは、原型すら止めていないギオデニスの額部から両手用片刃直剣を引き抜き、背中の止め具で固定する。

足元の赤き棘鎧を身に纏った竜の亡骸から質の良い甲殻を剥ぎ取る。

「あー、【深紅の角】探さないとなあ」

「いや、存外そうでもないぞ？」

背後から聞こえるウィンディーの声。

その手には、紅く紅く紅い。

深い紅色の角が握られていた。

クエストクリア
「依頼完了だな」

「ああ、そうだな」

右手の石ころを捨て、歩き出す。

「さあ、帰ろうか」

それで、これが後日談。

というより、報酬をもらっただけなのだが

クエストクリア
「依頼完了おめでとございます、アルタイル。報酬はこちらになります」
「報酬はこちらにな

りリアムから渡されたのは、報酬である8500fとハンカチ。
フリーリア

「ハンカチ……?」

リリアムはあまり口を動かさず、後で中を見て下さいと短く小さく言った。

「またのご利用をお待ちしております」

アルタイルとウィンディーは旅人協会ギルドの酒場から出た。

「おい、アルタイル」

「なんだ?」

「何やら報酬が増えているじゃないか」

「ハハハ、何を言ってるんだ?」

「貴様が大事そうに握り締めている左手のハンカチ」

「ああ、これはこの間酒場に落としていったんだよ」

「誰が?」

「俺が」

「フン、その割には女の子らしい柄だな」

「こゝ、これはだな……」

「まあいい。ただ、面倒事を運んでくるなよ？」

「……はい」

第25話：目標達成（後書き）

ウエンディー・ファンクション。

ウインディー・ファンクション。

どうしましゅうね、これ。

もうたくさん、修正しなければなりません。

いっその事、ウインディー・ファンクションにしようかな。

とりあえず、誤字脱字の報告や感想や質問等をお待ちしております。

第26話：ほのぼの

リリアムから渡されたハンカチの中には一枚の紙切れが挿はさまれていた。

紙には

？エウサレムの北区の外壁で待っています？

と、女の子らしい綺麗な字で書かれていた。

「……………」

嬉しいやら悲しいやら。

女性からお誘いの手紙をもらったのだ。
もちろん、嬉しくないハズがない。

「ほお、恋文こいびみか？」

「まさか、アルタイルに眠れるあの氷の美少女からお誘いが来るとは……………」

ウィンディーが後ろから覗いていなければ。

レボナルドが後ろから覗いてなければ、良かったのに。

正直、これは他人には見られなくなかった。
益まして、知人なら尚更なおさらだ。

「まあ、そんな事より私の作品を見て下さい」

そう言ってレボナルドは両手で抱かかえたブーツをアルタイルに差し出

す。

そして、自慢げに胸を反らす。

「それは……………」

「これは、君に頼まれて作った短曲剣ナイフの鞘付きのブーツだよ。鞘だけじゃ寂しいから脚甲脛も付けてみた」

自分の作品を意気揚々と説明する彼の顔は実に誇らしげだ。実際、自分の作品に誇りを持っているのだろう。

「……………」

「どうだい？」

それは、茶革のロングブーツの前面に鉄板をベルトで固定させたような簡易的な脚鎧あしよろいだった。

無論、右側面には短曲剣と鞘が鉄板と同じように固定されていた。

「いつもお前は俺の考えることの一步先を行くな」

「お気に召した様で何よりです」

「そう言えば、あの事は言わなくてもいいのか？」

会話に入れずにいたウィンディーが割り込んできた。よっぽど退屈だったのだろう。

「どうか

「どのこと？」

あの事と曖昧な言葉で言われても判断に困る。

「折れた両手用片刃直剣の事に決まっているだろう」

「ああ、アレの事が」

「これで4321本目ですか」

1号である鉄扇てっせんから始まり、今回折れた4321号である両手用片刃直剣に至る。

「アルタイルの残した写本は持って来ましたか？」

アルタイルとは言っても、自分の事ではない。レボナルドが指しているのは、先代のことだ。

？アルタイル・イブン・ラ・アハド？

彼は紙に武器の設計図を書き記した物の事を【アルタイルの写本】と言っ。

「持って来たぞ。今度こそ本物だといいな」

アルタイルの名を謳い、金を得る。

彼が有名だからこそ、このようなまがい物が出回るのだ。

「ええ、そうですね」

旅人協会からの帰り道で商人から50000f^{ファイリア}だ買い取ったのだ。
これで偽物だったら、さっきの商人を滅殺しに行く所存だ。

「どれどれ。鎌ですか……いや、槍？」

レボナルドは写本を見ながらブツブツと呟く。

「どうしたんだレボナルド？」

「あ、あすみません。私としたことが、つい独り言を」

「それで材料は？」

「見た限り、竜の【**脊髄**】^{せきずい}と堅い【**鉱石**】ですね」

「じゃあ、行ってくる」

善は急げ。

さあ、材料集めに行こうか。

「待てアルマイル。材料ならすでにあるじゃないか？」

「……？」

「【**赤棘竜の脊髄**】^{ギオデニス}と機械仕掛けの巨人を一度^と溶かせば良質の鉱石の代わりになるんじゃないか？」

「また、ロウレンカの森に行くのか」

「いや、こんな時の為にレボナルドの工房に部下たちを持ってこさ

せている」

ちなみにウィンディーの言う部下とは、アサシン教団のメンバーのことだ。

「ギオデニスは兎も角、機械仕掛けの巨人をあのまま放って置く訳にもいかないだろう?」

それもそうだ。

事情を知らない人があれの残骸を見て騒ぎが大きくなれば、面倒だ。

「感謝する、ウィンディー」

「では、私は工房に戻って製作に取り掛かるよ」

「頑張れよ、レボナルド」

「そちらも頑張って下さいね」

「そうだぞ、リリアム・ヲシュコットの件忘れるなよ?」

場所は変わって、エウサレムの北区の外壁。

「お待ちしておりました、アルタイル」

アルタイルが待ち合わせ場所の外壁に来たときには、既にリリアムがいた。

「待ったかい？」

「いいえ、私もつい1時間前来たところです」

「1時間!？」

ついで済むレベルじゃない気がする。

「まあ、そんなことは置いておいて本題に入ろうと思います」

「置いていいのか、それ……?」

「今回貴方をここへ呼んだ理由は……」

「理由は……?」

「貴方に私の護衛を頼みたいのです」

第26話：ほのぼの（後書き）

久しぶりの更新です。

アーマードコア ラストレイヴン ポータブルをプレイしています。

Xbox 360のコントローラーを持ったあとにPSPを持つと○ボタンの位置が違っているので慣れるのが大変です。

第27話：父と子と（前書き）

どうも、猫目利石です。

お久しぶりの更新です。

春休みに浮かれていて、すっかり小説の事を忘れていました。
更新を心待ちにしていた読者の皆さん。

大変遅くなりました、本当にすみません。

では、『鏡の境界線』をお楽しみ下さい。

第27話：父と子と

「おい、大丈夫か!？」

男の声が教会に響き渡る。

男の名は、リチャード・ヴォルフマン。

テンプル騎士団のメンバーであり、同時に教会の司祭でもある。

「父を優先的に探せ！」

リチャードは護衛として雇っている二人の兵士に指示を出す。

リチャードの周りには父であるカヌート・ヴォルフマンの護衛達の姿があった。

いや、亡骸があったと言わべきか。

「リチャード様!!！」

護衛の一人が叫ぶ。

「どうした、父が見つかったのか!？」

「いえ、生存者です！」

リチャードは護衛の声のする方へ駆ける。

「こちらです」

頭にはターバンマフラーを巻いている。

おそらく、南の暑い地方出身者なのだろう。

「ここで何があった？」

「て、敵襲で……ゴホっゴホっ」

父の護衛の口から血が零れる。

「敵襲？父の護衛達はどうした？」

確か父は用心深い人で、何処へ行くにしても必ず10人以上の護衛は連れていたはずだ。

「みんな、な奴に、ゴホッ…奴に殺さ、れた」

「おい、何者だ？」

男はキリスト像の前で祈るように膝を着くフードを被った男に声を掛ける。

男の名前は、カヌート・ヴォルフマン。
テンプル騎士団のメンバーであり、同時に教会の司祭でもある。

「答えないならば、斬るぞ」

カヌートは6人の護衛に指示を出す。

護衛達が剣を鞘から抜き放つ。

教会の入り口に見張りとして4人の護衛を置いてきたが、高^{たか}が一人の男に負けるハズが無い。

なんせ、テンプル騎士団の中でも一際優秀な部隊から抜いた護衛なのだから。

「聞いておるのか、貴様！」

カヌートは返事すら返さない事に苛立ちを感じた。

いくら信者であろうとも、司祭である私の言葉を返さぬとは何事だ。

「もういい、斬り捨てよ！」

腐るほど居る信者の一人がどうなるうとも、私には関係ない。

私の言葉を見殺した方が悪い。

「殺せえー！」

カヌートの声を機にフードの男に斬りかかって行く護衛達。

「フン、愚かな」

これである愚かなフードの男は死ぬだろう。

「ぎゃあああああああ」

「は？」

思わず口から間抜けな声が出た。

何故、私の護衛が死んでいるのだ？

「はっ」

護衛の一人が上段から剣を振り降ろす。

フードの男は護衛の手首を掴んでその攻撃を受け止める。

そして、護衛の股に蹴りを入れる。

前屈みになった護衛の首を脇に挟むフードの男。

グキッ。

「化け物か……!!」

崩れ落ちる護衛。

しかし、その時にはフードの男は次の獲物へと歩を進めていた。
投擲。

護衛から奪った剣は護衛の首と命を刈り取っていた。

「今だっ！」

二人の護衛が同時に斬り掛かる。

「せいっ」

しかし、フードの男は死んではいなかった。

「なにいい!？」

護衛達の剣はお互いの肩から胸へと裂いただけだった。
そう、護衛同士の。

「早くソイツを殺さんか！」

何なんだ、コイツは。

本当に化け物がこの世に居るといのか……!

「死ねえ！」

護衛が斬り掛かる。

フードの男が腰から白銀の直剣ソートを鞘から抜いて剣を受け止める。

切り結ぶ二人にもう一人の護衛が剣を構えて突っ込む。

殺れる!!

フードの男は切り結んでいる護衛の腰から短剣を抜き取るとそれを
後ろに向かって投擲する。

「ぎゃっ」

護衛の胸部に突き刺さる短剣。

「化け物が……!!」

護衛の首筋に走る赤い線。

次の瞬間、護衛の首から噴き出すように血が出た。

カヌートは見た。

フードの男の左手を。

「貴様、薬指を……？」

そして、左手首から生えるように出ている小刀を。

「わた、しは胸に短、剣が突、き、刺さったもの…死ぬこ、ゴホッ……」

横になっているターバンマフラーを巻いた護衛の口から血を吐き出す。

「もういいしゃべるな。おい、衛生兵を呼んで来い！」

「気を、つけ…奴は、すぐ……そ、ここに」

リチャード・ヴォルフマンは見た。

目の前で横たわる男の左手を。

目の前に迫る、死を。

「ふー、ターバンマフラーって以外と暑いな」

アルタイルは顔に巻かれたターバンマフラーを解く。

「顔が蒸し焼きになるかと思ったわ」

服を脱ぐ。

勿論、下にはアサシンの装束を着ている。

「リチャード様、衛生兵を……」

衛生兵を呼びに行った護衛が戻ってきた。

交わる視線。

一瞬の沈黙。

そして

「ア、アサシンだー！ー！！」

第27話：父と子と（後書き）

感想や誤字の報告をお待ちしております。

第28話：リリアム・ヲシュコット

「暗殺対象のリチャード・ヴォルフマン及びカヌート・ヴォルフマンの死亡を確認。お疲れ様でした、アルタイル」

そう言い、彼女 リリアム・ヲシュコットは目の前の資料にペンを走らせる。

その資料には、リチャード・ヴォルフマンとその父であるカヌート・ヴォルフマンに関する事の全てが記述されていた。

「これで5人目だ」

「はい、これで5人目ですね」

テンプル騎士団への勧誘を行っていた司祭のリチャード・ヴォルフマンとカヌート・ヴォルフマン。

テンプル騎士団に敵対する村ばかり襲撃し、騎士団からは武器と金を貰っていた海賊頭のハーゼフ。

診察をするフリをして騎士団の新型の毒薬を患者に与えていた医師のギル・ドーゼス。

テンプル騎士団を支援していた資産家のダン・シリケヌフ。全員、テンプル騎士団の関係者ばかりだ。

「貴方の考えている通り、彼らは全員テンプル騎士団の関係者です」

「何故彼らの暗殺を俺に……？」

理由がなんであれ、俺に得はあっても彼女にはないだろう。

考えられる理由は

ケース1：リリアムがアサシン教団の一員の場合。

「実はアサシン教団の構成員なんです、私」

リリアムは手元にある資料にペンを走らせる作業を中止してアルタイルに視線を向ける。

「旅人協会ギルドは何かと情報が集まりますからね」

「……………」

確かに、様々な人の行き来するギルドは情報の密集地帯と言って良
いだろう。

まさに情報収集には打って付けだろう。

ケース2：個人的にテンプル騎士団に恨みつらみがある場合。

「実は私の両親は、テンブル騎士団に殺されたんです」

アルタイルはハッと顔を上げて彼女　　リリアムの表情を窺^{うかが}う。
しかし、アルタイルからではリリアムの顔は影になっており、その表情を読むことは出来ない。

「私は決して騎士団を許しません」

リリアムの手に力が込められる。

くしゃ、と紙の音。

「例えこの身が滅びようとも……！」

銀色の髪の間隙から覗くその深紅の瞳が爛々と輝いた。

ケース3：テンブル騎士団の構成員で裏切り者を処分している場合。

「……これで裏切り者は全て消えました。ご協力感謝します、アル
タイル」

腹部に走る激痛。

「……あ」

腹部に生える様に突き刺さる短曲剣。^{ナイフ}

そして、腹部から脚へと伝い滴る赤い液体 血。

「貴方にはここで果てていただきます」

自らの体重に耐え切れなくなった足が曲がり、地面に膝を着く。

「……くっ」

「理由はもう、お分かりですね……?」

足元に広がる赤い水溜り。

「さようなら、アルタイル」

リリアムの振り上げた右手には死の形が握^{ナイフ}られていた。

「……………ル」

ケース4：誰かに彼らの始末を頼まれている場合。

「……タイル」

ケース5：気分的に「…アルタイル」

誰かが俺の名前を呼ぶ。

「あ……リリアム？」

気が付けば、資料にペンを走らせる作業を終えたらしいリリアムが目の前に居た。

「どうかしましたか、アルタイル？」

首を傾^{かし}げてみせるリリアム。

「あ、ああ。少し考え事をね」

「気を付けて下さい、アルタイル。もし私がテンブル騎士団からの刺客だったら死んでますよ？」

ああ、そうだな、と返事を返しかけた所で気付く。

リリアムの口から出た『テンブル騎士団の刺客』という言葉。もしかして、これは

「今頃、アルタイルの腹部には生える様に突き刺さる短曲剣があるのでしょうかね」

ケース3ということなのか……？

「ですが、安心して下さい。私は貴方には危害を加えるつもりは

ありません」

そ、そうか……、と返事を返しかけた所で気付く。リリアムの口から出た『貴方には』という言葉。もしかして、これは

「いい加減にしてください、来ますよ？」

ざっ、と音を立ててアルタイルの周辺を囲む様に立ち塞がる巨漢たち。

その数、12人。

「用件は分かってるな？」

リーダー格らしい男が言い放つ。

「私はあそこの2人を殺りますので、残りは頼みましたよ」

他の男たちは腰から剣を抜き放つ。

「待て。どう考えてもおかしいだろ、その分配？」

「それでは、頑張つて10人倒してください」

腰のポケットを漁りだすリリアム。

「やっぱり。私は逃げますね」

そう言い、彼女がポケットから取り出したのは団子サイズの黒い球体。

次の瞬間。

リリアムを中心に濃い霧が発生した。

いや、違う。

これは霧ではない

？

「煙幕かつ！」

男が叫ぶ。

「……俺も退散するかな」

駆け出そうとした矢先。

アルタイルの顔面に壁状の何かがぶつかった。

「っわ」

「おっと」

アルタイルは尻餅をついた。

壁は

「すまない。この煙幕のせいで前が見えなかった」

謝罪した。

「……？」

「……ああ？」

やがて、煙幕が薄くなり視界も晴れてきた。
そこに居たのは、リーダー格らしい巨漢。

「……まさか」

そのまさか。

目の前の男はニヤリと顔を歪める。
まさに満面の笑顔。

「そのまさか、だ」

煙幕は完全に晴れた。

隣にはリリアムの姿は無い。

って全員相手かよっ!？

第28話：リリアム・ヲシュコット（後書き）

気が付けば、受験生。

気が付けば、最高学年。

気が付けば、小説更新してなあああい！

取り乱しました、すみません。

ともあれ更新できてよかったです。

第29話：物資の差

12人の巨漢を相手にするにはどうすれば良いのだろうか？

ケース1：一人ずつ相手にする

「ハッ！」

巨漢の一人を肩から腹にかけて斬り下ろす。
しかし、周りにはまだ7人くらい残っている。

「おいお前ら、アレをやるぞ！」

リーダー格の男が命令を飛ばす。
しかし、アレとは何だろう？

アルタイルは相手の動きに注意しながら、防御の構えをする。

「了解！」

「了解！」

威勢のいい声を返し、二人の巨漢がリーダー格らしき男の後ろに並ぶ。

「『『ジエットストリームアタック』』」

結果：巨漢たちの見事かつ絶妙なコンビネーションにより翻弄され死ぬ ゲームオーバー

ケース2：彼らがゲイである場合

「やらないか？」

「……え？」

「そいつを捕らえる。だが、傷は付けるな」

巨漢の一人が後ろからアルタイルの脇の下から腕をまわして動きを封じる。

しまった、リーダー格の男ばかりに気がいって他の巨漢たちの存在を忘れていた！

「アーーーーーッ!!」

結果：人生オワタ ゲームオーバー

現実：

「ほう、戦闘中に考え事とは余裕だなっ！」

アルタイルは突き出された剣先を弾くことによって相手の攻撃を回避する。

「なんなら、片目を瞑りながら戦ってやろうかっ」

右隣にいた巨漢の膝頭に蹴りを入れると同時に左隣の巨漢の咽頭に手刀を叩き込む。

巨漢の膝の皿が割れる感触と咽頭が喉にめり込む感触がした。

「騎士団をなめるなっ！」

リーダー格の男はその怒りをぶつけるように剣を振るう。

「甘いつ！」

アルタイルは身を反らす。

アルタイルの胸の上を撫でるように通過する剣。

「そこだつ！！！」

アルタイルは身を反らしたままの体勢で脚で相手の剣の腹を蹴り上げる。

「しまった！」

蹴り上げられた剣は弧を描いて遠く離れた地面に突き刺さる。

「チエックメイト終わりだな」

リーダー格らしき男の喉に片手用両刃直剣ワンハンド ロングソードの剣先を突きつける。

「くそつ……………！」

男と勇者は向き合う。

そこには11人の死体があった。

「ハハハ……………中々やるじゃねえか」

乾いた笑い声が男の口からこぼれる。

「違う場所で会っていたら、いい戦友ともになれたかもな……………」

「ごぼつと音を立てて口から溢れる鮮血。

「なにっ!?!」

男の胸には矢が生えるように突き刺さっていた。

「ちいつ!?!」

立て続けに放たれる矢がアルタイルを襲う。

飛来してくる矢を回避し、または切り落とす。

「ぐはっ……!」

アルタイルの左肩に背中から矢が突き刺さった。

『今の貴方の能力は最初の頃の半分以下です』

脳裏にミラの声が過ぎる。

「なぜだ？」

『ウィンシーの【魂喰らい】ソウルイーターの所為です』

【魂喰らい】という聞きなれない単語にアルタイルは顔をしかめる。

『貴方のアサシンの装束はあの時、服としての命を終えました』

この世界に来て初日。

初めてウィンシーと戦った、あの時。

「つまり、もうこの服は鎧並みに堅くないってことか？」

『その通りです。そして、あなたも半分くらいその命を持っていかれました』

右肩から胸へかけて痛みが走る。

分かっている、これは幻痛だ。

あの時、ウィンシーに付けられた傷は消えない。
この痛みは幻であっても、この傷は幻じゃない。
消えない傷跡。

『貴方の体力はあの時の半分以下です』

烙印の如き傷跡は今も、俺を苦しめる。

「ざっと見て、軽く30人は超えていたな……」

アルタイルは物陰に身を潜めながら息を整えていた。

「どうするかなっ……」

右肩と左腕に突き刺さる矢を引き抜く。

傷口から血が溢れ出してきた。

「くっ……」

服の袖を破り、肩と腕にきつく巻きつける。

これで止血はいいだろう。

「ナイフは残り一本か……」

圧倒的な物量の差がアルタイルの目の前に立ちふさがった。
アルタイルは腰の両刃直剣に手を伸ばす。

「次、レボナルドに会ったら遠距離用の武器を造ってもらわないとな……」

アルタイルは重い身体に鞭を打ち、直剣を杖代わりにして立ち上がる。

「まだ居たのか……」

アルタイルの視線の先には10人の弓矢を構えた黒いフードの姿があった。

黒フードたちの構える弓矢の射線はアルタイルの左胸へと延びていた。

第29話：物資の差（後書き）

どうでしょうか？

今回はアサシンクリードのアルタイルのように体力ダウンを再現してみました。

ゲーム本編を知らない方の為に解説をさせて頂きますと、本作冒頭の秘宝奪還という任務の際、アサシンとしての3つの信条クリードを犯した為、「マスター・アサシン」の位を剥奪され見習いに降格させられてしまいます。

その際に、彼の武具は没収されてライフもダウンするということですよ。

わかりにくい説明ですみません。

ああ、それともう一つ再現してあることがあるんですよ。

わかりますか？

はい、シンクロバー オートヒールの自動回復です。

しかし、アルタイルのあの回復力は半端無い気がします。

PSP版をプレイしたところ、ボス戦の時にピンチになればひたすら逃げ回れば、大抵勝てます。

チート過ぎる……。

第30話・ウィンシー（前書き）

第18話・エイフにちよこつと追加しました。

第30話：ウィンシー

「これで、120個目か……」

男は足元に転がる鏡の破片を一瞥いちへつした後、空を見上げる。どこまでも青く青く澄み渡る空と爛々と輝く太陽が目に沁しみる。

「そろそろ眠たくなってきたな」

2週間もソレを求めて動き回ったのだ。

無論、一睡いすらしていない。

だが、まだやることがある。

「そつだな。あと5分くらい休むか」

木の幹に背を預けて目を瞑る。

睡魔はすぐやってきた。

「まだだっ！」

飛来する矢を右手の短曲剣ナイフの刃で斬り落とす。

1本、2本、3本

4本、5本、6本、7本

飛来する矢を左手の両刃直剣ロングソードの腹で叩き落とす。

踊る、踊る、優雅に踊る

舞う、舞う、舞う、ステップを踏むかのように舞う。

右手の短曲剣が

左手の両刃直剣が

踊る、切る、舞う、斬る。

「くっ！」

短曲剣と両刃直剣の間を潜って1本の矢がアルタイルの左足のアキレス腱を射抜く。

「くそっ！」

がくん、と膝から地に落ちる。

左足に力が入らない。

何とか直剣を支えに立ち上がろうとするも身体は痛みを訴えるばかりでアルタイルの思うように動いてくれない。

否、動かせない。

「今だっ、アサシンが膝を着いたぞ！攻撃の手を休めるな！！」

アルタイルは飛来する矢を斬り落とすも、先ほどのような覇気と動きは無い。

それに反比例するかのようアルタイルの被弾率が上がっていく。

装束が赤く、紅く。

自分の血で染まっていく。

「ここまでだな、アサシン？」

低い女の声がアルタイルの鼓膜を震わせる。
黒フードの一人がアルタイルに歩み寄る。

「いや、やってみないと分からないぞ、ウィンシー？」

そう言い、両刃直剣を構える。

分かってる、これはやせ我慢だと。

そして実際、今の俺が彼女　　ウィンシーに勝てるとは思えない。

「ならば試してみるか？」

ウィンシーの放つ言葉に殺気がこもる。

その殺気は【イーグルアイ】など使わなくとも、見えるほど禍々しきモノだった。

「……嘘だ、本来は戦う為に来たのではない」

ウィンシーの殺気が失せる

「どづいうことだ……？」

敵対している筈の彼女は戦う為に来たのではない……？
だとしたら、何が目的だ？

「お前に手伝ってもらいたいことがあるんだ」

「雑用ならその部下にでもさせておけばいいだろう？」

なにが好きで敵の手伝いなんぞ、しなければならぬのだ。

「俺はやらないぞ?」

やらない。

絶対にやらない。

やるもんか。

「報酬が私の喰らったお前の【能力】ちからだとしてもか?」

俺シンクロパーの体力。

装束の耐久力。

その他、諸々。

ウィンシーに奪われた能力は数知れない。

「何故だ?」

敵である俺を使ってまでして欲しいこととはなんだ。
頭が疑問と困惑でパンクしそうだ。

「なんでだろうな。ただそう思ったからお前に頼みに来たんだが?」

なんてファルス?

「……おえつぶ」

ウィンシーは唐突に。

とんでもなく唐突に吐いた。

【吐く】

それは、口から体内の物を出すこと。

もどす、とも言うその行為にアルタイルは軽く退いた。

「ほら、これがお前の【能力】だ」

そう言つてウィンシーが手を差し出す。

その掌には鏡の破片。

「これが、俺の【能力】……？」

差し出された鏡の破片を見つめる。

「そつだ。これがお前のチカラだ」

鏡の破片は太陽の光をキラキラと反射させている。

ウィンシーはこんな物を口から出したのか？

結構この破片、鋭利だぞ……？

「これはお前に返してやる。いい返事を待っている」

ウィンシーが黒いフードを脱ぎ捨てる。

「……」

視界いっぱい広がる鏡の破片。

それは、アルタイルの右目を貫いた。

同時にアルタイルの意識すら貫いた。

第30話：ウィンシー（後書き）

大変遅くなりました。

本当にすみません。

とりあえず学校の行事の準備が忙しくてですね。

陸上記録会とか言うんですけど……。

無論、猫目は運動なんてできやしないです。

ああ、せめてアルタイル並みの運動神経があればなあ。

第30話・その後（前書き）

短いです。

とても短いです。

第30 5話：その後

「そろそろ起きろ、アルタイル」

声が聞こえる。

その声は誰かを呼んでいる。
その声は近くから聞こえた。

「いつまで私の膝で眠るつもりだ？」

頭がまるで高級な枕で寝ているような錯覚に驚いたが、睡魔に勝てるほどではなかった。

「……聞いているのか？」

ウィンディーはため息混じりの声を漏らす。

「いいじゃないか、今は」

柱の影から男が出てきた。

レボナルド・ラ・ウインチ。

それがこの男の名前。

「まさかこんな子供が世界を救うとは信じられんな」

ウィンディーは肩をすくめた。

「だが、信じているのだろうか？」

目を開ければそこにはみかんが二つあった。
無論、それは果物としてのみかんではない。
サイズ、大きさ、カップ。
とても貧しい土で育ったのだらうソレは明らかに貧相なモノだった。
平ら、まな板、ぺったんこ。
そして、貧乳。

「……小さいな」

思わず口から言葉が漏れる。
寝起きだったからだらう。
思わず、本音が出てしまった。

「………なにか言ったか、アルタイル？」

慌てて口を手で押さえるが、もう遅い。
既に破壊神は降臨してしまっている。
ウインディーの膝から素早く後退。

「ありがとう。貴方には感謝している………嬉しかったよ」

満面の笑みで槍を構えるウインディー。

しかし、ウインディー？

そのセリフはもっとラストで言うべきだ。

「ハ、ハハハ………」

もう渴いた笑いしか出なかった。

第30 / 5話：その後（後書き）

メタルギアの最新作が発売されたみたいですね。

アサシンクリードとコラボしているとかしていないとか。知人からの情報によるとリオレウスがでるらしいですね。メタルギア4もほしいです。

なぜなら、そこにアルティルがいるからです。

第31話：誘拐（前書き）

ご無沙汰です。

第31話：誘拐

ポオオオオオオウ！！

「やっと出てきたか」

白亜の竜が首を擡^{もた}げ、咆哮する。
咆哮が大気を震わせる。

「だが、少しばかり出てくるのが遅かったな」

左腕の長剣を振り下ろす。

果たして、今日一日で何回この行為を行っただろう。
数えるのでさえ面倒だ。
むしろ、手が何本あるうとも足りない。

ポオオオオオオ

白亜の首に走る一筋の赤い筋。
一拍置いて、竜の首がズレた。
ズレが大きくなり、やがて白亜の頭が地に落ちた。

「もう飽きたよ、お前の相手には」

長剣を一振りして剣にこびり付く血を落とし、腰の鞘に剣を納める。
そして、竜の頭たちを一瞥^{いちへつ}する。

「さて、僕と彼女は元気かな」

空は既に太陽は地平線に埋まりかけていて、紺色と赤色の空が俺を見下ろしている。

今日の晩御飯は大量の竜の焼肉だ。

「^{ウインシー}姉に何を言われた？」

目を覚ませば、身体が動かなかった。
否、動かせなかった。

「何故、俺は椅子いすに縛られているんだ？」

周りを見渡してもあるのは壁だけで、人も俺とウインディーが居るだけで他に誰も居ない。
とても、とても殺風景な部屋。

「それは答えになっていない。質問に答えろ」

言葉に殺気がこもる。

この殺気はどこかを感じたことがある
？
それも、最近。

「まさか、お前はウィンシーなのか……？」
確信はない。

「何故そう思う？」

「何故って言われてもな……」

漢おとこのインスピレーションとか言ってみるか？

「あえて言うなら、漢のインスイーケルアイ【驚の目】を使ってみる」

ウィンディーが俺の言葉を遮さへぎって言う。

俺は彼女に言われるがままに【驚の目】を使う。
その瞳めに写うつるのは、間違いなくウィンディーだった。

【驚の目】が捕らえられるのは魔力と自分に対する敵意や殺気だ。

「…くっ！」

目にズキリと痛みが走る。

その痛みは眼球を走り、脳を走り。
痛みとなって帰ってくる。

「あ…あああ、あ……」

手で目を睨まな越たしに押さえる。

痛みはちつとも和らがないが、何かをして
てもじやないがやっつてられない。

抗あらがっていないと、と

『シンク口完了』

脳内に声が響いた。

その声はとても澄んでいて綺麗な奏でるような声だった。
ああ、この声は鏡の神様だ。
この声を境に痛みは引いた。

「……ハアハア、何だったんだ、さっきの痛みは？」

訳が分からない。

なんでミラの声が？

シンクロ完了の意味とは？

「シンクロ完了したようだな、蓮？」

「……！」

何故、お前が名前それを知っている？

この世界で俺はアルタイルだ。

俺は本名は誰にも言っていない。

「驚いているようだな、蓮？」

「……ああ、驚いた」

十二分に驚いたとも。

というか、口から心臓が飛び出そうだったぞ、今。

「改めて言おう、俺を椅子なんか縛り付けて何をする気だ、ウインシー？」

妹が妹なら、姉も姉だな。
姉妹揃ってナイスな板。
違いが全く分からないぜ。

「はて、何をしようか？」

ウィンシーが可愛らしく首を傾^{かし}げる。

だが、状況が状況だけに素直にそれを観賞する余裕はない。

「安心しろ、妹とその他はアサシン教団の支部のベッドでスヤスヤと寝ているぞ」

一拍置いて付け足す。

お前が誘拐されたとは気付かずにな、と。

第31話：誘拐（後書き）

長いGWが終わり、学校が再開しました。

みなさんはどのようなGWを過ごしましたか？

自分はコトブキヤより発売されているステイシスのプラモデルを作っていました。

ガンプラなんかと比べ物にならないくらいパーツが多いです。

けっこう、疲れます。

そして、やっぱりステイシスときたらホワイト・グリントでしょう。

この2機無しに4アンサーは語れません。

そして、出費も語れません。

ああ、福沢諭吉よ。

離れていても、心は繋がっているからねっ。

以上、アマゾンにて衝動買いした猫目でした。

第32話：依頼（前書き）

ご無沙汰です。

第32話：依頼

「何が目的だ、ウィンシー？」

そう言いアルタイルはウィンシーを睨み付ける。

しかし、彼女　　ウィンシーはアルタイルのそれに動じた様子も無く肩を竦めただけだった。

「そう喧嘩腰になるな、蓮。まずは落ち着け」

敵陣営の頭^{リーダー}の目の前。

しかも、椅子に縛れていて身動きの出来ない状態。

無論、武器の類^{たぐい}は何一つ無い。

そんな状況で落ち着ける奴がいたら、是非、俺と立場を交換して欲しい。

「俺はちゃんとアサシン教団の支部のベッドで寝たはずなんだが…
…?」

気分転換に質問してみた。

返ってくる返事によって幾分かは心救われるかもしれない。

「ああ、正々堂々と夜中に忍び込んでお前を担いでここまで帰ってきた」

「夜中忍び込み、人を攫^{さら}ってくることを正々堂々と言わない」

むしろ寝首をかかれた気分だ。

「それでだ、蓮。お前にはやって欲しいことがあってここまで連れてきた」

「俺はやると言っていないぞ、一言もな」

何が好きで敵の頼みごとを受けねばならん。

『敵に塩を送る』と言う言葉があったけれどもあれは信玄と謙信だからこそ出来たのだ。

俺とウィンシーでは送ったとしても果たし状あたりが妥当だろう。

「断れる状況、あるいは立場にいるのか蓮？」

居ないだろうな。

両方とも、今の俺には不足している。

「だが、依頼の内容によるぞ」

「いや、貴様には何が何でも受けてもらう」

ウィンシーが腰から剣を抜き、アルタイルの首筋に添える。

白銀の刃がアルタイルの首筋の皮を軽く斬る。

ツーツとアルタイルの首筋を鮮血が首を伝う。

「なんと言ったかな、ほらあの…アナートリアの……」

「……イルネの事か？」

アナトーリア帝国第34代目女王イルネ・ハシーシュ・フェルト。

アサシン教団の本部のあるアナートリア。

彼女の父は、アナートリア帝国を治める帝王だ。
そして、彼女は^{イルネ}

「そう。確かそんな名前だったな」

「彼女がどうかしたのか？」

何故、今ここで彼女の名前を出す？
出す必要はないはずだ。

それで、状況が変わるのか……？

「【火炎系の魔法】を得意とする魔術師の血を粉状にしたものを彼女の寝室に置いて来たのだが、どう思う？」

「その血は意味があるのか？」

「勿論、私の指示一つで発火。彼女は焼死するだろうな」

「……………」

言葉が出なかった。

それは息をすることさえ忘れるくらいに。

「彼女を……イルネを人質にしてまで俺にして欲しいことはなんだ？」

「ほづ、受ける気になったか」

「俺の気が変わらない内に言え」

ぐつと拳を握る。
痛い。

爪が手のひらの皮膚に食い込み、血管を切る。

「そう言ったところも兄譲りか……似ているよ、お前ら」

手のひらから流れ出る血が涙の如く流れた。

『遺跡の調査』

成功条件：20時間以内に遺跡を調査し、最深部の祭壇にある遺産ロストテクノロジーをウインシーの元へ持ち帰ること。

失敗条件：アルタイルの死、あるいは制限時間を超過すること。

場所：アナートリア周辺の森

報酬：無し

注意：遺跡内は未知の物体、生物、罠が多数確認されている。注意せよ。

第32話：依頼（後書き）

M G S P W ……。

……。
面白すぎです。

ただ、それだけです………。

第33話：寄り道

アナートリア帝国の市場は今日も賑やかだ。

と言うより、昼夜問わず毎日賑やかだ。

朝昼は果物野菜、日用品などを中心とした露店が並び、夜には武具を中心とした商人が店を開く。

「一年前と変わらないな、ここは」

太陽が露店を照らし、行く人に暑さをプレゼントする昼。

今日は空の機嫌が良いらしく、雲一つ無い澄み切った青い空がどこまでも広がっている。

「どうだい、おいしいトマトだよー」

元気な緑髪のおやじさんが店の前を行き来する人に声を掛ける。

トマトのトの字も無い異形の物体。

強いて言うならば、紫色のトゲトゲした球体。

「そこのお兄さん、一つ60fファイリーアだよ。どうだい？」

「おぶー」

一年前のおやじさんとは違って背中には赤子を背負っていた。赤子はおやじさんの背中の上できゅっきゅとはしゃぐ。

「試しに一個食ってみて、うまかったら二つ買ってくれよ」

「ああ、一つもらおう」

おやじさんの手からトマトを受け取る。

そしてそれを口へ運ぶ。

がぶりと歯を立ててその果実に食らいつく。

裂けた果実からは甘い果物のような果汁が溢れ出して来る。

「まあ、ありじゃないか」

「だろ？じゃあ約束通り二つ買ってくれるな？」

腰のポーチの財布の中から銀貨^{100f}一枚と銅貨^{10f}を二枚取り出し、おやじさんの手に握らせる。

「はい、まいどありー」

「おぶー」

アルマイルが次に目指したのはアナートリア帝国の中心地でもあり象徴である、アナートリア城。

だが、今回は前回と同じように正面からは入らない。

イルネの寝室に爆弾を置いてくる事が出来るのだ。

きつとどこかに騎士団の内通者が居るはずだ。

城壁の壁を蹴り、飛ぶ。
手近な窪みに手を掛け、落下を防ぐ。

「確かイルネの寝室は最上階だったよな」

壁の窪み、出っ張り、窓枠。

全てが足場だ。

身体に吹き付ける風すらも心地良い。

「ああー、今日もあちーな」

城壁の弓兵が愚痴をこぼす。

「屋根が欲しいな」

それを機にもう一人の弓兵も愚痴をこぼす。

お疲れ様、と心の中で呟いて城壁の窓枠に手を掛ける。

「でも、平和だなー」

ヒュオオオオオオオ

吹き付ける風も2割くらい強くなり、手を滑らせて落下すれば即死

は免れぬまぬがだろう。
というか、高い。

どこに麦藁があるのか肉眼では見えない。
下手に【イーグルダイブ】すれば地面とキスをしかねない。

「ホントあちーな」

「全くだ。見ろ、雲一つ無いぞ」

「本当だ。雲一つな………んっ？何だあれ」

「おい、そこのお前っ。なにをしているっ!!」

「危ないぞ!!降りて来い」

空を見上げた兵士が声を挙げる。

「ちいっ!」

なんて運が悪いんだ。

俺も、そしてお前らも。

アルタイルは腕をくの字の曲げ、のばす。

反動でアルタイルの身体は宙へと踊り出た。

そして、その身体は当然の如く重力という名の見えざる手に引かれ
落下する。

「お、おっわっ!!」

「マジで降りてきやがったっ!？」

どすん、と音はしなかった。

代わりにバサバサとマントのはためく音だけが弓兵の耳に入った。

「す、すげえ……」

弓兵の一人が感嘆の声を漏らす。

「ばっ、馬鹿かお前はっ！？死にたいのか!!」

弓兵が声を荒げる。

しかし、そこにアルタイルの姿は無い。

「動くな」

後ろから二人の弓兵の首に手をまわし、「アサシンブレード」を展開。

両手首の鞘からしゃっ、という音と共に暗殺用の小刀がその牙を剥きだす。

「もう一度言う。動くな」

【アサシンブレード】を弓兵の首筋に当てる。

殺しはしない。

彼らは敵ではないのだ。

殺す必要は無い。

彼らは黙っていつも通りに過ごせばいい。

「わ、分かったから、命だけは……」

結局、先の弓兵以外には姿を見られることも無く最上階まで登れた。イルネの部屋がすぐそこにある。

しかし、入り口には4人の兵士がいる。

窓から中を覗けばそこにはイルネとメイドが2人いる。

どうする……？

アルタイルが部屋に入るかどうか考えあぐねていると好機が訪れた。

「では、私共は交代のお時間ですので失礼させていただきます」

メイドはイルネに頭を下げ、部屋から出て行った。

アルタイルは窓を開けると素早く部屋に飛び込むと物陰に身を押し込む。

「開けたかしら、窓」

「ばれたか…？」

「失礼します」

コンコンとドアをノックする音がした。

「どござ」

ノックに意識を向けるイルネ。

窓が開いていようとどうだっていいのだろう。
失礼します、と頭を下げ部屋に入ってくるメイド。

「まだ外には出れないのですか？」

「もう少しの辛抱でございます」

「……何回かしら、その台詞？」

ため息混じりの質問にメイドは抑揚の無い声で答える。

「118回目でございます」

しかも、一応数えているようだ。

イルネの生存は確認した。

後は離脱して、遺跡の調査を……。

「では、お着替えをお持ちしましたので」

「ありがとうございます」

イルネはメイドが持ってきた衣装を受け取ると

。

第34話：内通者

衣類の擦れる音。

目を逸らす。

身を物陰に押し込める。

瞳を閉じる。

頬が火傷したかのように熱い。

「アルタイルは元気かしら？」

言葉だけが耳に入ってくる。

否、言葉以外入らない。

瞳を閉じているのだから。

「エウサレムの貧困区にて白いフードの男の目撃情報が多数入ってきております」

アルタイルの脳裏にエウサレムの貧困区の町並みの光景が浮かぶ。

そして、暗殺対象であったサーダナ・バ・アーラットの夢を語るあの瞳を思い出す。

俺が悪で彼ら騎士団が善かもしれない。

あるいは、俺が善で彼らが悪かもしれない。

俺と彼ら、どちらが善で。

どちらが正しいのか、俺には分からない。

彼の　　サーダナのあの瞳を見てから考えるようになった。

「そして、白いフードの男は武器商人を殺害した後、逃走。番兵た

サーダナ・バ・アーラット

「ちはその身柄を拘束する事が出来なかったそうです」

あんな重い鎧をじゃらじゃらと着てて、俺に追いつける訳が無いだろう。

最小限の装備。

アサシンブレイド

そして、暗殺用突出型の小刀。

一撃離脱を主体とした戦い、暗殺。

アサシン

それが暗殺者の長所でもあり短所でもある。

最小限の装備は防御力不足を。

アサシンブレイド

暗殺用突出型の小刀は使い方を誤れば薬指が欠損する。

そして、暗殺者は特別な訓練を必要とするため少数精鋭で、まず仲間の援護は無いと言って良い。

騎士団に数で囲まれたら苦戦は免れない。

「確かエウサレムは騎士団信者が多いのよね？」

「はい、8割以上が騎士団信者でございます」

「となると、殺された武器商人はテンプル騎士団の手先か信者のどちらかですね」

「はい、手先であると同時に熱狂的な信者で、騎士団に従わない人々を虐げていたそうです」

「そつだ、俺は正しいことをしたんだ。」

「アイツを殺さなきゃエイフは……。」

「そつ、アイツは死んで、殺されて当然の人間だったんだ。」

「そんな事より、クシャトルカ国王様が城内であれば自由に歩い

ても良いとの事です」

メイドが話しの話題を変える。

しかし、エイフは今なにをしているのだろうか。

あの店で一人、働いているのだろうか。

「では、花壇の花の観賞でもしに行きましようか」

既に着替えは終わっているらしく、イルネとメイドは城内にある花壇へ行くらしい。

「仰せのままに」

イルネが部屋から出て行く。

そして、メイドもその後が続いて部屋から出て行く。

「さて、俺も退散するか」

窓に足を掛けて外に出ようとした矢先。

「さません」

とん、と軽い音を立て宙に身を躍らせるアルマイル。

「っ!?!?」

後に続いてメイドが宙に身を躍らせた。

メイドの右手には短剣ナイフが握られていた。

「貴方にはここで果てていただきます」

メイドが右手を振りかぶる。
刀身が太陽の光に反射してキラキラ輝く。

「理由はお分かりですね？」

メイドの右腕が、短剣が振り下ろされる。

アルタイルは腰の鞘から片手用ワンハンド両刃直剣ロングソードを抜き、応戦する。

「なんだ、イルネと花壇へ行つたんじゃないのかつ？」

直剣の腹で短剣の刃を受け止める。

「あれは、必殺【行つたフリ】です」

直剣で短剣を押し返し、そのまま剣を横に振るう。

しかし、足場の無い空中では上手く直剣を振るうことが出来ない。

直剣はその長さ故にリーチも長く、重い分パワーがある。

しかし、その長さで重さ故に取り回しの悪さ、つまり攻撃後の隙が大きいのだ。

「甘いですね」

メイドがアルタイルの懐に入り込み、短剣を突き出す。

「ちいっ！」

アルタイルはメイドの腹を蹴る事により回避する。

互いの距離が離れる。

それに反比例するかのように地面との距離がどんどん近くなる。

「このままじゃ、お前も死ぬぞ？」

アルタイルがメイドに話しかける。

が、メイドは答えず城壁を蹴ってアルタイルとの距離を縮める。

接近、接近、接近。

5 m、4 m、3 m。

「はあっ！」

アルタイルの放つ剣身はメイドの右腕をばっさりと裁ち、メイドは残った左腕を巧みに使いアルタイルの身体にしがみ付く。

バキッ！！

アルタイルの左腕を嫌な音が走る。

そしてそれは痛みとなってアルタイルの頭に信号を送る。

左腕の感覚が無い……？

そう思った時、目の前にメイドの顔がアップになって映る。メイドの口がガバツと裂ける。

犬歯、犬歯、犬歯、犬歯、犬歯！！

ずらりと並んだ歯は全て犬歯の如く鋭利だった。

「ぐああああああっ！？」

メイドがアルタイルの首筋に噛み付く。

いや、喰らい付く。

鮫サメのように首を振り、その肉を食い干切らんかのように。

懐に入られれば長剣など振るえない。

相手に噛み付かれていて蹴ることすら難しい。

ましてや、ブーツの鞘から短剣を抜くことなんて出来ない。

「ぢくしょおおおっ！！」

直剣を城壁に突き立てる。

ガガガと凄まじい音と火花と城壁の破片が飛び散る。
ぴきつと嫌な音がする。

「頼むから、保もってくれ！！」

速度が落ちていき、やがてその動きを止める。

「フッフ、残念ね」

メイドがアルタイルの首から離れたかと思うと、不敵に笑った。

閃光。

メイドの輪郭が膨張。

そして、破裂。

辺り一帯に熱と光を撒き散らした。

第35話：少年（前書き）

お久しぶりです。

ここ最近、自分はPCのやりすぎだ、ということとで親にPCを取り上げられていましたが、今日は親が旅行に行ったので無事に更新できました。

この【鏡の境界線】の続きを楽しみに待っていた読者の皆さん、更新が遅れて申し訳ありません。

では、【鏡の境界線 第35話：少年】をお楽しみください。

第35話：少年

「おはようございます、マリオ・バッテリーノさん」

少年は自分を養ってくれている命の恩人に頭を下げ、館の使用人の誰よりも早く一番に挨拶をする。

下げた顔に前髪が垂れ、黒いカーテンのようになる。
少年の歳は12、13歳前後といったところか。

「ああ、おはよう」

ベッドから老人が上半身を起こす。

老練された顔と雰囲気。
深く刻まれた皺しわと傷跡。

40歳を過ぎていながらも、その威厳は衰えることを知らない。
白髪の頭髪でさえ、その老人の風格を際立たせている。

「今日も早いな、レイヴン？」

老人は一度大きく息を吸った後、吸った空気より大きく伸びをする。
枕元の布を手にとると、それを額に巻く。

バッテリーノ家の朝は早い。

早朝の素振りから始まり、畑を耕し、家畜の餌やり、そして朝食。
朝食の片付けを使用人がしている間、神への挨拶。

マリオさんの言う、誓いの言葉を復唱し十字を切る。

その後、剣や槍、ボウガン、さらに素手を使った訓練をし、昼食。
昼食を食べた後は、休憩ついでにマリオさんに様々な話術や世界、

悪い人たちの事を学び知識を得る。

それが終われば次は魔法に関する訓練だ。

実のところ、僕は魔法が苦手だ。

僕は魔法が使えない。

だから、マリオさんには相手に魔法を使われた時の対処方を学ぶ。

「いいか、レイヴン。正義とは必ずしも正しい事ばかりじゃない」

それから、実践。

今日学んだことを生かしながら、マリオさんと木刀で打ち合う。

「間違ってることですら、その本人が正しいと思えばその全てが正義だ」

僕は黙って振り下ろされる木刀を右へ避ける
が、その時に
はマリオさんの左足が迫ってきている。

わき腹を抉られる
！！

激痛が走る。

まさに、わき腹の肉を削ぎ落とされるかのような。

「ぐはっ」

口から空気の塊が吐き出される。

一瞬の空白。

意識が飛んだ。

「正しい事をしていても力が無ければ、その正義は貫けない」

親が子に諭すように言う。

「強くなれ、レイヴン」

眼前に迫る木刀を確認するのを最後に意識がブラックアウトした。

レイヴン それは、渡り鳥^{カラス}を意味する。

名前の無かった僕に、マリオさんはこう名付けた。

僕が何故、大鴉^{レイヴン}なのかと尋ねると、彼はこう答えた。

初めてお前に会った時、お前が鴉に集^{たか}られていたからだ と。

どうやら僕はアナートリア城の裏庭に倒れていたのを、たまたま用事があつて城に来ていたマリオさんが僕を発見、保護したそうだ。

「起きろ、レイヴン」

マリオさんは身寄りも記憶もお金もない僕を自分の屋敷に泊めてくれた。

暖かい食事と寢床。

そして、彼は僕に生きる術を。

「そろそろ起きろ、レイヴン」

肩を揺すられて意識が強制的に連れ戻される。

暖かい　　ここはベッド、僕の部屋？

「夕食の時間だ、起きろ」

窓から見える太陽は既に半分以上沈みかけていた。

「また、僕は負けたのですね？」

「そうだ、お前は俺に負けた」

ここに来てから既に1週間経つが、マリオさんに勝つことはおろか
攻撃の一つも入っていない。

マリオさん曰く、僕の動きは決められた動きをするだけのからくり
人形と言った。

完璧さ故に動きを読まれやすい、そうおっしゃった。

僕は記憶を失う前、何をしていたのだろう？

頭の中を疑問が泡のように浮き上がっては消えていく。

「バッテリーノ様、お客様です」

コンコンというノック音と共に使用人が入ってきた。
襟元にはバツティノー家の紋章、十字の刺繍が刻まれていた。
確かカノウかスノウとかいう名前だったはずだ……多分。

「ウインシー・ファンクシヨン様が客間にてお待ちしております」

「ああ分かった、今すぐ行く。お前も付いて来い、レイヴン」

僕は素早くベッドから出て、身なりを整えた。

「久しいな、マリオ」

「何ヶ月振りかな、ウインシーが俺の屋敷を尋ねるなんて」

客間にいたのは長い金色の髪を後ろで束ねた女性だった。

歳は22歳か23歳ぐらい。

もしかしたらそれ以下かもしれない。

だが、歳がいくつであるとも目の前にはそれを補って余りある美しさがあつた。

綺麗な装飾の施された鎧甲冑や剣。

そして彼女の纏う雰囲気的なものが更に彼女の美しさを引き立てて

いる。

「んっ？どうした、マリオ。また女を連れ込んで子作りでもしていたか？」

老人の後ろに少年がいることに気付いたウィンシーが尋ねる。

「冗談はよせ、もう俺はそんな歳じゃない」

老人は肩をすくめた。

「少年、名前は？」

ウィンシーは少年の目線に合わせる。

少年は視線を逸らしながら首元のネックレスの飾りを握り締める。

「レ、レイ…：ヴン」

自分の名前は囁むし、語尾になるにつれて声は小さくなっていく。まさにしどろもどろの状態だった。顔が火事でも起きたかのように熱い。

「似ているな、アイツに」

そう言い、彼女は笑った。

「それでだ、アルタイルの行方は以前として知れず、その兄も行方不明……か」

彼女 ウインシーは大きく息を吐いた。

困ったものだ、と言いつくを見つめる。

「ウインシーさんは町の警備隊か何かなのですか？」

僕は話の間を縫って、思い切って尋ねてみた。

しかし、我ながらおかしな質問をしたものだと思う。

町の警備隊如きがこんな装飾の施された武具を身に着けるとは思わないし、思えない。

かと言って、貴族のようなものとは違うオーラを纏っている。

もつと、この人は大勢の人を導いて戦う、時のジャンヌ・ダルクをウインシー思わせた。

ジャンヌ・ダルク？

誰だ、それは？

マリオさんの話には一度も出てこなかった。

未知への恐怖。

自分の知らないことを知っている自分。

きつとまだ話を聞いていないだけだとレイヴンは自分に言い聞かせ

た。

しかし、得体の知れないソレは消えない。

「ふむ、遠からずとも近から「彼女はテンプル騎士団の総帥だ」

ウィンシーの言葉を横切ってマリオさんが言う。

僕はテンプル騎士団、と言う聞き慣れない単語に首を傾^{かし}げる。

その時、ガラスの割れる音と割れたガラス片と一緒に何か^かが屋敷に飛び込んできた。

白いフード。

赤い腰帯。

左腕の籠^{カントレット}手。

「^{アサシン}暗殺者っ!?!」

僕はマリオさんから教えてもらった知識を元にその正体の名前を搾り出す。

長年に渡り、テンプル騎士団と抗争を続けてきた

^{アサシン教団}宿敵!!

「マリオは少年を守れっ!!私がコイツを始末する!!」

そう言うが否や、ウィンシーは駆け出した。

ウィンシーの脚が館の床を蹴り、足鎧の爪が床にその足跡を残す。

接近、接近、接近。

4メートル、3メートル、2メートル。

接近、1メートル

「抜剣!!」

接敵!!

一瞬の交差。

一瞬の攻防。

剣と剣が重なり、ウィンシーの拳がアサシンの顔面にめり込む。

どごっ!!

そんな音が聞こえた。

その音はウィンシーの拳がアサシンの顔面を捉えた音かもしれないし、アサシンが館の壁に叩き付けられた音かもしれない。

ほんとに一瞬だった。

「レイヴンっ!!」

ウィンシーが僕の方を振り返り、叫ぶ。

僕は後ろを振り向く。

一体どうしたというのだ ?

直剣。

マリオさんに教えてもらったそれは。

人を斬る、絶つ、そして殺す。

そして、今現在。

それは僕に振り下ろされ、その命を絶たんとする。

「スカーレット・ケリン
紅き閃光!!」

ウィンシーは右手の片刃直剣を突き出す。

そして、閃光の如きヒカリ。

そのヒカリは一直線に走り、直剣とアサシンを頭部に大穴を開ける。

溶けた剣先がレイヴンの胸を軽く撫でる。

焦げた臭い。

それは誰の？

僕の髪の毛の焦げる臭い？

違う、そんなもんじゃない。

これは、これは

人の焼ける臭い。

異臭が鼻腔を撫で回し、吐き気を催促させる。

間近で見た死体はマリオさんに教えてもらったモノとは。

大きくて小さく、遠くて近い、そして僕の想ゾウヲharutak

ani-koeteita.

「蓮^{レン}、早く来ないと置いてくぞ」

少女が少年を呼ぶ。

少年の名前は蓮と言っらしい。

蓮と呼ばれた少年は履きかけの靴をそのままに勢いよく玄関から飛び出す。

「まだ時間あるだろ、唯依^{ユイ}」

唯依と呼ばれた少女は長く伸びた黒髪を風になびかせながら、やれやれと言った風に首を振る。

現在、午前3時。

ケータイの表示と　の目が正しいなら、時間は学校に行くまで十分過ぎる程ある。

というか、十分以上あった。

「大体、明日はもう中学校が再開する日だぞ？」

夏休みも最終日

昨日の今日は昨日の明日。

つまり、今日は既に学校が再開する日だった。

はコイツに振り回されるのも悪くないと心の中で呟き、差し出されたその手を取る。

「で、何処行くんだ？」

少女は握られた手を強く握り返してこう言った。

あの時、少女は少年になんて言ったのだろう。
そもそも、あの少年は一体 記憶 ？

「やっと、目を覚ましたなレイヴン？」

すぐ傍で声が聞こえた。

この感触　　ベッドだ、それも僕の部屋の。

「まだ頭で完全に血は行っていないようだな」

目には綺麗な装飾の施された天井が写る。

知らない天井　　？

違う、ここはマリオさんの屋敷だ。

知らないハズがない。

ただ、違和感を感じる。

ズレというか言葉に出来ない何か。

僕は頭を動かし横を見る。

そこには彼女　　ウインシーが椅子に座っていた。

「あんな事があった後のくせに、幸せそうな夢を見ていたのか？」

幸せ？

あれはどこにでもある日常生活だ。

普通に起きて。

中学校に行く準備を済ませて。

友達と、幼馴染と喋る。

そんな……………。

中学校？

なんだ、なんなんだ。

俺の知らない単語だ。

俺の知らない事を知っている俺がいる？

それは誰だ？

記憶を無くす前の俺か？

俺？

俺とは誰だ？

僕は、俺は

「しっかりしろ、レイヴンっ！！」

僕ははつとして辺りを見回す。

ウィンシーさんが僕の肩に手を置いている。

僕の肩を通じて体温が、暖かさが伝わってきた。

熱を持つ顔とは裏腹に僕の心はより冷たくクールに、より鮮明クリアに澄み渡る。

「今はゆっくり休め……………レイヴン」

ウィンシーの声が僕の鼓膜を心地よく振動させる。

僕はもう一度、目を閉じた。

第35話：少年（後書き）

いきなり誰だよ、コイツ？

そう思った読者の皆さん、こんばんは。

レイヴンってまさか……！

そう思った読者の皆さん、おはようございます。

他の読者の皆さん、こんにちは。

どうも、猫目です。

E3でアサシンクリードの新作の発表があったそうですね。

その名も、アサシンクリード ブラジ……。

だ、誰も下着のことを言おうとなんてしてませんよ、はい。

勿論、シスターフットですよ？

違う？

いえ、そんな訳ありません。

女のアサシンは、身体という新武器で……。

すみません、調子に乗りすぎました。

反省はしています。

第36話：大鴉と大鷲（前書き）

やっと親が寝た

第36話：大鴉と大鷲

チュン、チュン。

開いた窓からは太陽の暖かい光と小鳥のさえずる声が入ってくる。僕はまだ眠たいと主張する身体に鞭打ってベッドから這い出る。

「マリオさんに挨拶しなくちゃ」

僕は短く伸びをすると、服を脱いだ。

シャツが汗でびっしょりと濡れていた。

視線を横にずらす。

ベッドの横にはいつも机のところにある椅子が出ていたのでついでにしまっ。

マリオさんが座っていたのかな。

そう心の中で呟きながら昨日の事を思い出す。

いや、思い出そうとした。

「っー」

頭にズキンと痛みが走る。

僕は思わず頭を抱えてその場にしゃがみ込む。

しかしその痛みはすぐ収まった。

僕は急いで服を着替えると部屋を飛び出した。

「おはようございます、レイヴン様」

通りすぎる使用人たちが挨拶をしてくれた。

が、僕は軽く頭を下げ走った。

長い廊下を走る。

右に曲がる。

角から飛び出して来た僕に使用人が慌てて飛びずさる。

「すみませんっ！！」

使用人にはもう一度後で謝っておこう。

僕はマリオさんの部屋をノックしながら息を整えた。

服装を整える。

その間、0.3秒……多分！

「おはようございます、マリオさん」

挨拶は清々しく、扉を開けるその様は優雅に開けたと思う。

しかし、そこには先客がいた。

紅いベッドの傍で佇んでいるのは使用人だ。

カノウとかスノウとかそんな名前だったはず。

襟元の十字架はバッテリーノ家の家紋で、数いる使用人のなかで唯一その紋章を身に纏う事を許されている。

「お目覚めが早いですね、坊ちやま。もう少し遅ければ長生きで逃げろ、レイヴンっ!!」

使用人たちの長の声を遮ってマリオさんが叫ぶ。

「毒薬トリカブト如きでは駄目ですか、しづといですね」

使用人は右手のナイフをベッドに突き立てる。

紅い……？

違う、マリオさんのベッドはこんな色じゃなかったはずだ。

そう、白だ！

ベッドが紅く紅く紅く、マリオさんの血で染まっている!!

「ああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

僕は二人に背を向け、部屋を飛び出した。

【side - - カノウズ・スノウ】

「フン、一人逃がしたか……」

私は部屋から飛び出していった一人の少年を見送ると、目の前の標的^{ターゲット}に向き直る。

「何故、こんな事をするん、だ……スノ、ウ？」

紅いベッドで息を荒くした老人が掠れた声で呻く。

そろそろナイフに仕込んだ毒が回ってきたのだろう。

強い麻痺性とたった数分で死に至らしめる毒性。

「聞いてどうするんですか、もうじき死ぬと言っのに？」

あの少年はもうじき使用人の手によって死ぬだろう。

私が何年、いや何十年費やして計画した壮大な下克上。

使用人の9割が私の部下だ。

無論、残りの1割は地下牢に閉じ込めてある。

「一人の男が自由を欲した、ただそれだけのことです」

とどめだと言わんばかりに渾身の力を込めてナイフを振り下ろした。

「かほっ」

どんな凄腕の傭兵、伝説的な英雄、時の王でさえその老いには勝てぬように、また目の前の老兵もその老いには勝てない。

傭兵であり、英雄でも王でもあった目の前の男はその生涯を終えた。そう、私のこの手で！！

「あは、あはははははは」

渴いた嗟い声が絶えず口から零れ出る。

私は一笑いした後、少年の殺害を思い出した。

「一応、見てくるとしますか」

男の身体からナイフを抜き、腰の鞘に納める。

私はもう一度男の顔を見た後、この部屋を後にした。

【side・レイヴン】

走る走る走る。

でも、何処へ？

僕は何処へ行けばいい？

分からない。

床を蹴る足に力が弱くなっていき、やがてその動きを止める。

「……………」

疲労なんてまったく感じなかった。

でも、足は床とくっついたように離れない。

背後に気配を感じた。

「……………」

僕は後ろを振り返る。

そこには十字の紋章を襟に刻んだメイドが立っていた。

右手に凶器ナイフを携えて。

「……………」

僕はとつさに腕を交差クロスさせ、頭を守る。

目を閉じ、その来る衝撃きたに身構える。

「……………せん」

しかし、その来る痛みは愚か、衝撃さえ来なかった。

僕は恐る恐る顔を上げる。

「この子を殺すだなんて、私にはできません…！」

ナイフは高く振り上げられたまま、その役目を果たしてはいなかった。

「アリアさんっ、マリオさんが……マリオさんがっ！」

使用人長のスノウとその妹のアリア。

僕は思い出したように目の前の女性アリアにすぎる。

アリアはややあつて言う。

「知っています、マリオ様の事も兄のしよつとしてのこと……」

そう言つてアリアは顔をうつむかせた。

「そんなっ……！」

彼女は言う。

私も共犯者の一人、だと。

「嘘……ですよね？」

しかし、僕の望んだ答えは返ってこなかった。

静寂。

「レイヴン様は何故、レイヴンなのか知っていますか？」

静寂を切り裂くようにアリアが問うた。

レイヴンは首を縦に振ろうとしたがやめて、横に振った。

『昔、凄腕の傭兵がいました。その傭兵は金で雇われ、あまた数多の戦場に赴き、そして数え切れないほどの命を奪いました。

ある日、凄腕の傭兵は戦場で孤児を見つけました。

別に孤児自体は戦場においては珍しくはありません。

しかし、力尽き鴉に身体を貪られるそんな少年を見ていられなくなつたのか傭兵は少年を助けました。

そして、生きる術を教えました。

自分が生み出してきた技を知恵を全てをその少年に教えました。

少年は強く、賢い青年になりました。

凄腕の傭兵は英雄になりました。

敵から国を守る、矛と盾として傭兵は王女の夫になりました。

そして時は過ぎ、傭兵は王に、青年は傭兵になりました。

王は民の事を一に考え、良い国になるよう国に尽くしました。

さらに時は流れ、王の国と隣国は戦争を始めました。

青年は王のためにスパイとして隣国で雇われ兵になります。

王はもつと情報を欲しがった。

しかし、雇われ兵では限界があつた。

そこで青年は王の国から重要文献とその試作品を持ち出した。文献には研究途中の新兵器のことについて書かれていた。

【大量の火炎系の魔術師の血まりよくと炎を氷結系の魔法で凍らせる。そして、氷が溶けるあるいは砕けた場合は中身の火炎系の血が辺りに飛び散りそれに炎が発火。広範囲を焼き払うことができる大量殺人兵器フレイムコア】

それが使われる前に王は決着つけようとしたが駄目だった。

王は老いと病に倒れた。
結果、新兵器は実戦に投入され兵士の大半が一瞬にして灰となり塵となった。

半年後、大ダメージを負ったもののなんとか王と国は隣国に勝利した。

が、一つ問題が残った。

裏切り者の青年のことだ。

王の力をもってしても隠し切れなかった。

だから、王は青年を

『

自らの手で葬り去ったのです、と言つ言葉を異国の言葉を聴いているような感覚にとらわれる。

ホウムリサツタ……？

レイヴンは分からないと言つたようすでアリアの顔を見る。

「貴方とレイヴンはとてもよく似ています。顔だけじゃなくその仕草や瞳がよく似ているのです、しかし」

一拍置いて

「貴方は大鷲^{アルタイル}。狡猾で荒々しくも獰猛な勇者^{アサシン}。さあ、羽ばたきなさい、孤高の鳥よ^{きみ}」

アリアがアルタイルの手を引いた。
スロインク
投擲用ナイフが足を掠めた。

「自分の部屋にいきなさい、ここは私が足止めします」

1、2、3、4、5、6、7。

7人を相手に足止めだなんて……。

「まあ、早く……」

走った走った、走った。

走って走って走って、走った。

目指すは僕の部屋。

『やっと、フラグが成立したわね。ほんとに世話の焼ける男』

鏡の神は笑う。

『後はアルタイル次第』

ミラは館を後にしようとして背を向け玄関へと歩き出した。

第36話：大鴉と大鷲（後書き）

遅れてすみません。

誤字脱字の報告や感想をお待ちしております。

第37話：鴉消えて、大鷲

「いたぞ、あそこだ!!」

長い廊下の先の使用人たちが叫ぶ。

が、走った。

長い廊下を走る。

右に曲がる。

角から飛び出して来た僕に使用人が慌てて飛びずさる。

しかし、それが自分の獲物だということに気付き、少年の背中を追う。

「おい待て!!」

少年は振り返りざまに裏拳を打ち込む。

速度の乗った裏拳は使用人の顎に食い込み、脳を揺らす。

そして脳震盪を起こした使用人の腕を掴み、引く。

クロスクウォータースコンバット

【CCC】

近接戦闘術とも言われるそれは老兵から少年に受け継がれたものだ。無論、駄目押しのように壁に叩き付けられた使用人は意識を失った。少年は増援が追って来てるのを視界の隅で確認すると走り出した。

「アサシンはあそこだっ！」

屋根の上に居た番兵が叫び、肩から弓と矢を手に取り、構える。しかし、男は右肩の肩当てのナイフホルダーから抜き放つ。男の手から投げ放たれたナイフは番兵の眉間みけんを正確に射抜いていた。

「うぎゃっー！」

よろよろと番兵は歩いて屋根から落ちた。

「仲間がやられたぞ！」

男を追って来た兵士が家に梯子はしこを掛けた。

男は家に掛けられた梯子を蹴って、梯子つかに？まる兵士ごと倒す。

「ぎゃあああああああー！！！」

響く悲鳴をBGMに男は再度、駆け出した。

廊下を駆ける少年の脳裏に遠い日の記憶が再生される。

今の自分の状況と頭の中で再生される記憶たちを重ねて苦笑する。
少年は角を右に曲がると扉を開けてなかに飛び込んだ。

レイヴンの部屋。

思い出した、全て。

そう、僕は　　いや、おれは……！

部屋の中には使用人が二人、剣を構えて待っていた。

それでも俺は屈しない。

俺は叫ぶ　　！

「俺は大鷲^{アルタイル}。孤高の勇者だ！！」^{アサシン}

『おめでとじ』

そこに居たのはもう誰かの後を付いていくだけの少年ではなかった。
一人で　　自分の足で立つ、青年だった。

白いフードを深く被り、左肩の紅きマントを窓から入ってくる風に
なびかせた男。

暗殺者、勇者、英雄、伝説　。
アルタイルは腰の鞘から剣を抜き、構える。
突然のことに何もせず突っ立てた使用人が慌てて剣を再度構える。

「もう、逃げない　　！！」

『あら以外とあつけないものね』

女神は人の骸を蹴る。

既に事切れている。

『たかが人間風情で、それもたった7人で私を殺せるとでも？』

女神は笑う。

女神は一笑いした後、つまらないといった様子でため息を吐く。

『フッフ、この身体にも飽きちゃった』

「はあっ」

先に動いたのは使用人の方だった。
使用人は剣を正面に構えアルタイルに接近する。

「死ねっ」

振り上げられた剣が太陽の光に当てられキラリと輝く。
アルタイルは上半身を左に回す。
背中を剣が撫でていく。

そして右肘　　！

「か、っは　　」

アルタイルはその体勢のまま右肘を使用人のがら空きの鳩尾にねじ
込ませる。

使用人の口から空気の塊が零れた。
その隙に使用人の背後に回る。

右腕を引く

右腕を伸ばす

！！

「んぎいいいい！！？」

右手の直剣は使用人の背中に吸い込まれるよう刺さる。

淡々と深く。

アルタイルは足で使用人蹴るように押さえる。

巻き戻しされた動画でも見ているかのように直剣が引き抜かれた。

「ジョンっ

！？」

そして同時にアルタイルの胸を激痛が走った。

「くっ……！！」

『罪無き者を傷つけることなかれ』

「そうか、そういうことか……！！」

アルタイルは痛む胸を左手で押さえながら右手の直剣を鞘に収める。
拳を正面に構える。

マリオさんに教えてもらったこの【CQC】でなら、人を殺すこと

なく無力化できる ！！

「よくも……よくもジョンをつっ！！」

凧ぎ払われる剣をその場でしゃがむことで回避。
そして逆に使用人の足を薙ぎ払う。

「おうあっ!?!」

ボタンつと大きい音がした。

大の字に投げ出された使用人は意識を投げ出した。

「……邪魔だな」

先ほどの音を聞きつけて他の使用人たちも集まってくるだろう。
その時にこの二人を発見されては厄介ごとが増えかねない。

部屋に視線を走らせる あつた!!

このクローゼットならば二人くらい入るだろう。

アルタイルは使用人を引き摺ってクローゼットまで運び、その身体をクローゼットに押し込む。

「ぶっ」

そして一息。

一瞬、焦げ臭いがしたような気がした。

けれど、それは久ぶりに嗅ぐ血の臭いだろうと決め付けた。

しかし、血という単語でこの部屋に残る問題を思い出す。

使用人はなんとか隠せたけれど残った血痕だけはどうしても隠せれない。

「お疲れ様です、お坊ちやま……いえ、暗殺者？」
アサシン

ゆっくりと振り返るとそこには使用人の長　カノウズ・スノウ
がドアにもたれ掛かるように立っていた。

「若い頃の旦那様マシオのようでしたよ」

そう言いスノウはドアから背中を剥がすと手招きした。

「こんな所で戦うのもなんですし、屋上に行きませんか？」

アルタイルは目の前の信用出来ない男の動作を見逃さないように注意しながらその後続いた。

「着きましたよ、屋上」

煙、白い煙、灰色の煙、黒い煙。
館が燃えている　？

「あと数十分もしない内にこの館は炎に包まれます」

腰の鞘から直剣を抜き、構える。

同時にスノウも腰の鞘から獲物の抜き放つ。

「勿論、使用人は全員非難済みです。これで心置きなく私と戦えませよね？」

短くて長い永い戦いが始まった。

第37話：鴉消えて、大鷲（後書き）

誤字脱字、感想等お待ちしております。

7月5日誤字修正

第38話：ナミダ（前書き）

まさか、もうこんなに時が経っていよつとは……………。
取りあえず、すみませんでした。

第38話：ナミダ

「この館は、恐らく数十分も経たない内に全焼します」

アルタイルは右手の得物を再度、しっかりと握り締める。

そして、それを正面に構える。

それに釣られて目の前の男

カノウズ・スノウも得物を構える。

「……言葉なんて意味の無いモノなんて不要ですね！！」

先に動いたのはスノウだった。

屋上とはいえそれはベランダと言っても過言ではない程に狭い。

両者の距離はぐっと縮まった。

2メートル 剣を逆手に持ち変える。

1メートル スノウが剣を振り上げる。

スノウの右腕が振り下ろされ、アルタイルの右腕が振り上げられる。

キーンという音と火花が飛び散った。

「まさか受け止められるとは、思いませんでしたよっ！！」

スノウ アルタイル
剣と剣が激しく鏝迫り合う。

「正面から奇襲も無しに、良く言ったものだな」

体勢的にややこちらの方が不利だが、勇者としての力が加わり、腕

力が増加され結果としてはこちらの方がやや有利だ。

「それもそうですね」

突然、スノウが均衡を崩した。

片や、引かれ。

片や、空を斬る。

「なにっ!？」

いつの間にかスノウの左手には小型の反りのあるナイフが保持されていた。

そしてそれを突き出した。

アルタイルは辛うじて上体を反らすすることによってそれを回避する。

アルタイルの胸の上、3センチを通過する刃。

少しでも自分の回避が遅ければなっていたであろう結末に冷や汗が出た。

アルタイルは素早く右腕を地面に降り下ろす。

逆手持ちだった直剣を地面に突き刺さる。

空いた両腕でスノウの突き出された腕の手首をしっかりと掴み、左腕を巻き込むように上半身を捻りながら沈めた。

【背負い投げ】

「かはっ」

背中から屋上の床に叩き付けられたスノウが空気の塊を口から吐き出す。

ナイフはスノウの手から離れ、床を滑り二人から少し距離を取る。ナイフは手摺りの柱にぶつかかり、初めてその動きを止めた。

アルタイルはそのままスノウの腹の上に馬乗りになって拳を振り上げる。

左手でスノウの左手首を押さえ、スノウの顔面を右拳を叩きつける。前歯は折れ、鼻も曲がりその鼻の穴からは血が絶えること無く流れる。

1回、2回、3回
4回、5回。

「じ」のっ！

振り下ろされたアルタイルの拳を掻い潜ってスノウがアルタイルの鼻に自らの額を打ち付ける。

「ぐはっ」

スノウは好機を逃すまいとアルタイルの拘束を解き、立ち上がる。そして、屋上の床に直立する、ある物に手を伸ばす。

白銀色の金を装飾の施された直剣。

閃光が走る。

顔を横に逸らす。

直剣の切っ先が耳元の床を抉り、突き立てられる。

次こ攻撃がくる前に横に転がって距離を取る。
白銀色の直剣が執拗にアルタイルの後を追う。
体勢を立て直す暇もなく、アルタイルは横転を続けた。
目の前に手摺りが現れる。行き止まり。
嬉々とした表情でスノウが右腕を振り上げた。
太陽の光に照らされ、直剣の切っ先が煌めく。

「……かはっ」

いつまで経っても、これから来るであろう痛みは来なかった。
代わりに、アルタイルの顔に何かが降り注いだ。

血だ。

白銀色の直剣がフードの中　アルタイルの左耳を掠めて、床に
突き刺さっていた。

スノウの左胸から何かが生えていた。
いや、突き出ていた。

スノウは左胸の剣を視認すると首を動かして後ろを　　痛みの根源を見ようとした。

しかし、心臓が脳に血を送ることをやめたスノウにそれを見る事は叶かなわなかった。

事切れ、目の前の手摺りに倒れ込んだスノウの骸とフードを床に縫い付けている直剣を抜き、立ち上がる。

「マリオさん……?」

分かってはいても聞かすにはいらなかった。

「……ああ」

「本当に、マリオさんなんですね?」

「ああ、他に何に見いガハッ」

マリオはその口から涎と血の混じった液体を吐いた。膝と手を着き　　しかし、左腕は肩から切り下ろされており、その場で丸く身体を縮めて激しく咳き込む。

「どうしたんですか、その腕はっ!?!」

慌ててマリオの傍に駆け寄る。

マリオは駆け寄ってきたアルタイルを手で制すと、再度血の塊を口から吐き出す。

肺と身体から空気と血を全て吐き出さんかのように咳き込む。

咳はまったく止まる様子がない。

そして、館を求めるように暴れ狂う火も鎮火する素振りを見せない。

まずい、このままでは。

アルタイルは直剣を鞘に納め、マリオを肩に担ぐと屋上を後にした。

既に火はすぐそこまで来ていた。

それでも構わず、火の蔓延る廊下を駆けた。

すぐに息が切れた。

太腿が痛い。

酸素が、空気が欲しい。

燃え盛る炎の所為で酸素の薄くなった館ではもう全力で走る、などといった行為はもう無理だ。

休みたいと要求してくる身体に鞭を打つと緩慢な足取りで歩いた。

歩いた。

白い暗殺者の装束は真っ赤に染まっていた。

歩いた。

咳が　　鼓動が止まっても離さなかった。

歩いた。

もう、頬を伝う涙は炎によって乾いていた。

歩いた。

もう、泣いてはいない。

歩いた。

きっと涙は枯れているのだろう。

それでも、歩き続けた。

一本の直剣を地面に突き立てる。

なんの装飾も無い、無骨なデザインの鈍色の剣。

その元には、彼が眠っている。

アルタイルは、今だ火を上げる館を背中越しに見、目の前の墓標に手を合わせる。

館からはそう離れていない森の丘。

ここでマリオさんはウィンシーと初めて出会ったそうだ。

いきなり斬りかかってくのものだから驚いたよ、と苦笑混じりに話していた彼の顔を思い出し、胸がなんとも言えぬ痛みが走る。

暗殺者の信条を破った時とは違う痛み。

初めて味わう未知の苦痛に額に眉を寄せ、呟く。

「どっして、こんなこと……。」

もう、涙は枯れていた。

第38話：ナミダ（後書き）

すみません、約2週間振りの更新です。

更新を心待ちにしていた、読者の皆さん本当にすみません。

それとプレイしてきましたよ、ラストランカー！。

ラストレイヴンみたいなノリでつい買ってしまった。

プレイして21時間。

やっとセンゴクを倒して7位になりました。

さよなら、36位。

はじめまして、7位。

これで自分も七騎士の仲間入りですね、へへへ。

まあ、そんなこんなで感想、誤字報告等をお待ちしております。

7月20日：内容追加

短話・ネクストターゲット(前書き)

その名のとおり短いです。

短話：ネクストターゲット

「次の標的は、ネクストターゲット一GA《ガン・アーマメント財団》のBFX帝国のベルナルフェリックス女帝メアリー・シエアリーと隣国のロウマ教皇のロードリグ・ボルジアだ」

何ヶ月振りにアサシン教団の支部に帰還したアルタイルを待っていたのは、行方不明の友を気遣う言葉ではなかった。

「騎士団の奴らは最近、行動が活発になってきた」

ウィンデューは机の上にベルナルフェリックス帝国の中央区の地図を広げる。

地図には各所各所に赤いインクでバツが打たれている。

「この赤い罰点が番兵等の騎士団の手先だ」

ウィンデューはこことここが危ないとか人の数が多いとか罰点ごとに説明してくれる。

しかし、説明を聞き終わったアルタイルの頭の中には説明の4分の1も入っていないかった。

「悪い。もう一度説明してくれないか？」

いきなりなことだ困惑するアルタイルに呆れた様子でため息をつくと、アルタイルに向き直った。

「いいか、アルタイル。只でさえ活発だった奴らの動きが伝説の老兵でありウィンシー派の重役マリオ・バツティーノを失った所為で、

ユウリ派……つまり過激派が檻から解き放たれたのだ」

ややあつて付け足す。

「姉ではもう、過激派のユウリを抑えきれないのだ……。」

『今回は過激派であるユウリの後ろ盾となっているベルナルフェリックス帝国の女帝メアリー・シエアリーと教皇のロードリグ・ボルジアを始末する。これで、奴らも少しは頭が冷えるだろう』

メアリー・シエアリー
標的は演説の途中だった。

その口で正義と悪を説く。

彼女の演説が終わった途端、一斉に歓声上がる。

「ベリナルフェリックス帝国万歳！！メアリー・シエアリー様万歳！！」

彼女の場所からは町の広場を見下ろせるようになっており、そこでは国民が、崇拜者が騎士たちが彼女の演説を聞くが為に買い物に広告のため、様々な目的で集合している。

アルタイルのいる教会の屋根からでは標的の傍らに立つボデイガード護衛が邪魔で標的の姿が隠れてしまっていた。

もう少し近づいても問題ないだろう。

そう判断しアルタイルは片膝クニーから立ち上がると、下にいるであろう番兵たちを感じつかれぬように慎重に屋根と屋根を伝い、移動を始めた。

短話：ネクストターゲット（後書き）

ご無沙汰です。

やはり、メアリーときたらAC好きの自分としては狙撃主を思い出しますね。

でも、自分としては2世代のリリウムの方が好みだったりもします。みなさんはどちらが好きですか？

7月21日：国名と人名変更

第39話：女帝（前書き）

珍しく、連続更新。

第39話：女帝

アルタイルの上を一匹の鷲が通過していった。

「こんな街中に鷲か……珍しいな」

小さく呟くと、アルタイルは一旦動きを止めて鷲の行方を目で追った。

鷲は標的メアリーからそう遠くない塔の天辺に留まった。

幸い、奴らは標的に気を集中している。

多少の事ならばねえだろう。

アルタイルは鷲の居座る塔を目指して駆け出した。

アルタイルは壁の出っ張りに掛けた腕に力を入れると、重い身体を塔の天辺に引き摺り上げた。

いきなりやって来た訪問者に驚いたのか慌てて鷲が塔から飛び立つ。しかし、アルタイルはソレを気にも止めず深呼吸をする。

「ハアハア……」

息が上がっていた。

久ぶりにする激しい運動に身体が悲鳴を上げていた。

幾らマリオさんの訓練を受けていたとはいえ、それは子供用のものだ。

数ヶ月のブランクはまだ取り戻せていない。

こんな調子で二人も暗殺できるのか不安になった。

アルタイルは深呼吸を続けながら標的のいる場所に視線を向ける。

「ッ!？」

見られた。

いや、見られている？

金色の長髪。

整った顔。

女帝の名に相応しいその雰囲気。

彼女　　メアリー・シエアリーはアルタイルに微笑みかけると

軽く頭を下げた。

まるで、こちらの位置を知っているかのよう。

そして、口を動かし何かを伝えようとする。

『や』

『や』

『な』

『ひ』

何か太陽の光に反射して煌く。
メアリーはそれを引いては離れた。

メアリーの手から放たれたそれは一直線にこちらに向かってくる。

「ちいっ」

アルタイルは身体を捻ることによって飛来するソレを避ける。
ソレは空を飛ぶ鷲の心臓を射抜いてその動きを緩めた。

「なるほど、彼女は弓術を使うのか」

アルタイルは額の嫌な汗を左手の甲で拭い標的を睨みつける。
しかし、メアリーはアルタイルの睨みに屈した様子は無く護衛に弓と矢を返すと国民に手を振りながらその場を後にした。

「こちらの動きは読めてるってか」

初めて訪れたベリナルフェリックス帝国の町並みを一通り頭に叩き込むと空へ身を投げ出した。

「思ったより行動が速いな……」

アルタイルは相手の行動の速さに舌を巻いた。
まあ、当然か。

彼女は俺を逃がす気は無いらしい。

標的を微笑み思い出して、唇を噛む。

「甘いな、暗殺者。姫様は千里を、いや万里を見渡せるほどの眼を持っていらつしやる」

藁から出でみれば4人の騎士たちに囲まれていた。

「今回は相手が悪かったな、暗殺者!!」

一斉に抜剣し、戦闘態勢に入る。

アルタイルも彼らに続き、腰の鞘から直剣を抜く。

「はあっ!!」

一人が上段構えで突っ込んでくる。

「悪いな」

右肩のナイフホルダーからナイフを2本引き抜く。

投擲

オーバースローの要領で上段から腕を振り下ろす。

1本目が投擲され突っ込んできた騎士の腹部に突き刺さる。

2本目投擲

振り下ろした腕を返すように振り上げる。

アルタイルの手から放たれた2本目のナイフは突っ込んできた騎士の接近と息の根を完璧に止めた。

「新人!!」

「ふん、素人まで投入してくるか。よほど良い腕の奴はいないのか？」

直剣を逆手に持ち替え、手招きする。

「なにをつ!!」

アルタイルの挑発に顔を赤くさせながら、一人の騎士が駆け出した。あの騎士は怒りによって目の前で投擲ナイフにより仲間を失ったことを忘れてるらしい。

二の舞にしてやろうか

アルタイルが右肩のナイフホルダーのナイフに手を掛けた時、

「待て」

静止の声が入った。

その声に冷静を取り戻したのか騎士は接近を止めた。しかし、どちらにせよ的に変わりはない。

「なかなかやるようだな、暗殺者。しかし、周りを見てみる」

騎士の一人が言った。

アルタイルは言われるがままに、さっと視線を走らせる。

しかし、何も無い。

動かない騎士を始末しようとして一度は止めた動きを再開する。

・・・バァン！！

濁いた音がしてアルタイルの足元の地面が決れる。

アルタイルははっとして上を見る。

民家の屋根の上に番兵たちが

1人、2人、3人 合計13人いた。

その内の一人の手元から煙が上がっていた。

「銃……なのか？」

アルタイルは恐る恐る尋ねた。

「ほお、以外に博識だな」

アルタイルの予想は悪い意味で的中してしまった。

13個もの銃口がアルタイルの頭部、胸部、腹部、腕部、脚部を捉えている。

前にもこんなようなことがあったな。

いつかの記憶を思い出し。

笑みがこぼれる。

もっとも、いつかの記憶の中では弓だったが。

アルタイルの笑みを余裕と解釈したのか、再び騎士が剣を構える。

「何がおかしい？」

「いや、前にもこんなことがあったなって思い出してね」

苦笑混じりに答えてみた。

二度あることは、三度ある。

アルタイルはそうならないように、何処かにいる神様に願った。

「連行しろ」

騎士の一人が顎でアルタイルを指す。
二人の騎士が近づいてきて、アルタイルの手から、右肩のホルダーから、左足のブーツの鞘から、
武器となる物を没収した。

今だにアルタイルは13個の銃口に狙われていた。

手に手錠を掛けられた。

銃を構える番兵たちを憎々しい目で射抜くと騎士の後を歩いた。

「これはなんて晒しプレイなんだ？」

白いフードの男が手錠を掛けられ、騎士に囲まれながら連行される。
さぞかし、国民たちの目には奇怪な光景に見えただろう。
アルタイルは唇を噛みながら左腕を見る。

【アサシンブレード暗殺者の隠し刀】

右腕を見る。

【アサシンブレード暗殺者の隠し刀】

此処では国民の目がある。

これ以上騒ぎを大きくして、標的のガードが固くならないように慎重に行動しなければならぬ。

とは言っても、捕まってる時点で慎重もクソもないのだが。

アルタイルは好機を逃すまいと周りに視線を巡らせる。

「さっさと歩け!!」

いつの間にか足が止まっていた。

歩こうとしないアルタイルに痺れを切らしたのか後ろの騎士がアルタイルの背中を押す。

考え事をしていたアルタイルは咄嗟のことに対応しきれずに無様に倒れ込んだ。

口の中に入った砂利に顔を歪ませながら立ち上がるうともがく。

「立て」

一人の騎士がアルタイルのフードを掴んで引き上げる。

「離せ!!」

アルタイルは騎士の手を払いのけた。

しかし、無理な動きが祟ってフードが取れてしまった。

「しまっ

」

アルタイルは手錠の掛けられた不自由な腕でなんとかフードを被り直すと騎士たちと歩を進めた。

S I D E ・ エ イ フ

「白いフード？旅人の人かしらね？」

「白いフードの男が騎士に連行されているぞ！！」

店の外からそんな声が入ってきた。

トマトを3つ手に取り、おじさんに代金を渡す。

「なにかあったのか？」

「そうみたいです」

八百屋のおじさんに軽く会釈すると店を後にした。

「白フードの男、暗殺者らしいぜ？」

エイフははつとして隣を駆けて行った少年たちを見る。

少年たちは角を曲がり、見えなくなった。

少年たちが曲がった先にあるのは大通りだ。

少しくらい寄り道してもいいだろう、そう呟き少年たちの曲がった角を曲がった。

「見るよ、あれ！」

「だっせえー」

先ほどの少年たちが意のままに白いフードの男が連行される様を見ながらケラケラ笑う。

白いフードに彼の面影を重ねて、胸に走る痛みに気付く。

少年たちに悪意はなくとも彼を貶してるような気がして、不愉快な気持ちになった。

これ以上見ているのも辛くなって、その場を後にしようと背を向けて歩き出そうと

「さっさと歩け!」

歩こうとしない白フードの男に痺れを切らしたのか後ろの騎士が背中を押す。

白フードの男は咄嗟のことに対応しきれずに無様に倒れ込んだ。そして、立ち上がるうともがく。

「立て」

一人の騎士がフードを掴んで引き上げる。

「離せ!」

白フードの男は騎士の手を払いのけた。

この声は

「まさか　？」

振り向いたエイフの目に映ったのはフードが取れた彼の顔。

「アルタイル!!」

咄嗟に彼の名前を叫んでしまったが、エイフの声は周りの声にかき消されて誰の耳に届くことはなかった。

第39話：女帝（後書き）

アーマードコア5はいつ発売されるのでしょうか？

公式サイトも一向に更新しないし……。

まあ、それは兎も角。

どうでしたか、【第39話：女帝】は？

お楽しみいただけただけでしょうか。

自分も夏休みに入りましたので、宿題の間間に小説を進めたいと思います。

しかし、これでも受験生なので多分、いつも通りの更新率になります。

それでは、誤字脱字、感想等をお待ちしております。

第40話：拷問（前書き）

食事中は読まない方が良くかもしれませんね。
というか、なんでこんな文を書いたんだろう。
少し後悔しています。

第40話：拷問

「着いたぞ、中に入れ」

暗くて湿気が多く、ジトジトしている。

恐らく、ここは地下なんだろう。

いや、正確に言えば地下牢か拷問室のどちらかだろう。

アルタイルは両足首に巻きつけた鎖をジャラジャラ引き摺り、歩いた。

「入って来い、アアア、ガガギ」

名前とは言い難かったが、それはきっとその者からすれば歴れきとした名前なのだろう。

アルルタイルは冷めた目で二人の訪問者を迎えた。

「うっ！？」

思わず胃の中のモノを床にぶちまけそうになった。

異臭、異形　　まさにその言葉は入ってきた二人に相応しい言葉だった。

隣を見ればアルタイルをここまで案内してきた騎士たちも一様に顔を歪めていた。

一組の男女。

小柄で肥満体質。

それだけならば、何も問題は無い。

そう、それだけならば。

「うげへへえ、ひへ」

「うぎゃぎゃぎゃ」

イカれている。

口から涎を垂らしながら笑っていた。

笑っていた？

「うひえええええ？」

男がアルタイルの顔を覗き込んできた。

思わず息を止めた。

卵を限界、それ以上に発酵させたような口臭。

鼻は潰れ、穴だけが豚のように正面を向いて、目は血走り苔のよう
なものが生えていた。

ハッキリ言つて醜い。

むしろ、醜いと言えない。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ！」

男はアルタイルを見て、手を叩きながら喜んだ。

女もそれに釣られてアルタイルの顔を覗き込む。

再度、息を止める。

先の男と変わらない臭い 異臭。

果たして、彼らは自分の姿を体臭をどう感じているのか。
疑問を抱いた。

「うぎゃぎゃぎゃぎゃー！」

女も頬の肉を腕の肉を揺らしながら手を叩いて喜んだ。

悦んだ。

「こいつらはな、無類の肉好きでいて男好きなんだ。特に、君のよ
うな美青年には目がないんだ」

騎士の内、一人が言った。

目の前の異形が笑い、悦ぶ意味が分かった。

騎士たちが鼻を手で押さえながらアルタイルとアイとガガギから
距離をとる。

「ぎえへへうへへ」

アルタイルも異形のモノから距離をとろうとするが鎖に足を取られ
床に倒れこむ。

異形はソレを好機と言わんばかりにアルタイルに群がる。

身体を捻り異形のモノたちの拘束から逃れようとするが、異形のモ
ノたちはアルタイルの力を上回っていた。

筋肉ではなく脂肪に包まれたブヨブヨの身体。

小柄な身体のどこにそんな力があるのだろう。

体勢的には不利だが勇者^{アサシン}としての恩恵により筋力が増加^{ブースト}されている
ハズなのにも関わらずに、だ。

ふと、頬を走る耐え難い感触に身体中の毛が逆立った。

アイの舌がアルタイルの頬を撫でていた。

「　　ッ!？」

身の毛もよだつ感覚に身体の神経が麻痺した。
気持ち悪い。

「残念だったな、暗殺者。その鎖には装備した者の筋力を半分以下にさせる呪まじないが罹かかっている」

厄介だな、と考えているほど余裕はなかった。
頬を撫でるソレは顎を伝い首筋に。

異形のモノが動きを止めた。

異形のモノは動きを止め、耳を傾ける。

リン と。

何かが音を立てる。

目の前の異形はその正体を探るかのように視線を走らせる。

しかし、騎士たちはその正体を知っているようで、鈴の音が地下に響く度たびに身を縮ちぢこませる。

「私は美しいモノであれば、例外無く愛でます」

そう言い、アルマイルと異形と騎士たちの居る牢に入ってきたのは女だった。

場違いにも程ある。

異形のモノたちが動きを止めてくれたおかげで心に余裕が出来た。

しかし、その心の余裕は警報アラームを発していた。

その顔には見覚えがあった。

女帝、メアリー・シエアリー。

今回の標的ターゲットである彼女はアルマイルの周りを取り囲む騎士と異形のものに対してこう言った。

そこの暗殺者を解放しなさい。

しかし、と言いかけた騎士を制してアルタイルの足を拘束する鎖を切るように命じる。

騎士は不満そうな顔をしながらも渋々といった様子で実行する。

「本当に良いのですか、メアリー・シエアリー様」

アルタイルの鎖を切った騎士が尋ねる。

「私は万里を見通す者。私に間違いはありません」

それだけ言うと女帝は暗殺者を連れて地下牢を後にした。

残った騎士はポカーンとした様子で去っていく二人の背中を

「うわぁっ!!」

騎士の悲鳴と一拍置いて何かの倒れる音。

「ぎゃはぎゃはははあ」

振り向いた騎士の視界に入ったのは同僚だったモノの肉だった。

「うふえうげぐえぐえっ!!」

口から赤い何かを滴らせながら咆哮する。

さながらそれは、人を忘れた獣のようだった。

悲鳴　　だろうか。

地下牢から聞こえてくるおぞましい何か。

彼女　　メアリーは一瞬、考えるように目を閉じた後、手を叩いた。

「地下牢を封鎖、誰にも近づけさせないで」

メアリーは虚空に向かって言う。

御意。

気のせいかもしれないが、そう聞こえた気がした。

「それで　　使わないの、【アサシンブレード^{それ}】？」

「え？」

呆気に取られた。

敵である自分を助けたことにも驚いたが、自分を殺す道具の催促まで？

「アサシンナイフ
暗殺は貴方の専売特許でしょう？」

メアリーは左手をアルタイルにかざして言う。

「私も得意なのよ、暗殺」

薬指の無い左腕には箆手が装備されていた。

「まさか？」

「はじめまして、後輩くん」

第40話：拷問（後書き）

.....。

気持ち悪いと思った読者の皆さん、本当にすみません。

ただ、それだけです。

いいぞ、もっとやれ、と思った読者の皆さん。

多分、これ以上続けると自分の精神が保ちません。

勘弁してください。

感想や誤字脱字の報告をお待ちしております。

第41話：エイル・P・フィール（前書き）

ご無沙汰です、皆さん。

第41話：エイル・P・フル

「後輩……？」

果たして、この世界に先輩と呼べる人が存在するのだろうか。

自分が一蓮 レン と呼ばれ、学業に励んだあの世界では確かに存在していた。

同じパルクール部の3年生 一 小此木 おこのぎ 一 一郎

いちろう 先輩。

あの一愚兄 けん が可愛がっていた現生徒会長 一 上原

かみはら 一乙女 おとめ 先輩。

そして、その他の先輩方。

「そう、後輩だ」

人生の先輩とでも言うつもりなのだろうか、と小さく呟く と、

そこで思い出した。

祖父だ。

祖父は人生の先輩を名乗り、自分の悩みをよく聞いてくれた。

色恋の沙汰から何から何まで。

自分が悩んだ時にはいつも側にいて励まして……。。

励ましてくれたか？

よく考えれば、それでも無かった気がする。

むしろ、振り回されていたような

「それで後輩クンの次の一暗殺予定者 アポ は誰かな？」

「まっ、待て!!」

男の背中に何かが当たる 壁だ。

「はなっ、話せば分かるっ！」

逃げ場が無いことを悟った男が迫りくる死に向かって言う。
いや、正確には死の形の存在するであろう空間に。

「いつ、命だけは……!!」

時間さえ稼げれば、きっと異変に気づいた騎士たちが助けに来てくれる………！

「私は何処に居る？」

虚空から響く声。

やや低めのアルト声。

「女………！？」

しかし、死は答えなかった。

死は繰り返す。

「私は何処だ！」

煌めく何か。

目に見える一死 カタナ のカタチ。

「ひいひいひいっ！？」

頭を抱え縮こまる。

耳に響くは乾いた音 男はこの音を何回も聞いている。

それは

「大丈夫ですかっ、教皇様っ！！」

鉄砲だ。

女に当たaranakattaものの、流石に鉄砲を持った騎士たちを相手に

「教皇様は逃げ

」

鉄砲の銃身がズレた。

それに続く様に騎士のカラダがズレた。

上半身を失った身体は数秒置いて崩れ落ちた。

噴水の様に吹き出した赤い液体は死のカタチの降り注いだ。

曖昧な輪郭だが、今なら見える。

「あああああああつ！！！！！！」

乾いた音、乾いた音、乾いた音、響きわたる

銃声、銃声、銃声、銃口から吐き出される銃弾

「……………」

キン、と甲高い音がした。

何回も、何回も

騎士の撃った弾は見えない壁に弾かれたかのように弾かれる。

床に、壁にその身を食い込ませて。

弾は動きを止めた。

「……………ワ、タシは…どこだ？」

歪は死が姿を見せた。

普通の人間では何かが居た。

「魔物…………？」

全身を覆う被膜状の素材の解らない服に防具らしきプロテクター。その上には袖の無い漆黒のフード付きのコートを羽織っている。それだけならば問題は無い。そう、それだけならば一風変わった武具として扱える。しかし、目の前のソレは一風どころじゃない。一常識　すべて　を逸している　。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ」

この世界からどこか浮いているような。そんな感じだった。まるで、ここは今までいた世界とは違う。そう、目の前の惨劇は訴えかけてきてるようだった。

世界が……違う？
違うも何も、ここは私のいた世界じゃない。異世界だ。
ああ、そうか目の前のソレも異世界から来た。

「お前も、勇者だったのか」
次の瞬間、世界がズレた。

いや、違う。
きっと、ズレているのは私の方なのだろう。
痛みは感じなかった。
それでも、来るべきソレは分かっている。

死、だ

。

「フッフ、ヤット見付ケタゾ、暗殺者あ」

「……………！」

汗が額から頬を伝い、流れ落ちる。

アルタイルの視界は見知らぬ天井を捉えていた。

キレイな十字架が装飾が施されている。

マリオさんの館にも似た様なのが描かれていた。

「何処だ……………ここは？」

上半身を起こし、左手の甲で額に残っている汗を拭う。
体中にびっしりとイヤな汗をかいていた。

「なんで、こんな所に」

「目が覚めたのですね」

女の声がした。
近くだ。

「こつちです」

手に桶と手拭いを持っている。

一見、剣等といった武器は所持していない。
しかし、安心は出来ない。

小型のナイフであれば手拭いに包めば隠せるし、桶の中に包丁ぐらいは入る。

「そんなに警戒なさらずとも、私は貴方に危害を加える気は有りません」

案の定、桶の中には水しか入ってなかったし、手拭いは何も包んでなかった。

「自己紹介が遅れました、エイル・P・フルです」

「エイル・P・フル？」

その名前には聞き覚えがあった。
確か

「エイフ・P・フルは私の娘です」

アルタイルの疑問を感じ取ったのか、手拭いを絞りながらそう答えた。

エイフの母を名乗るこの女性はその生涯の伴侶を

「知っています、全て」

アルタイルは一息ついて、頭を床に着ける。

窓からは青い空が覗いていた。

「そうか」

「娘から聞きました、夫の最後と貴方のこと」

『どうか、どうか娘だけはっ！』

今でも、あの声だけは覚えている。

顔は見えないが、彼なりに必死だったのだろう。

しかし、なぜ、二人は別居をしているのだろう。

「夫はアルタイル信者なのです」

「アルタイル信者……？」

アルタイル信者と言う聞き慣れない単語に戸惑う。

「はい、アルタイルの残した武具を再現したい人や純粹に彼に借りがあったりと様々ですが。夫はそうした人たちの一人なのです」

「夫は一彼 アルタイル の武具を再現したい言って、出て行きま
した」

その後、一娘 エイフ は夫を追って何も持たずに出て行ったんです、とエイルは付け加えた。

「昔から自己表現は苦手で他の人の後ろをついて行ってばかりのダメな夫でしたが……失ってからではもう、手遅れですね」

「それで、エイフは……？」

エイルはフフフと小さく笑って、一階にいます、と言った。

「貴方を見つけてここまで運んでくれたのはエイフなんです」

「エイフが……？」

偶々、通りすぎただけのような俺になんでここまでしてくれるのか。

正直、疑問に思っていた。

いい機会だ、礼のついでに聞いておくか、と心の中で呟く。

「着替えは此处に置いておきますね」

ふと、頭上に手が行く。

フードは無い。

身体に掛けられている、布団を捲る。

……………！

「うっ、うっ、うわあああああうっ!?!?」

アルタイルが見たのは、自分の生まれたままの姿。
通称 全裸。

第41話：エイル・P・フル（後書き）

大半、暑いこの時期。

私、猫目はトランクス一丁で寝ます。

蚊に刺されます。

それが、かなり際どい所を刺されたりして戸惑います。

掻きたいけれど、掻けません。

とても辛いです。

以上、14箇所刺されている、猫目でした。

8月3日：脱字修正、内容追加。

第42話：猫と私と彼（前書き）

猫にたかられた作者の猫目です。

友人宅にお邪魔したところ、5匹の猫にたかられましてね。エサやマタタビを持ってなかったのにも関わらずにです。それですね、その猫たちみんなメスなんですよ。

ハーレムです、ハーレム。

男の夢の集大成。

8月11日：内容追加

動物を人間に変身させる薬が欲しいです……。

第42話：猫と私と彼

SIDE：エイフ

アルタイルの身体を縦横無尽に走る傷は深くは無かった。

が、安心は出来ない。

死刑しかないこの国が、何故、彼を生かしたのか。

なにが理由であつても、どんな罪でも。

みんな、この国では平等だ。

一女帝 カミ の名の下に、皆、等しく死刑を宣告する。

「では、何故？」

咳く。

しかし、開いた窓からは冷たい風が入ってくるだけだ。

答えなど返って来ない。

机に腕を組んで伏せた。

疲れた。

本当は水を浴びたい気分だったが、疲弊した身体は言う事を聞かない。

机と身体が離れたくないと言わんばかりの様に身体が重たい。

上瞼と下瞼をくっつける。

離れない 真っ暗。

今日の事を振り返ろう。

思考する 再生される映像。

夢と映像が混ざるのに時間は掛からなかった。

「アルタイル!!」

何も出来なかった。

騎士の人たちに連連行されている一彼 アルタイル を見て、胸が疼くかのような痛み。

さっきのそれと違う痛みがエイフの胸に鎮座していた。

かつて自分を自分を抱きしめてくれた、あの暖かさ。

所詮、自分はただの武器商人の娘。

相手は暗殺者。

いくら手を伸ばしても届かない。

どれだけ、町の住民に彼の事を聞いたか。

どれだけ、彼の事を追いかけたか。

どれだけ

どれだけ、私が彼の事を想っただろう。

気が付けば、町の広場に来ていた。
広場の中央には噴水があり、沈みかけた夕日の光が噴水の水に反射し輝いていた。

『ほら、キレイだろ？』

脳裏に蘇る父の声。
遠い昔の映像。

あの時もこんな風にキレイな夕暮れを父と一緒に広場で眺めたものだ。

『ねえ、パパっ！見て見て』

幼い私はガラス玉をどうだ、と言わんばかりに父に見せつける。

ビー玉だ。

『おや、キレイなビー玉だね。どこで拾ったの？』

幼い私は父の手を引き、広場の中央まで走る。

すぐに息が上がったけれど、足だけは動かすのを止めなかった。

噴水の側まで行くと、私は噴水を指さして、こう言った。

」

」

「 あれ？」

あの時、私は父になんて言ったのだろう。
そして、父はなんて答えたのか。

頬を伝い落ちた雫が夕日の光を浴びて輝く。

ポチャ、小さく音と波紋を広げ、私の涙は噴水の一部となった。
涙？

「私、泣いているの……？」

頬に手をやる。
拭う。

手の甲に感じる冷たさ。

「もう、我慢しなくていいよね……？」

日が沈み、一人気 ひとけ が少なくなってきた。

私は人知れず泣いた。

私は知っていた。

この国には死刑しか無いことを。

「……………はっ!」

気が付けば夜になっていた。

しまった、と勝手に口が呟くが呟いたところで状況は何も変わらない。
い。

何も変わらないのだ。

ママには悪いけれど今日は一人になりたかった。

今の私の顔を見たら、ママは心配するだろう。

家に帰らないことで、ママに迷惑をかける事も重々承知だ。

それでも、一人になりたいのだ、今日は。

私はおぼつかない足取りでもう一つの家に向かった。

にゃー、にゃー。

「あの子たち……！」

猫の鳴き声がした。

また、近所の子供にいじめられたのか、疑問に思ったがさっき聞こえた猫の声はそんな悲痛な声ではなかった。

どちらかと言うと

何かを見つけて、騒ぎ立ててる様子だ。

何かに一集 たか る様に一集 つど う猫たちに駆け寄ると私は息を飲んだ。

「アル…タイ、ル………！？」

アルマイルと言ったつもりだが、他人にどう聞こえていたかは分らない。

私は急いで一ダンボール箱 もう一つの家 に向かい救急セットと取り出す。

出血の酷い胸と左腕に包帯を巻く。

自分でも分かってる。
雑だ。

「っ！」

アルタイルが呻き声を漏らす。
痛いのだろう、苦しいのだろう。
私は唇を噛んだ。
涙が出てきた。

にゃー、にゃー。

にゃー、にゃー。

黒猫が傷付き、血を流す彼を心配するかのように近寄ってきた。
それに釣られて、白、三毛、シヤムなど他の猫たちも近寄ってきた。

「ありがとう、あなたたちも心配してくれているのね」
左手で黒猫の頭を軽く撫でる。

家に帰って、ママに手当てをしてもらった方がいい。
ここでは消毒も出来ないし……。

にゃー、にゃー。

猫たちの声援を受けながら、アルタイルを背負う。

「おも、い……！？」

もうダメ、潰れちゃいそう。

しかし、ここで諦めれば絶対後悔する。

私はそう、確信していた。

にゃー、にゃー。

私は背中に背負った彼の足を引きずりながら、ひどくじれったいスピードで家を目指して歩いた。

「今度は私が助ける番です……！」

「うっ、うわあああああっ!?!」

「えっ!?!なに?!?!」

何か悲鳴に近い声を聞き、目が覚める。
男の声だった。

男？

父が家を出て行ってからは此処は女家族だ。
他に男が居るはずが無い。
あるとすれば、客人とか

「アルタイル！！」

今度こそ完璧に目が覚めた。

そうだ、彼だ。

私は口元のよだれを手の甲で拭い、立ち上がる。

二階へ通じる唯一の階段。
駆け上がる。

通路を右に曲がる。

突き当たりのドアを開ける。

「　　ッ！？」

目と目が合った。

激しく波打つ心臓。

騒がしい鼓動。

ぜ、ぜぜぜぜ全裸！？

彼の腹から下には毛布が掛けられており見る事は出来ないが、恐ら
く　　！！

顔が焼けるように熱い。
熱い熱い熱い。

「あえあ、そう、うう〜」

右

左下、天井。

視線をずらす。

『全裸』

ダメ、あの光景が離れない。
目を閉じる。

暗闇 再生される映像。

「し、失礼しましたっ！！」

私は赤くなった顔を隠すようにしてその場を立ち去った。

第42話：猫と私と彼（後書き）

「これで良かったのですか……？」

目の前の男に話しかける。

男は少女と少女に引きずられる青年を見ながら苦笑した。

男は私の質問に答えず、こう切り返した。

「教皇が殺されたそうだね」

「はい」

男はこちらを振り返った。

「勇者……か」

「そうですね、今はその可能性が高いですね」

異世界から来たものは無条件で勇者となる。

誰が何の目的で来るのか、分らない。

私がこの世界へ来るのも唐突だったように目の前の男も急だったのだらう。

「まあ、これで君の役目も終わりだ」

パン、と乾いた音が響いた。

お腹の中で何かが暴れている。

その何かは腸を掻き出し、背中から飛び出す。

「おやすみ、メアリー」

純白のドレスに広がる染み。

赤ワインをこぼしてしまったかのように、赤く紅い。

男は赤が広がる様を数秒見つめた後、虚空を切り裂く様に出た穴へと身を投じた。

第43話：果実の行方（前書き）

友人からメールが来ました。

お前がエイフが好きなのはよくわかったが、話が急すぎじゃね？

だがな、アーマードコアに出てくるミサイル娘は俺の嫁だ。

お前はオペ娘で我慢しとけww

と言われましてね。

オペ娘の声は好きですけど、歳の事を考えるとどうしてもね……。

でも、確かに、前回は話が急すぎでしたね。

修正します。

第43話：果実の行方

「し、失礼しましたっ！！」

そう言い彼女 エイフはリンゴの様に赤くなつた顔を隠すようにして部屋から飛び出して行った。

まあ、此の世界のリンゴは自分の知っているような赤い果実ではなく、白黒の球体なのだ。

「ふふふ、若いっていいわね？」

そうエイルが問うてきたが、それほど生きている訳では無い。

まだまだ、若い方だと自分は思っている。

此の世界の平均寿命が幾つであれ、俺は100歳まで生きるつもりだ。

「では、私が何時までも此処に居たら着替えにくいでしょうから先に一一階 した に行つてますね」

服のサイズが合わなかったら言つて下さい、と言ひ残しエイルは部屋から出て行った。

着替え中……………。

サイズが合わないのか、少しキツかったが我慢できない程のもではなかった。
許容範囲内だ。

この国の服はイタリアを連想させる服が多い事に気付く。
そして同時に服に開いた穴に気づいた。

「所々に虫食いの後があるな……………」

服を貸してもらって文句を言えない立場に居る事を思い出し口を閉じた。

まずは、一階に行ったであろうエイフに礼を言うか。

白い長袖の上に革を巻く。

それをベルトでしっかりと固定させる。

そして、その上に籠手に手を通し、再度ベルトと紐で固定する。

右腕も同じ様に革を巻き、籠手に手を通す。

右手と左手を反らす。

カシヤツ、という金属音と共に鞘から飛び出す小刀。

【一暗殺者の隠し刀 アサシンプレード】と名付けられたそれは、
今までに何十、何百人の命を断った。

それでも、平和は訪れない。

後、何人の命を奪えば平和が訪れるのだろうか。
自問。

答えは、分らない。

アルタイルは深く息を吸い、吐いた。
アルタイルは再度両手を反らし、【アサシンブレード】を鞘に納めるとドアノブに手を掛けた。

没貴族。

「母さんは昔、貴族だったんですよ？」

エイフがアルタイルの顔を覗き込みながら言った。

「昔、ということとは没貴族…」

なのか、と聞こうとして口を閉じる。

没貴族とはあまり聞こえのいい言葉じゃない。

「良いんですよ、おかげで父さんと母さんが結婚して私が産まれた

んですから」

身分が違つと結婚出来ないんですよ、とエイフは付け足した。

「……いつもフード被ってますよね、何故ですか？」

エイフが遠慮がちに聞いてきた。

しかし、一暗殺者 アサシン だから顔を見られない様にするため、とは言えず。

結局、日光が苦手と言う事にした。

「ええー？綺麗ですよ、夕焼け」

現在、エイフの母親 エイルに頼まれて夕食の買い出しに市場まで行く途中なのだが。

「特に、広場の噴水から眺める夕焼けはそのフードを取って見て下さいっ！！」

よほどこの娘は夕焼けが好きなようだ、何か特別な思い出でもあるのだろうか、とエイフの話をBGMに思考する。

「 で、それで 、だから、あの角度から やっぱり夕焼けは 」

エイフの話はまだ続くようだった。

「はい、毎度ありー」

八百屋のおじさんに200f　フイリア　を渡し、一タマネギ
20f　3つつと一サンマ　70f　二匹を受け取り、店を後に
する。

「後は、ダイコンですね」

「さっきの八百屋には売ってなかったのか？」

「はい、売り切れだそうです」

一度だけだが、この世界のダイコンとやらをエルサレムで見たこと
がある。

形こそ自分の知っているあの大根の形だったのだが、色が黒より濃
い、漆黒色だったのだ。

此の世界の住民はそれをすりおろして食べるそうだ。

「早く買って、帰ろうか」

「あ、ちょっと寄りたい所があるんですけど、いいですか？」

アルタイルは少し位ならいいだろうと判断しエイフの後に続いた。

「はい、240fね」

此の世界のダイコンは異様に高い。

1本120fだと？

ふざけるな、ぼったくり価格じゃないか。

財布の残金を確認する。

ため息。

肩を落とす。

「どうしましたか？」

「いや、なんでもない」

そう言い、深くため息を付く。

「ため息ばかりしていると幸せが逃げていきますよ？」

それならば、一体どれだけの幸せが逃げていったのだろう。

本が100として、それ以上ため息を付いた場合どうなるのだろう。

「どうやら不幸の神様に好かれているようだ……」

再度、ため息を付く。

これで3回目。

「これで、3回目ですよ？」

ミラ。

お前は鏡の神でもなんでもない。

お前はただの不幸を呼ぶ疫病神だ。

どこかに居るだろう神に向かって心の中で言う。

エルフが夕日をバツクに顔を伏せがちに言う。
その顔は心なしに赤く見える。

「アルタイルに、この綺麗な夕日を見てもらいたかったんです」

上目遣い。

一瞬だが、心臓が跳ねた。

飛び上がる心拍数。

「えへへ、私が見たかったってのもありますけどね」

エルフがごそごとポケットを探る。

そして、一つの球体状の物を取り出す。

夕日の光を反射させるガラス。

「ビー玉か」

「はい、ビー玉です」

エルフはそれを掲げる。

キラキラと輝き、夕暮れの時を映し出す。

「まだ、父さんと母さんがこの国に居た頃、貰ったんです」

「父さんに？」

彼女は頭を横に振り、続けた。

「分らないんです、誰に貰ったのか……」

そう言って、夕日にかざす。

まるでその姿は

アルタイルは、はっとして身体に手をやる。

無い。

無い、無い、無い。

「しまった、エデンの果実が

！」

アルタイルはエイフをその場に置いて駆け出した。

ヤバイ、アレが誰かの手に渡るようなことがあれば

！

「あら、おかえりなさい」

人、人、人、人、人。

しかし、そのどれもが恍惚とも無表情ともとれぬ顔をしている。

「エイルさん、貴女の持っているソレは大変危ないモノです。今す

ぐ、返して下さい」

エイルはフフフと小さく笑ってそんなモノは知らないと言う。

「お願いします、早くしないと取り返しのつかないッ！」

腕をつかまれた。

無表情。

殴り飛ばす。

人の波を掻き分ける。

「フフフ、元気ねえ。男の子はそうでなくちゃ」

エイフが掲げた様に。

ソレを掲げる。

光。

「でも、これは私のモノよ」

「クソッ、遅かったか」

近くに居た男の胸元を掴む。

投げる。

人の波が裂けた。

人の道を踏みしめ、一気に駆け抜ける。

自分を捕らえようとする腕を一潜くぐり、あるいは横に避けて進む。

膝を曲げ、一気に解放させる。
バネが如く、宙を駆ける。
アルタイルの下を通過していく人の波。

「それは返して貰うぞッ!!」

手を伸ばす。

後少し

!

しかし、アルタイルの伸ばした手は目的のソレに触れることが出来なかった。
まるで見え無い壁に行く手を阻まれたかの様に。

「さつき知らないお兄さんが来てこれをくれたんですよ」

十字架を模倣した杖の中央にはぽっかりと丸い穴が開いていた。
エイルはその穴にエデンの果実を嵌める。

一層増す光にアルタイルは腕で眼前をシャットアウトする。

「まさに、手も足も出ないな……」

武力行使も止む無しか、と左手を反らす。

エイフの母とは言え、元は他人なのだ。

そう、他人なのだ。

割り切れ、他人だと割り切るんだ。
暗示を掛ける。

一歩踏み出す。

「何ですか、貴方たちは!？」

アルタイルの後方からエイフの声がした。

「来るな、エイフ!！」

人の波を掻き分けこちらに来ようとするエイフを声で制する。

「アルタイル!！」

「下がれ、エイフ。ここは危険だ!！」

尚、こちらに来ようとするエイフ。

エイフの前で人を殺せない自分が居た。

暗示は消え、アサシンブレードもいつの間にか鞘にその身を潜めていた。

「また会いましょう、私の可愛い娘」

エイルが杖を横に薙ぎ払う。

見えない何かがアルタイルの身体を吹き飛ばす。

受け身も取れぬまま背中から壁に激突し、口から空気の塊を吐き出す。

空気の塊に混じって、血が吐き出された。

「カハツ……………!！」

アルタイル!！」

自分を呼ぶ声を最後にアルタイルは瞳を閉じた。

第43after話：果実のもたらすモノ（前書き）

前の話から時間がかなり経ってます。

そして

！

第43after話：果実のもたらすモノ

1437年

「ねえ、仲直りしましょ？」

エイフと共に家を離れ、貧困区の住人に紛れ住んでいた俺達に届いた一通の文書。

その紙にはエイフだけが招待されていた。

「行かないのか、エイフ？」

「今の母はいつもの優しい母じゃ無い気がするんです。だから……」

そう言い淀む。

エイフは顔を伏せた。

しかし、俺ももっと早く気付くべきだったかもしれない。
リンゴの紛失にもっと早く気付いていればこんな事にはならなかったかもしれない。

後悔ばかりがわき出してはアルタイルの胸を締め付けた。

文書はそれから毎日届いた。

その手紙が1000を越えようかという時、エイフがこう切り出した。

「母に、直接会ってみようと思います」

もちろん反対だった。

最近のエイルは欲望のままに侵略と略奪を繰り返しているそうだ。その被害は同盟国にまで及んでいる。

この国は他国と比べて兵器開発が発達している分、他国も容易には手が出せないようだった。

「ほんとに一人でいいのか？」

何回、この台詞を言っただろう。

「大丈夫です、アルタイル。相手は曲りなりとも母ですから」

いや、曲げるなよ、とツツコミたかったが空気を読んで黙っていた。

外には使者が待機していた。

アルタイルは裏口から出ると家の屋根に登った。

エイフは使者に囲まれてゆっくりと移動している。

使者は皆、死んだような魚の目をしていた。

実際は生きているのだろうが、無表情とも恍惚とも取れない――表情

かお だった。

まるで、命令に遵守する人形のように。

屋根から屋根へ。

影から影へと、その身を素早く移動させる。

エイフは使者に囲まれたまま城の門をくぐり城内へと入っていった。

門の守りは固いので、上から侵入したが。

エルフを見失ってしまった。

長い廊下を人の気配に注意しながら歩いていると悲鳴が聞こえた。

「エルフ！」

腰から剣を抜き手短な所をうろついている男の首をはねる。

周りの人間は近くで人が死んだと言うのに、未だその顔は無表情だった。

胸に走る痛みにより歩みを止める。

手で左胸を抑える。

恍惚とも無表情ともとれぬその顔を刻み、道を開け。

鈍足な足の腱を断ち。

肉と死臭の獣道を駆ける。

心臓が万力に握られているかのようにイタイ。

今度は歩みを止めずドアを蹴破る。

「エルフ！」

「ア、ルタッ！」

紅い池　　？

エルフが嗚咽を漏らし、涙と鼻水でその顔をクシャクシャに歪めて

いた。

その手に　　を持って。

「なん、で。なんで来たの　　？」

その手から　　が滑り落ち、音を立てる。

「見られたく、無かったのに……こんな、こんな……!!」

紅い池に沈む紅い果実。

それは、自分のよく知るリンゴの様に赤かった。

「よりによって、貴方に……!!」

エルフが手から滑り落ちた　　を拾い、自分の喉に突き付ける。

彼女は泣いて泣いて、このまま死を選ぶだろう。

失いたくない　　そう思った。

同時に失う事が怖くなった。

無意識に一步踏み出す。

「それ以上、近づかないでっ!!」

頭を振り、喉に突き付けアルタイルを拒絶した。

「俺は……!!」

一步踏み出す。

「近づかないでっ!!」

少女が叫ぶ。

広い部屋に響く。

彼女と俺とエイル。

しかし、エイルはもう

。

アルタイルは歩を止めて言った。

「死ぬな」

アルタイルは一拍置いて、言葉を続けた。

「生きて生きて、生きる。死んだ父や母の分まで」

「なんで、そんな事を言うの……!!?」

ぼろぼろとエイフの目からは大粒の涙がこぼれ落ちる。

エイフの目は充血して真っ赤になっている。

アルタイルは腕を掲げた。

二度とこんな事にならないよう、願って。

こんな事は起こさせないよう、堅く誓った。

「俺は、エルフには生きていて欲しい。こんな所で死んで欲しくない」

エイルの血で赤く染まったりリングゴが命令されるがままに光を放つ。

死ぬな、と。

生きろ、と。

エルフの瞳、心に光は侵入し犯す。

命ずるがままに。

を保持した右腕から弾かれた様に

が床に突き刺

さる。

一拍置いて彼女も倒れた。

彼女の身体を抱きとめようとするが身体を駆けめぐる痛みには膝を着く。

膝を着き咳き込む。

血。

口の中の鉄の味のするものを唾と一緒に吐き出す。

リングゴから開放された国民が見たのは母親の死体とその娘。
そして、傍らに立つ、白いフードの男。
暗殺者の姿だった。

第43after話：果実のもたらすモノ（後書き）

「あ、この人知ってる！悪い人だよね？」

男の子は指名手配書を指さしながら母に尋ねる。

「そうよ、このお兄さんは悪いひとなのよ」

「僕、大きくなったらこの悪い人やほかの悪い人をやっつける騎士になるんだ！！」

自分の息子の夢にそうね、と笑い頭をなでる。

『お尋ね者：アルタイル』

この顔に見覚えがありましたら近くの騎士へ一言お願いします」

第44話：耐久度と銃（前書き）

ご無沙汰です。

夏休みの宿題とエースコンバットX2をしております。

この小説の続きを楽しみにしていた読者の皆さん、本当にすみませんでした。

第44話：耐久度と銃

1439年

「アナトリア帝国……か。懐かしいな」

お尋ね者になってから2年が過ぎた。

それでも、国は俺 アルタイルを追っているようで、指名
手配書に身に覚えの無い罪が上書き追加されていく一度 たび に
笑った。

どうしても騎士団の連中は俺を消したいらしい。

しかし、ここで死ぬわけには行かない。

左手に力を入れる と、言うより無意識の内に力が入る。
柔らかで細い、エイフの手。

ガラスの様に繊細なエイフの手を逃がさない様に握りしめた。

エウサレムに帰る前に、一此処 アナトリア に寄ったのには理由がある。

アルタイルは音を立てぬよう、慎重にドアノブに手を掛け、引いた。エ이프の手を引き、素早く中に入り戸を閉める。

中には机に伏せている細身の男性が居た　　恐らく寝ているのだろう。

「後ろから脅かしてみよう　　と、思ったんだがなあ」

仕方がない、と呟く　　残念だ。

アルタイルは机に伏せて寝ている細身の男性　　レボナルド・
ラ・ウインチの肩に手を掛け、揺する。

レボナルドは何事かと言わんばかりに飛び起きた。
そして、その瞳がアルタイルを捉える。

「アルタイル、良かった!!」

そう言い腕を広げる。

アルタイルもそれに応じて腕を広げ、レボナルドの細い体を抱く。
というか、コイツはちゃんと飯を食っているのだろうか。

「聞きましたよ、色々。今ではすっかり、国中の人気者ですね」

体を離す。

どうやら滅多に工房から出ないレボナルドの耳にも入っていたよう
だ。

「どうやら、一騎士団　やつらは俺を一人気者　スター　にした
らしいな」

どんな芸人であろうと星だろうとやがて、表舞台から消える
そういうことだ。

「おや、その子は？」

どこから攫ってきたのですか、とアルタイルの背後に居るエイフを
指し尋ねる。

「エイフだ。サーダナの被害者で番兵から逃げている時に一匿か
くま ってくれた」

あえて、攫ってきたと言うのは無視した。

「それはそれは！ご紹介が遅れて申し訳ございません、私はレボナ
ルド・ラ・ウインチと申す者で御座います。以後お見知りおきを」

レボナルドが手を差し出す。

エイフは 答えない。

行き場を失ったレボナルドは、気まずそうに手を引っ込めた。

交差するアルタイルとレボナルドの視線 言いたい事は分か
っている。

「そつだ、土産があるんだ」

この2年間、何もせず隠れていただけではない。
一応、写本の断片の搜索もしていた。

「これは写本ですね！！」

レボナルドが目を輝かせて叫ぶ
解読を始める。

と同時に、写本を机に広げ

まあ、端から見れば独り言を言ってる様にしか見えないが、本人には黙っておこう。

「手首に付ける新しい武器のようですが、剣では有りません」

レボナルドがこちらを振り返って言う。

「どうやら、火薬を使うようですね……………」

視線を写本に戻しながら言う。

火薬　となると、一銃　ピストル　か。

「作れるか？」

アルマイルが問う。

「やってみますよ」

レボナルドは嬉しそうに答えた。

「一応、形には出来ました」

「一応？」

「はい、火薬の爆発に何回耐えられるか……」

耐久度の問題か。

まあ、そう連射する物じゃないから今は良いだろう。

レボナルドから金属筒を受け取り、左手の内側に固定する。

「数発分の一弾 ブレット と一火薬 パウダー です」

「ありがとう、レボナルド」

「今日は一祭り カーニバル ですから、誰も一銃 ピストルの音に気付きませんよ」

一的 ターゲット は裏庭に準備しておきました、と言いかげに伏せる。

すぐに寝息が聞こえ始める。

「どうせ寝るならベッドにしるよ……」

レボナルドの肩に毛布を掛ける。

ふと、視線を感じる

エイフだ。

エイフがソファーに座って、ただこちらを見ている。

「裏庭に居るからな」

返事は

無かった。

一的 ターゲット は三体

弾は三発。

「自分の腕が試されるな」

弾を籠める

一発目。

息を吐く

吸う。

まずは一番近似的に左手を向ける。

左手を反らす
撃ちたくない。

自分の手の平ごと撃つ訳にはいかないし、

息を止める

身体の中の酸素が無くなる前に引き金を弾く。

一銃身 バレル の後端から伸びた細いパイプの先端にパークッシ
ョンキャップと呼ばれる一雷汞 らいこう を詰めた金属管をはめ
込まれており、そこにハンマーが落ちてキャップを叩き、雷汞が発
火して発射薬に着火する 乾いた音が一帯を震わせる。

反動で腕が九の字に曲がる。

火薬の燃焼ガスに押し出された弾が一直線に的に飛来する
直撃。

再度、弾を籠める 二発目。

再度、繰り返す動作を、この感覚を忘れないように頭の中で繰り返す。

一次なる的 ネクスターゲット は二番目に近似的に掌を翳す。

再度弾く引き金 違和感。
弾が逸れる 的を一掠める グレイズ。

再再度、弾を籠める 三発目。

今度は慎重に動作を繰り返す 的はさっきと同じ二番目に
近似的。

「今度は外さない」

引き金に指を掛け 引く。

火薬が燃焼され、発生したガスが弾を押し出す が、軌道
が逸れた。

案の定、弾は完璧に逸れていて的に掠りもしなかった。

「ハハ、曲がってやがる……」

もし暴発していたら、と思うと
汗が流れた。

アルタイルの背筋を冷たい

まあ、ともあれ左腕が無くさずに済んだのだ。
運が良かったな、俺。

「銃身の部分をより強固な金属に変えました。これである程度の連射にも耐えられるでしょう」

レボナルドは一小銃 ピストル を受け取り、腕に巻き付けようと
するアルタイルを手で制し、言葉を続けた。

「しかし、油断は禁物です。いつ、暴発するか分かりませんからね」

つまりは、こまめな一調整 メンテナンス が必要ってことか。
気づいたら左腕が無くなっていましたー、だなんて冗談じゃない。
ましてや、任務中であれば尚更だ。

「
分かった」

第44話：耐久度と銃（後書き）

無理矢理ですが、銃を投入しました。

指名手配の事ですが、一応ゲームの総督殺しの所のつもりです。死因も状況も立場も全く違いますけどね。

久々の更新ですが、どうでしたか？

楽しんで貰えたでしょうか？

一応、自分も受験生なので更新も遅くなるかもしれませんが、今後とも鏡の境界線をよろしくお願いします。

第45話：教団

「これである程度の衝撃に耐えられるでしょう……」

目の下に暗く深い隈を作ったレボナルドが眠たそうに　　いや、
実際に眠たいのだろう。

アルタイルはレボナルドから一仕込み銃　ピストル　を受け取り、
左腕に巻き、固定する。

「そういえば、アルタイル」

レボナルドがアルタイルを呼び止めた。

首だけで振り向こうとして、止める。

フードが邪魔だ　　体ごと振り返る。

「貴方も大変でしたね」

「何のことだ？」

レボナルドの急な話題に思わず聞き返す。

大変だった、と言われても、それに該当する出来事に覚えが無い。

「何が……って、アサシン教団エウサレム支部襲撃の件ですよ」

「何？」

「最近の事ですよ、知りませんでしたか？」

最近　　？

「ウィンディや他のメンバーはどうなったんだ？」

「それは……分かりません」

「何処に居るんだ!!」

レボナルドに詰め寄る。

無意識の内に声も荒くなる。

「し、知りませんよ!!」

気が付いたら、レボナルドの胸ぐらを誰かの手が掴んでいた。

誰だ？

レボナルドの顔が青くなっている事が見てとれた。

そんな状況下であるのにも関わらず、思考は一鮮明　クリア　に澄み渡っている。

レボナルドの胸ぐらを掴み上げている、その手を見る　右手

を覆う鉄のセスタスと左腕の籠手が特徴的だ。

アルタイルにはこの腕は見覚えがある。

それも、かなり繁栄に見て使ってきた。

「……!!」

手を放す。

レボナルドは咳込み、その場に崩れる。

「…すまない」

無駄な事だとは思う。

しかし、その行動を律する事が出来なかった。

「少し 出来かけてくる」

返事は待たなかった。

「くそっ……！」

アルタイルの一拳 セスタスが石造りの壁を削る。

そんなアルタイルを通行人たちは物珍し気に数秒見た後、再度、歩を進める。

2013年

「彼が鷲の血を継ぐ者か？」

モニターに映し出された白いフードの男を見ながら、男は尋ねた。

「詳細は分かりませんが、聖母が反応を示しました」

聖母　マリア、と呼ばれるそれは俗に言う人工知能　A I　だ。

「ほう、あの一聖母　マリア　が？」

男は信じられないといった様子で聞き返した。

【YOU・BEソフト】と言う、ゲーム会社がある。

ゲーム会社と言うのは、表の顔。

この会社はゲーム会社と言う顔が有る一方、闇の顔もあった。
名を【教団】と言う。

その筋の人間なら一度は耳にしたことがあるだろう。
いや、その存在を眉唾を含めて一実　まこと　しやかに囁かれていますだけだ。

都市伝説とでも言った方が良いか。

まあ良い。

その【教団】は目的は一つの伝説を蘇らせる事。そう、【伝説的アサシン】である彼を。そのためには、一情報 データ が必要だった。彼の子孫の血だ。

【教団】は血眼になって子孫を探した。しかし、それには仮面が必要だった。それがゲーム会社と言う仮面。

ゲーム会社と言う仮面を手に入れた【教団】はあるものを開発した。

【EXBOX360】だ。ゴーグル状の一情報端末 アムニス を顔に装着し、間近で立体映像を映し出す。

それはグラフィックの良さと相まって、好を評した。

【教団】はそのアムニスに網膜認証機能を着けていた。しかし、そのことを知っているのは【教団】のメンバーのみで、他は知る余地も無かった。

ある血族は一目見るだけで、自分に向けられている殺気を見る事が出来る。

【一鷹の目 イーグルアイ】

【教団】はその血族の可能性の人間に寝ている間、夢として血に眠る祖先の記憶を催促させる電波をながした。

最初こそ、ソフトが売れず低迷していたものの口コミにより徐々にその売り上げを伸ばしていった。

ソフトの売り上げが良くなるほど、彼の血縁者の可能性の者の反応が増えた。

同時に適性のある者にもその反応は見られた。

そして、組織はその電波を利用した場所を選ばない一暗殺者 アサシン 養成所を手に入れた。

それは【教団】の勢力拡大を意味する。

「ん！」

「任！」

「主任！！！」

男は慌てて声のする方を見る 物思いに耽ってしまったようだ。そこには頬をほんのりと紅潮させた女性がいた。

「済まない、少し物思いに耽っていたようだ」

女性は何かを言おうと口を開いたが、その唇から言葉が紡がれる事は無かった。

女性は諦めたようなため息を一つ吐くと、自分の一持ち場 シゴトに戻った。

彼女は何を言いたかったのだろうか？

男はしばらく彼女の背中を見つめた後、彼女と同じ様に自分の持ち場に帰り、受話器を手に取る。

数回のコールの後、相手が出る。

「私だ。聖母が反応を示した。今からそちらにデータを送る」

聖母はただの適合者では、あの様な過激な反応をしない。恐らく、直系の者だろう。

「奴らハウンドを数人くらい向かわせてくれ」

第45話：教団（後書き）

読者の皆さん、ご無沙汰です。

それと、明けましておめでとつございます。

前回の更新からもうもう少しで4ヶ月ですね。

4ヶ月待たせておいて、この文の短さ。

ホントすみません。

完結を取り消しました。

第1話・日常の続き（前書き）

第2章の開幕です。

第1話：日常の続き

「さい、ん！」

誰かが呼んでいる。

一朦朧 もろろろ とした意識の中で、そう思った。

「きなさい、ん！」

身体を揺すられる。

覚醒しかかった意識の中で考える。

何を焦っているのだろうか、と。

「起きなさい、一蓮 レン ！！！」

はっと、瞼を上げる。

覚醒した意識は自分の視界から真っ白な天井を認識していた。それが自分の部屋の天井だと気が付くのに数秒掛かった。

「さあ、行くわよ」

横を見る 亜麻色の髪を肩まで伸ばした女性。一母 アケミだ。

枕元の時計に目をやる しかし、時計に表示された時刻を読み取る前にベッドから引きずり出される。

「なんだよ、母さん？」

普段と変わった印象を受け、尋ねる。

「説明は後ですから、今は言う事を聞いて！」

短く告げ、自分の手を引く。

分らない。母が何を考え、自分の手を引くのか。

自分の足が鉛でも付いたか、それとも床と一体化したか。
足が言う事を聞かない。
母の手を振り払う。

「蓮………？」

一明海 アケミ はその場から動こうとしない、一息子 レン
に向き合う。

分かってる。

この子が何を求めているのか。

しかし、今はそれに付き合ってる余裕も時間も無い。

「説明は後でしっかりしてあげるから、今は黙って車に乗ってちよ
うだい」

息子はまだ理解、いや納得してない。

ごめんね。

そう心の中で呟いて、息子の手を引き廊下に出る。

右を見る、左を見る。

現在地は二階。ここから階段を降りて、玄関を出て、裏の車庫ま

で行かなくては行けない。

腰に手を伸ばす。

指先に触れる、金属特有の冷たさ

一 拳銃 グロツク1

9。

9mm弾を一15発(+1発)のグロツク社が開発した一自動式拳銃 コイツ。

ソレのややひんやりとした、プラスチックの感触にどこか安堵している自分が居た。

が、複雑な気分でそんな自分の心境と状況を思い返す。

まずは、車庫に行かなければ。

ギシギシと軋む音がする。

普段では気にも止めない音がこの静寂の中では五月蠅く感じられる。

焦りか。

嫌な汗が額から頬を伝い、落ちた。

一階に降りる。たったそれだけなのに、酷く疲れた。

息子の手を引き、一気に廊下を駆け抜ける。

自分と息子の足音がはっきり聞こえる 構わない。

自分は靴を履いているが息子は履いていない。

しかし、靴を履く時間さえ惜しい。奴らはすぐそこまで来ているのだ。

玄関のドアを開け外に飛び出す。

「ちよつ、靴！」

背後でドアの叩きつけられる衝撃音が息子の声を呑み込んだ。

「キッチンで食糧でも漁っていたかしら……？」

予想以上の動的動きの速さに舌を巻きつつ、振り返り様にグロツクを抜いた。

蓮の思考が黒光りする一ソレ・・・を認識する。

顔を驚愕の一色に染める息子を尻目に自宅のドアを蹴破った白ずくめの男に一銃口 マズル を向ける。

数は2 いける。

二人の右手には拳銃 形状的に一ベレッタ M9 だろう。
しかし今は銃の考察より、今はこの場から逃げる事を最優先。

立て続けにトリガーを引いた 撃発音。

血飛沫を上げ、崩れ落ちる二人。
息子がソレを認識する前に手を引いた。

本当にごめんね、蓮。

耳元を何かが掠め、庭の扉を抉る 一銃弾 ブレット！
飛翔してきた方向から射手の位置を割り出す。二階のベランダから身を乗り出して銃を構える白ずくめの男。

細長い銃身を持つ銃 一減音器 サプレッサー を装備したベレッタ。

しかし、射手の位置が分かれば減音気など大した一有利要素 ア

ドバンテージ にならない。

明海は冷たい目で相手を視認
た。

照準^{サイト}を合せトリガーを引い

車庫に辿り着く。

息子から手を離し、左手でシャツターの開閉スイッチを押す。
シャツターが完全に上がりきる前に何か飛び出して来た
人だ。

明海は慌てて銃口を白ずくめの男に向ける が、それより先
に男が明海のグロックを蹴り上げる。

グロックは空高く飛び、明海から5、6M後ろ離れた所に落ちる。

どちらにせよ、一接近戦闘 C、Q、C (Close Q
uarters Battle) で銃は使えない。

明海は襲い来る男の拳を半身になって躲し、相手の横に回り込む。
脇に伸びきった相手の腕を挟み、固定。

開いた左手で相手の顔面を狙う 男の右手が明海の拳を拒む。

母と見知らぬ白ずくめの男が取っ組み合いをしている。

車庫の中にはまだ4人男が居る。

危ない、逃げる と、心か頭で一警報 アラーム が鳴っ

ている。

しかし、心の奥底ではそのままが良いのかと思う自分が居る。
このままでは負ける。なら、どうすれば良い？

簡単な事だ。

自分も参加すれば良い。

「う、うおおおおっ!!」

雄叫びを上げ、突っ込む。

分らないが、自分なら出来る気がした。

蓮は自分を捕らえようと伸ばした男の左手を右手で引き込み、右の肘を顎に叩き込む。

「んがっ！」

顎を押さえて倒れ込む男の腰から拳銃を抜き取り、呆気に取られる二人に向けトリガーを引く。

片や胸を、片や腹を紅く染め倒れる。

不思議な事に、身体が軽かった。

残った男が動く
蓮は男が腰から銃を抜く前にトリガーを引く。

この感じ……前にもあったか？

人を殺める事は罪だ。

ソレに慣れている、しかしこの感触を知っている。

未だに取っ組み合いを続ける男の頭に銃口を向けた。

ダン！

ソレの乾いた音が静寂を作り、火薬の臭いを撒き散らす。
明海は頭に穴を開け、体液を垂れ流す男の臉を降す。
敵に掛けてやれる情けはこれぐらいしかないが。

視線を男の亡骸から自分の息子に移す。

巻き込んで、本当にごめんね。

声には出さず、心の中で、息子に詫びた。

第2話：日常の続きの続き

黒、黒、黒。

見渡す限りの漆黒。

目を開けていても、閉じても変わらぬ光景に飽きを感じ始めていた。

車のトランクに揺られて何時間経つのだろうか。
母は自分を何処へ連れて行くつもりとしているのか。

白づくめの男たちの目的は、正体は？

分らない。情報が少なすぎる。

それに、父や行方不明の兄も心配だ。

そして、自分。

あの、夢の事。

分らない事ばかりだ

それから何時間経つただろうか。

車は動きを止め、ドアのボタンという音と振動が伝わってきた。
どうやら目的地に着いたらしい。

トランクが開く
からトランクの外に出る。
久しぶりの白ヒカリに心地良いモノの感じな

「くそ
全く、トランクに押し込められて揺さぶられるなん
て」

後1分 いや、10秒でもあの状況が続けば自分の精神がゲ
シユタルト崩壊するところだった。

あれは一種の拷問に近い。出来れば、2度は御免だ。

「こつちよ」

体を伸ばす 身体の節々がボキボキ、と音を鳴らす。

伸ばしついでに、周りを見渡す。

工場だったのだろう。

辺りは広く、良く分かん機材が沢山置いてある。

車はその機材と機材の隙間を埋める様に止まっていた。

「 いい加減、教えてくれたって良いじゃないか?」

先導する母の背中に向けて言う。

しかし母は足を止める事も、こちらを振り返る事も無い。

「逃げ出したのには、理由があるの」

数分くらい歩いていると、母が口を開いた。

「だらうな」

ぼつぼつと語り出す母に同意した。

訳も分からずに命を狙われて、逃げて

。

『殺したんだ、人を』

』

フラッシュバック
蘇る光景に思わず、唇を噛む。

命を狙われたんだ。これは、正当防衛だ
い聞かせる。

そう、自分に言

あれで良かったんだ、と。

「アイツ等は、追跡者」
ハウンド

「ハウンド………？」

蓮はその聞き慣れない単語に思わず聞き返した。
ワード

「そう獵犬。ハウンド。ホント犬みたいに鼻が良くてしつこい下っ端よ」

歩みを止めずに淡々と言う。

さも、アイツ等を良く知っているかの様に。

「【アサシン教団】、一度は聞いたことあるでしょ？」

「思わず自分の耳を疑った。」

母の言った言葉を脳内再生する 次は母の言葉を疑う。

「別名 【YOU・BEソフト】。貴方にはこっちの方が分かりやすいかしら？」

母の脳内を疑う。

母は何かヤバイ宗教に染まってしまったのか。それが原因で変な集団に狙われているのだろうか。

「蓮。これは真剣な話よ」

いつの間にか、母は歩を止めこちらを向いていた。

真つ直ぐな突き刺す様な鋭い視線 耐えきれず、視線を反らす。

「これは貴方の問題でも有るのよ 正確には貴方の受け継いだ血のね」

父はただのサラリーマンで、手から炎が出せるわけでもない
いたって普通の人間だ。

母も同様。

実は何処かの金持ちの娘でもなければ、名家の血縁者でもない。
そして、少しだけ万能な普通の兄。

頭が良く、運動神経も抜群。

俺と違って人見知りをしてない、社交的で多弁な兄。

2歳年上の兄　　しかし、普通の兄。
普通の家庭。されど、普通の家族。
普通に囲まれた生活を過ごす、普通の高校生。
それが俺だ。

俺だった。

「　　しろよ」

我慢出来なかった。

この感情の激流をどうやって鎮めよう。
なら、感情お全てをぶちまけて、空にすれば良い。

だから

「いい加減にしろよ！！それはアンタ等の問題だろッ！？」

だから

「分かんねえよ、訳分かんねえよっ！！」

だから

「教団だのハウンドだの、俺を巻き込まないでくれ！」

だから、どうかもう少しだけ、ダメな息子の愚痴に付き合ってください。

沈黙　　静寂が母と俺を包み込む。

目の奥が熱く、チリチリする。

その込み上げる何かを零さぬように、真っ直ぐ前を向いた。

交わる視線　　母の目に映る自分の酷い顔。

それがなんか可笑しく思えて、酷く滑稽だった。

「貴方の部屋は用意してあるわ

突き当たりの角を右に曲が

つてすぐの』527号室』よ

母はそう言い残して、足早に立ち去る。

俺の欲しかった言葉はそれじゃない。

どんどん遠ざかる母の背中がいつもより小さく見えた。

間話：一息ついて（前書き）

ストーリーの進展はありません。
今回は説明不足を補う回です。

質問をしていただければ、次回の間話にてお答えさせていただきます。

間話：一息ついて

アルタイル「どうも、主人公のアルタイルです。以下ア」

ウィンディー「一応、ヒロインのウィンディー・ファンクションだ。以下ウィンD」

ア「前回（第26部）と同様、作者の説明不足を補う回です」

ウィンD「一体、私の名前はいつになったら修正されるのだろうか
すみません。

気付いた時にはもう、取り返しのつかない所まで進んでしまっ
すね……………。

ウィンD「要は、面倒なのだろう？」
修正するのが」

返す言葉も御座いません。

ウィンD「そして、感想とレビューの少なさ
作者のレベ
ルも所詮この程度と言う事だ」

ア「ああ、確かに少ないな」

これでも頑張っているんですけどねえ。

ア「当然、質問も来ていない。……………また、俺等で疑問を探すのか」

ウィンD「仕方あるまい。なにせ作者が作者なのだからな」

.....。

疑問に答えるコーナー

ウィンD「ふと疑問に思ったのだが、『43話でエイルが知らないお兄さんから貰ったと言う、杖の正体とその後の行方は?』」

あー、出ましたね。

十字架を模倣した杖で真ん中に丸い穴が開いてて、そこに【エデンの果实】^{アサシン}を収納できるんですよー。

流石の勇者でも手も足も出ないほどの力を持つてるアレですよ。

アサシンクリード2をプレイした方はお分かり頂けるでしょう。

ストーリー終盤にて、ローマ教皇のロドリゴ・ボルジアが持っていたアレです。

詳しくはWikiかYouTubeのプレイ動画にて確認して下さい。

実の所、作者もあまり理解出来ていないのですよ。

ウインド「なるほど……で、その後の行方は？」

その後のゆくry

ア「俺の力不足の所為で杖の行方は分らない。エイルの暴走とエルフを止めた後、【エデンの果実】の魔力から解放された人が部屋に入ってきてな……女性の亡骸と完全武装の白フードの男、そして少女　誤解される要素が盛り沢山だ。当然、誤解された。あの時は俺も疲弊していたし、何より罪無き者を傷付ける事は信条に反する。だから、【エデンの果実】とエルフを回収して窓から飛び降りたんだ」

ウインド「フン、その後の行方は誰にも分らないと　？」

ア「ああ。エイルさんをきちんと弔ってやれなかったな……」

空気が

ウインド「仕方無かったのだろうか？今更悔やんでも、その人は帰って来ないぞ」

ア「分かってる。分かっているが……！」

空気が重くなってきた！？

ウインド「一人の命を想う……それを、愚かと呼ぶか……！」

ひいひいひい！？

スミマセンでした！！

ウィンD「消えろ　　興味も無い……………」

はい、空気になります！！
水底に沈みます！！！！！！

……………アレ？
作者が空気になったら、このコーナー続けられないじゃん。

キャラ紹介のコーナー

ア「何気にウィンシーは主人公の俺を差し置いて、前回の時に自己紹介したんだよな」

ウィンD「ああ、ヒロインの私すら差し置いてな」

ア「じゃあ、紹介するか」

ウィンD「では、私はお前の後にしよう　手短に終わらせるのだぞ？」

ア「ハイハイ」

ア「勇者アルタイルだ。本名を神使蓮カッツカレンと言う。父 エン と母 アケミ の間に生まれる。誕生日は5月27日で高校2年生だ。趣味

はパルクールとゲームで兄 ケン が一人いるが、ただいま行方不明だ。突然、自称神のMirry ウィンド「長過ぎだ、馬鹿者手短に終わらせろ、と言ったハズだぞ」

ア「あ、え？まだ終わってな」

ウィンド「ウエンディー・ファンクションだ。良いか？ウエンディーだぞ？」

ア「良いから進めれ」

ウィンド「親は知らないが姉 ウィンシー が一人いる」

身長は低く

ウィンド「そう、まだ伸び盛りでな」

まな板を常時、装備していて

ウィンド「まな板は装備していないが、念には念を入れて鉄板を装備しているぞ」

髪は赤色で、ロングストレート。

ウィンド「ちなみに瞳の色も赤だ」

鉄板抜きでもややや体重が重い事を最近、気にしだして

ウインド「貴様……、そこで何をしている？」
ゴゴゴゴ（メラメラと燃える炎とか）

はっ、これは殺気!?

ウインド「貴様は、そこで、何をしている、と聞いているんだ」
ゴゴゴゴゴゴ（燃える周囲）

ひっ、ひいひいひい!?

ウインド「どうした、答えられないのか？」
燃える作者）
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

すみませんすみませんすみませんすみませんすみません
ンン!!!!!!!

ウインド「このネクストAC【レイテルパラッシュ】は短期決戦用の高機動高火力のアセンブリだ」

え、ちよっ!?

「消えろ」

い、いいから落ち着け!!

作者が死んだら、この『鏡の境界線』は続けられないんだぞ!?

「興味も無い」

それに作品ちがっ
—————!?

アッ—————

間話：一息ついて（後書き）

誤字脱字の報告、質問や感想をお待ちしております。

第3話・親友に薦められて(前書き)

3月10日・内容追加

第3話：親友に薦められて

「貴方の部屋は用意してあるわ
つてすくの『527号室』よ」

突き当たりの角を右に曲が

母はそう言い残して、足早に立ち去る。

俺の欲しかった言葉はそれじゃない。

「そうじゃないんだ」

「おーおー！元氣な声が響いてると思ったら蓮か！！」

蓮の言葉を遮る いや、遮って声を挙げながら、男が近寄って
来た。

蓮にはこの男には見覚えがあつた。

むしろ、忘れようとしても、忘れられない位の関係

親友。

「さっ、佐藤大輔！？」

思わず素っ頓狂な声で親友の名をフルネームで叫ぶ。

かなり声が裏返つた。

「どうした、女みたいな声を出して？」

お前の所為だろ、と言おうとして止める。
そんな事より聞きたい事がある。

「……どうしてお前が此処に居るだ？！」

心臓が暴れる。

この破裂寸前の心音は、大輔にも聞こえているんじゃないかと思える。

噛んだ　　噛んで方言みたいになってしまった。

シリアスっぽくなりかけていた空気は四散した、と言っても良いだろう。

「……ハア、お前も俺が勉強と説明は苦手な事は知っているだろう？」

ややあって、大輔が口を開いた。

こういう時にそこに突っ込まない親友に心の中で礼を言う。

「ああ、最初から期待してなかったよ」

ため息混じりの台詞をため息と呆れ（約30%）の融合した台詞で返す。

さとうだいすけ
佐藤大輔。

高校二年生で、裁縫部に所属している　　理由は知らない。

運動は苦手だが、アクションゲームは好きで手先が器用。

小学校からの付き合いだ。

黙っていれば、中々の顔なのだが　　それら全てを掻き消す、運動音痴と謎のテンションと言動を持ち合わせている。

大輔コイツの事をあまり知らない後輩とかが、たまに告白する事があるが……。

お察しの通り、1週間続いた例ためしが無い。

脳内から、目の前の男だいすけに関する情報を自分が知り得る全ての情報を引き出す。

改めて、文章にするとその少なさに驚く。

大輔が自分の事をあまり自分から話さないのもあるが、どうなんだろうな。

クラスメートとして、同じ趣味を持つ者として、何より親友として。

今回の事だつてそうだ。

「それで、部屋には行ってみたのか？」

大輔が顔を綻ばせながら、蓮との距離を詰める。
気持ち悪い位の笑顔に思わず、身を引く。

「いきなりどうした。顔がゲシュタルト崩壊しているぞ？」

「んで、見たのか見てないのかどっちだ？」

「いや、まだ」

「なら見に行け、今行け、すぐ行け、一瞬で逝くんだー!!」

興奮状態の大輔が叫ぶ。

どうやら、崩壊しているのは顔だけじゃ無かったようだ。

「あー、ハイハイ。分かったよ」

妙なテンションを継続させる大輔から逃げる様に通路をやや速め

に歩く。

ああなった、大輔を止める術^{すべ}を蓮は知らないからだ。時折聞こえてくる不気味な笑い声を背に受けながら、突き当たりの角を左に曲がる。

『527号室』

527、と言う事は後526個位部屋はあるのだろうか？疑問を感じながらもドアノブを回し、ドアを引く。

「うおっ!?!」

明かりが点いてないので、部屋は暗く不気味だった。

仕方がないので壁を伝いながら、手探りでスイッチを探す事にする。しかし、こつも暗いとトランクの中に押し込められていた時を思い出す。

まあ、ここはトランクの中ほど狭くは無いし、何より動ける。

タンッ!

タンッ、タンッ!!

壁を伝い、妙な振動が蓮の掌に広がる。

「な」

タンッ!

「……………」

蓮の頬を何かが掠めて、壁に突き刺さる。

何かが掠めた右頬がヒリヒリした。

どうやら、頬の薄皮が綺麗にはっくりと裂けているようだった。

頬に微かに当たっている物など、大体予想は付く。

しかし、今回だけはその予想が外れてくれる事を願おう。

足音を立てないように、息を潜めて姿勢を低くする。

タンッ！

蓮の頭上、約1？をソレが通過し壁に突き刺さる。

髪の毛が数本、持ってかれた。

ヤバイ、マジでヤバイ。

脂汗がジワツと身体中の毛穴から吹出し、脳は危険だと叫び、心臓はバクバクと暴走する。オーバーヒート

恐らく、相手からはこちらの位置が分かるのだろう。

それに対してこちらは、相手の位置など予想すらかない。

更に暗いこの部屋では足元に何があるか分からないし、部屋の広さも分らない。

状況はこちらの方が圧倒的に不利だ。

勝機など万に一つも無い。

しかし、ここで行動を起さなければ、ただ死ぬだけだ。アクション

一か八かに賭けて、ドアに向かう。

ドアと言っても、予想だ　まあ、正確に言つならドアの有る

方であろう方向へ全力で走る。

頬や太腿を掠め、何かが通過していく。

見えた!!

良く見ると隙間から白い光が漏れていた。

やっぱり、こっちで正解だった!!

「んぐふっ!?!」

喜びも束の間

鳩尾に食い込む何か。

先ほどから飛翔しまくってるやつほど鋭利じゃないが、何であろうと鳩尾に入れば通常の三倍のダメージは見込めるだろう。

冷静に解説しているが、実際そんなに余裕は無い。

吹き飛びそうな意識を無理矢理繋ぎ止める。

口から漏れた空気を補う様に更に空気を吸う。

腕に何かが絡み付く

体が引つ張られたかと思えば、背中

から床に叩き付けられていた。

吸った空気が口から四散する。

首元にソレを添えられる。

見えはしないが、恐らく刃物。

先ほどから飛翔しまくってたやつと同じだろう。

「用件はなんだ？」

やや低いが、それでもソプラノの可愛らしい声が鼓膜をくすぐった。

しかし

命を狙われ、母に連れられ、トランクに押し込ま

れ。

居るはずの無い所で再開した親友、自分の部屋に行けば、この様
むしろ、こちらが用件を聞きたい位なのだが。

「もう一度聞く、用件はなんだ？」

頬を髪の毛がくすぐる

蓮を組み伏せる相手の髪の毛

毛だ。

「…………俺が聞きてえよ」

頬をくすぐる髪の毛から逃げるように、顔を逸らす。

自室に入った途端、女に組み伏せられ、ナイフを突き付けられる。
前世で相当、悪い事をしたのだろうか　　心の中で愚痴る。

「どこの回し者だ？」

顔を逸らす蓮を逃すまいと、拘束が一層きつくなる

当然、

体も密着する。

顔は見えなくとも、俺の息子は声とこのシチュエーションだけで
目が覚めるらしい。

「どこにも盛返しこいたにされてねえよ」

息子の存在を悟られぬよう、腰を引く

相手は膝を使い、

蓮の腰を固定させる。

「　　貴様の名前は？」

熱を持ち始める息子とは反対に、体中の毛穴からにじみ出る汗が

ドアからは少し離れたが、状況を見れば仕方無い。

「ふふ、ふふふ……………あはははははははっ！！」

部屋に響きわたるややソプラノが掛かった声。

どこかで聞いた事があるような声だったが、脳が答えを出す前に耳元を飛翔してきたナイフに思考を中断しざる終えなかった。

「いますぐ楽にしてやる」

全身の総毛立った。

エマージェンシーコール警告音が通常の三倍特別サービス中で御座います、はい。

全身び突き刺さる、殺気に数歩引く。

背中に壁が スイッチ突起物が肩に当たった。

カチッ。

「……………。」

「……………。」

電球に電気が通り、部屋一帯が明るくなった。

あまりの眩しさに本能的に瞼で光を断絶しようとするが、その本能を押さえ付け瞼を少し上げる。

霞みかかった視界だが、何も見えないよりはマシだった。

「蓮！貴様、本当に蓮か！？」

いきなり、名前で呼ばれた　　と言っても、組伏せられた時に名前を知られたの不思議は無い。

しかし、それをさも知り合い　　いや、それより親しい仲の者と呼ぶかのようだ。

手で傘を作り、それを目上に翳す。

光量が減り、目の方も慣れてきたのか大分見易くなった。

逆手に持ったナイフが光を反射させてキラキラと輝く。

しかし、そのナイフを持つ手は白くて細い　　。

髪は黒く、長い。

背中まで伸びた髪をそのままに、頭頂部には一本のアンテナが立っている。

細い腕に細い胴体、すらっとした猫を連想させるしなやかな四肢。凹凸の無いその身体は一種の芸術を体現していた。

「お前、相当失礼な事を考えてはいないか？」

読心術の使い手かよ、お前は。

しかしそれを認めてしまえば、地獄からの使者がお迎に来るだろう。

「んな訳ないだろう、ウイン」

とっさに口から溢れた名前　　俺はウインディーと言おうと
していた。

ウインディー・ファンクション　　知らない名前だ。
しかし、頭の中にはしっかりとその名前が刻まれていた。

ソイツはベッドの傍へ歩いて来た。

ベッドから上半身を出し、相手の足首を掴みベッドの下へ引きずり込む。

左手を反らす　　左手首の鞘から飛び出る刃。

飛び出た刃を素早く相手の首筋に突きつける。

その名も【アサシンブレード】。アサシン必須のアイテムだ。

「用件はなんだ？」

「……………」

「もう一度聞く、用件はなんだ？」

「…勇者アサシンの暗殺」

俺の声と夏ナツの声。

「どこの回し者だ、お前」

「テンプル騎士団」

ベッドの下で刃物を突き付けた上での会話。

しかし、俺は知らない。

こんな事はしていない

。

「じゃあ、お前の名前は？」

「……ストレイド迷い子」

「俺が聞きたいのはコードネームじゃなくて君の名前」

「ウエンディー・ファンクションだ」

「ウエンディー。お前に選択肢をやる。俺の手となるか、今すぐここで死ぬか」

俺の声に殺気が籠る。

やめろ。

「だ、誰がお前如きに！！私は神にこの体と魂を捧げた身。いまさら、死など恐れるものか！！」

やめろよ。

「残念だ、いますぐ楽にしてやる」

俺はあの後、どうしたのだろうか？
あの子はどうなった？
あそこにいた俺は一体？

「
！
ンー！！」

「……………」

「蓮！！」

「っは！？」

肩を叩かれ、我に帰る。
少し物思いに耽り過ぎたようだ。
しかし、あの光景は
？

「どうした蓮。具合でも悪いのか？」

目の前に夏が居た。

俺より身長が低い分、彼女は俺を見上げる体勢になる。

上目遣い。

これは、ポイントが高いな。

「ああ、ごめん。少し考え事をしてた」

「なんだ、私との再会の嬉しさに魂が昇天してしまったかと思ったぞ」

「んな訳あるか」

夏原勝
なつしほ じりちでい

一見、男の様な名前だが歴れっきとした女だ。

力は強いが体の輪郭ラインは細く、白い。

ちなみに胸部と臀部を含めての細い、だ。

身長は俺より頭一つ半くらい下で、同い年。

俺と同じく、2歳年上の姉 勝葉カツハがいる。

家も近い事もあって、それなりの親交はある。

姉である勝葉は俺の兄 剣ケンと時同じくして家出。

これは俺の予想だが、恐らく 愛の逃避行だろう。

「また失礼な事を考えているだろう」

「ないない」

相変わらず、感の良い奴だ。

「まあ、それは置いて……だ」

「どうした？」

「お前が何故、私の部屋に居るんだ？」

……………。

部屋を見回す。

ピンクを基調とした大変女の子らしい
部屋です。

と言っか、女の子の

はい、ありがとうございますm

『その後

、彼の行方を知る者はいなかった……………。』

第3話・親友に薦められて（後書き）

誤字脱字の報告等、お待ちしております。

第4話：勝葉（前書き）

8月10日：内容変更

第4話：勝葉

体の節々が悲鳴をあげているのが分かる。

「何も本気で殴る事ないだろ？」

「乙女の部屋に無断で侵入したんだ　これくらいは当然だ」

「つつあいつ!?!」

右頬に消毒液を含ませた脱脂綿を押し付けられる　ぐりぐりと。

「つてえよ、マジで!?!」

勝ツキの右手を払う。

何だかんだ言いつつ、手当てをしてくれるのは大変有り難い。

「ふん、男なら少しくらいは我慢したらどうなんだ？」

勝が抵抗する蓮レンの左腕を拘束した　押し倒マウントポジションされてる状態では
上手く力が入らない。

「じつとしていればすぐに終わるんだ……ふふ、ふふふふ」

「え? ちよつ、おまつ!?!?!?!」

……。

……。

……!!

……。

……ギヤアアアアアアアア!!

手当て(？)を受けた俺は、夏原の案内の下
かった。

ある場所に向

この建物の最深部だ。

夏原が大扉の前に設置された機械に向かって両手の掌を翳した。

ピーと音を発し、目の前の大扉が開いた。

しかし、10メートルも歩かないうちにガラス状の扉が立ち塞がった。

天井に備え付けられたカメラが作動し、ガラス戸が開き二人の屈強そうな大男が二人に近寄ってきた。

「これで全部だ」

そう言い夏原は黒光りする拳銃を一挺いっちょっとうとナイフを八本、大男に差し出した。

まさかそんな所にナイフが入るのか、と感嘆の声を上げる蓮を尻目に大男が二人のボディチェックを始めた。

「異常無しです どうぞ」

大男たちがカウンターに戻ってスイッチを押す 三つ
目の扉が開いた。

扉の向こうにはただ永遠と一本の通路があつて、5メートル置きにライフルを持った屈強そうな大男が一人ずつ立っていた。

「まだ歩くのか？」

ため息混じりの声で横にいる夏原に声を掛ける。

「当然だ」

ため息を再度吐いて、歩を再開させた。

通路の突き当たりのドアの前で夏原が足を止めた。
……結構な距離を歩いた気がする。

夏原がドアをノックした。

「待っていたぞ、蓮　　それに妹」

ドアを開けると、濃紺色のスーツを来た長身の女性
葉が二人を招き入れた。

夏原勝

苗字から分かるように、夏原勝と勝葉は姉妹だ。

「どうだ、最近の調子は？　　毎朝立っているかい？」

……。

怖がらなくてもいいよ、お姉ちゃんは正義の味方だ
からね。

十年前、早朝から親と喧嘩して家出した蓮が公園で出会った姉妹
それが夏原だ。

あの時はまだ、この人は下ネタなど言う人ではなかった。

お姉ちゃんはね、君のお兄ちゃんの友達なんだよ。

平日の朝早くから家出して給食の時間を過ぎても小学校こない弟を心配して兄が母と父に連絡して、近所を探した。

それでも見つからないので、兄が近所の仲の良いクラスメイトである夏原（姉）と一緒に探して欲しいと頼んだ……………と言う事だった。

「」無沙汰です、勝葉さん」

蓮は勝葉の前に歩み寄り、挨拶する。

「二人とも、かけなさい」

勝葉が二人をソファに座るように促した。

「蓮、怪我はないか？」

「怪我は有りませんが、その……………状況が飲み込めないと…
……………」

「だろうな　　そうだ、妹よ、蓮はどうだった？」

……………何が？

え、なんなの？

これは下ネタのお話？

「技術は有りませんが、基礎は良いでしょう」

瞼が重い。

意識が遠のいて行く

ダメだな、こりゃ。

意識を繋ぎ止めていた何かが切れた。

第4話：勝葉（後書き）

誤字脱字の報告や感想、お待ちしております

第5話・装備（前書き）

6月15日 内容追加

第5話：装備

2015年

「今回の任務の内容は先方から聞いている。悪いが銃の選定は勝手にさせて頂いた。次回からはお前が選定することになる。くれぐれも慎重にな？」

「銃の選定の話よか、お前の事をじっくり話がしたいんだが……？」

大輔は顔に満面の笑みを浮かべながら、長方形の何かを蓮に寄越す。腕に伝わるずっしりと来る重さに目を見開く。

「銃……？」

「そう。これはFN社のP90だ。フィリピン経由の輸入品で、一見SF映画の光線銃のようだが、性能は折り紙付きだ。複雑な給弾機構のわりには弾詰まりも少ない。五・七×二八ミリの少口径高速弾^キって特殊な弾薬を使ってる所為で、弾が中々手に入らない。弾倉^{マガジン}容量は50発だ」

P90は強い火力を誇るがコンパクト。ブルバップ機構ならではの取り回しの良さも相まって非常に使いやすいサブマシンガンらしい。

長方形の弾倉は半透明なので、一目で残弾が確認出来る。

「次にSIG・GSR1911」

次に手渡されたのは拳銃。

「コマンダースタイルのハンマーにフレームはキャスピアン、トリチウムのナイトサイト付き。そして何よりバレルにはねじ山が切つてある事だ」

「何か付けるのか？」

「これによつて消音器サイレンサーの脱着が可能になる
は分かるな？」

サイレンサー

「あれだろ？付けると音が出なくなるって」

「まあ、大体そんな物だ　　しかし、完璧に音が消せる訳じゃない。さしずめ、減音器と言ったところか」

「過信はするなつてことか……。」

「更に、トリチウムのお陰で暗闇でも照準サイティングが可能だ」

「くつくてゆーてゆーてゆー？」

「……ま、暗いところでもおkつてことか」

「これだけか？」

「いや、お前には投げナイフスローイング……そして籠手と衣装を用意した」

「衣装？」

「あれだよ」

そう言つて大輔は部屋の一角を指さす 指の先を辿って行く
とそこには白を基調とした上下セットの衣装があつた。

「……これを着て、暗殺しに行くのか？」

かえつて目立つのではないか、と大輔に問いかける。
蓮の問いに大輔は首を横に振つて答えた。

「今の若者の流行はなんだと思う？」

「なんだよいきなり」

「良いから答えてみるよ」

嫌いな授業の時に「I can fly!」と叫びながら教室の窓
から脱走することか？

「それは、お前だけだ」

大輔は首を横に振つて、軽くため息を吐く。
ややあつて、口を開く。

「パルクールだよ」

「そういえば、勝葉は？」

「彼女なら遠距離からの狙撃による、援護だ。目標の始末は連、お
前がやる事になる」

「……………あ？」

一瞬、目眩がしたのは気のせいではない……………はず。

第5話・装備（後書き）

久しぶりの投稿なのに、短くてすみません。

第6話・追跡（前書き）

ご無沙汰です。

引越しや環境の変化もあって中々、更新できませんでした。

一段落終わって、一息。

……時間がかり過ぎですかね。

第6話：追跡

吹き付ける風がフードを撫でる。

蓮はビルの屋上から八王子の町並みを眺める。

ターゲットである神田至は6人の護衛を引き連れて宿泊施設に入る

愛人に会う為に。

改めて高い場所に登って見ると、この八王子はいつもとは違った顔を見せる。

西に8人。

北に3人。

東に15人。

南に2人。

屋根を屋根へと飛び、手摺りを飛び越え、壁を蹴る。ある者は赤く、太陽の様なマントを風になびかせる。またある者は、黒いタイツに身を包み走る。

「ここはアキバかよ……。」

大輔の言った通り、少なくとも一部の若者には流行ってるようだ。

フリーランニング
パルクールと呼ばれるそれはフランス発祥の運動方法の一種で、どのような地形や環境下においても体と精神を制御し意図した場所へ行く事が出来る強く機能的な体を獲得することを目指すスポーツだと、大輔は言った。

「まさか、コスプレしながらか……危ないよな」

蓮は自分もコスプレをしている事を思い出す。

ビルの色に溶け込む様に迷彩塗装された灰色のフード付きの衣装。
左腕を守る籠手には仕込み刀アサシンブレイドの鞘が太陽を浴びて鈍く反射する。

大輔から受け取った刃の入れてないただの金属棒から実用的な刺突用ナイフへと変わっていた。

左手をぐっと反らす　　シャツと金属音を立て現れる刃。

大輔に油を差してもらったおかげか、それとも材質が変わった所為か。

いつもとは違う感覚に違和感を覚える。

「……いつも？」

いつも、とはなんだ。

まるで自分がこれを使って人を殺した事があるような。
自分にズレを感じた。

そんな時、ピピピと機械音が鳴り、蓮の意識を引く　　開始のアラームだった。

これから自分は理由もなく、ただそう言われたからと、人を殺す。
資料でしか見た見たことのない男とその護衛を殺さなくてはいけない
　　じゃないと、自分が殺られる。

そう、勝葉カツハに言われた。

蓮は鳴り続けようとする携帯端末のボタンを押し、アラームを止める。
ターゲット

目標はこれから愛人と6人の護衛を連れて、出掛ける。

『そこを仕留めろ』

蓮は右手に握ったハンドガン SIG・GSR1911 のスライ
ドを軽く引き、チャンバー薬室に銃弾が装填されている事を確認する。
既にGSRには消音器が取り付けられていた。サイレンサー
音が聞こえにくいとは言え、人前で銃はタブーだ。
極力、アサシンブレードを使わねばならない。
目撃者は0に近いほど良い。

もう一度左手を反らす 子気味の良い金属音を立てて刃は鞘へ
と戻る。

右手のGSRを腰のホルスターに入れると、その場を後にした。

ホテルから出てきた神田とその愛人、そして6人の護衛は八王子の
ブランドショップ巡りをしていた。

「おい店員、このバッグは何円だ？」

ショーウィンドウに飾られたバッグの値段を訊ねる神田に店員は6
人の大男に睨まれてオドオドしながら値段を答える。
しかし、その値段に神田は気に入らなかつたらしく、その隣のバッ
グについて訊ねる。

「じつ、532,900円になります！」

声は裏返り、見ているだけで痛々しい。
神田は少し考えた後、護衛に手招きする。

「少しこの店に飾りつけしてやれ」

神田がいやらしい笑みを浮かべる。

それに釣られて、護衛の2人がいやらしい笑みを浮かべる。

神田は二人の護衛を置いて、次の店に向かう。

それを見た店員はイヤな雰囲気を感じ取ると、声を荒らげ腰にしがみつく。

店内の客や他の店員はそそくさと離れて行く　厄介に巻き込まれたく

ないのだろう、だれも哀れな店員を助けようとしなない。

「や、やめて下さい！」

「離せ！」

護衛は自分の腰にしがみつく店員を引き剥がした。
尻餅をつく店員に右腕を振り上げる護衛。

「ひっ！」

店員は顔面に腕を交差させ頭部を守ろうとする。

店員は抵抗する間もなく、伸びた。

蓮は護衛へと駆け出す。

店内の商品を荒らす事に集中している護衛らは接近して来る蓮に気付かない。

自分に背を向ける護衛の肩に手を置く。

「邪魔すんなよ、てめっ
!?!」

蓮の右手が振り返った護衛の頬を捉える。

後ろの商品棚に音を立てて倒れ込む。

その音にもう一人の護衛が振り返る　その瞳が商品棚に倒れ込んでる同僚と蓮を捉える。

その目に憤怒が浮かぶ　右手を上着の中へと潜り込む。

護衛がその右手を出す前に床を蹴り、一気に距離を詰める。

護衛が右手を出す頃には蓮が懐に入っていた　目を大きく見開き、驚愕する護衛の拳銃の銃身を強く握る。

開いた右の掌低で護衛の顎を打撃、反撃する時間を与えぬように打撃させた右手で相手の右手を拘束。そのまま丸め込む様に投げる。

「ぐふっ!」

ワックスがかけられた硬い床にまともに受け身の取れないまま叩き付けられて護衛の口から涎と空気が漏れる。

蓮が商品棚に倒れ込ませた方の護衛が立ち上がるうとしていたので蹴りを入れて沈めた。

蓮は店の奥に引き籠る店員に後は頼んだと声をかけ、騒ぎが大きくなる前にこの場から離脱した。

「品切れたと!?!」

神田はまた違う店で怒鳴る。

「申し訳ありませんっ!」

また違う店の店員が額を床に擦りつけて謝罪していた。
店員の必死の謝罪は神田の怒りを修めるには足りないらしく、神田の顔には憤怒の色が漂っている。

「おいお前ら、この店は品数が足りなくて困っているそつだ。ちよつくら増やしてこい」

店員が困惑した様子で護衛2人の動きを見守る。

店の中に入った護衛は手頃なサイズの椅子や商品を手に取り、それを商品に、窓に振り下ろした。

「ああつ!!」

店員が悲鳴を上げて店で暴れる二人の元へ走る。

「ほら、ガラス片に金属ゴミに木材、増えた増えた増えただろう!」
「?」

必死に二人の悪行を止めようとする店員の背中に嘲笑と嘲りの言葉と笑みを投げかける。

神田は護衛を2人引き連れて隣の店へと歩き出す。

「そ、そんな、待つてください、この二人を止めっ!?!」

店員が神田に手を伸ばそうとしたが、兵士にその手を拒まれてしまった。

「商人風情がその汚らしい手で、神田様に触れようとするとは!」

一人の護衛が店員の後ろに回りこみ脇の下から腕を回し、ガツチリ

と拘束する。本ルド

そしてもう片方の護衛が身動きの出来ない店員の腹に拳を入れる。何度も何度も。

しかし、蓮は動けなかった。

まだ店の前のシルバークセサリーの出店で神田は呑気にも品揃えをチェックしているのだ。

ここで護衛を殺して、神田が異変に気付きでもしたら次のチャンスはもうないだろう。

蓮は唇を噛んだ。

「これ以上、パパをイジメないで！」

店内の異変に気付かず、逃げ遅れた人がいた。

黒い艶のある髪をした女の子　　おそらく中学生辺りだろうと

蓮は見当つけた。

彼女の言葉を聞く限り、店員の娘らしい。

「助けてやりたいのは山々だが、今は……！」

蓮は呻く様に呟き、横目で神田を見る。

さっきの店で楽しい事が起きている、と歡喜の表情を浮かべていた。しかし、愛人の方はそれが気に入らないようで頻りに神田の手を引いていた。

「ほお、この子はあんたの娘か？」

護衛の一人の好みに合うらしく、此処からではその表情を知る事は出来ないが、きっと非常にイヤな下卑た笑みを浮かべているのが分かる。

その歩みこそ遅いが確実に女の子を店の隅に追い詰めている。

「娘に手を出すなあ!!」

店員が暴れた。

急の自体に店員を拘束していた護衛がその腕を解いた。

「このっ、待て!!」

護衛の静止を振り切り、娘の服へ手をやる護衛の背中に肩からの当て身。

「っ貴様!!」

不意打ちに驚き体勢を崩した護衛だったが、少女が逃げる前に体勢を立て直し椅子を手に取る。

それを一振り。

店員の脇にめり込む。

「ぐうっ!?!」

床を転がり血液混じりの涎を口から垂らす。

咳込みもがく店員の首を両腕でホルルド　その細い首を折る

うと力を込めて行く。

「!?!」

首を絞められ、酸素を補給する事の出来ない店員は声にならない叫びを上げる。

ごきゅ、とイヤな音がした。

少女は目を見開く　さっきまでもがいていた手が力がなく垂

れているのを見て息を飲む。

一拍置いて、店内に少女の甲高い叫び声が響きわたった。

神田はその声を聞いて、満足と言わんばかりの足取りで次の店に入る。

「んじゃ、次はお嬢ちゃんが俺の相手してくれよ」

動けなかった。

苦しみ悶え、死に行く人を助ける事が出来なかった。

無機質で冷たい床にうつ伏せで倒れる男は二度と自分の娘を話す事は無い。

「いやっ、やめてよ！」

ビリビリと力任せに服を破る。

少女は抵抗するが相手は多少なりとも訓練されているだろう大男。

筋力的にも体格的にも体力的にも。

少女の方が圧倒的に不利なのは明白だ。

蓮は再度、神田の入った店に目をやる。

「お客様！！」

また、隣の店の店員が抗議の叫びをあげる。

店内は神田とその護衛がちよっかいを出しているのか賑やかだ。

神田はしばらく出てこないだろうと踏んだ蓮は駆け出した。

第6話：追跡（後書き）

誤字脱字等あれば報告下さい。
感想もお待ちしております。

第7話：一人目の目標

少女の服が乱暴に破かれ、その肌を露出させていく様を護衛は冷めた目で見ていた。

自分はどうしようもないクズで腕っ節だけが取り柄な自分だが妻と
そのお腹には子供がいる。

いくら溜まっていると言えど、生まれてくる子が女の子だった時の
事を考えては罪悪感に苛まれた。しかし、止めようとさせる
までの罪悪感はなかった。

聞こえるのは同僚の嬉しそうな声と少女の叫び。それに混じっ
て足音が聞こえた。

はっ、として振り返る。刹那、写る灰色のフードと鈍色のナ
イフ。

「　　っ!?!?」

声あげた。しかし、喉はヒューヒューと風の漏れる音を出し
ただけだった。

意識は曖昧になって行くのに、痛みだけが鮮明になっていく暗い世
界。

妻の顔と生まれ来る子の顔を思い浮かべ、瞳を閉じた。

蓮は左手を大きく反らした

金属音を立て、現れる必殺の刃

【アサシンプレード】。

少女ともう一人の護衛から少し離れた位置に立つ護衛に左腕を振りかざす。

護衛も異変に気付いたようだ　しかし遅い。

振り返って相対する護衛の喉を裂き、命を断つ。

護衛は信じられないといった表情で口を数回パクパクさせた後、商品棚にもたれ掛かる様に倒れた。

「お前も退屈だろ。こっち来てこの子コイツの手を掴んでてくんねえかな」

返事は無い　蓮も敢えてしなかった。

反抗を続ける少女に護衛もイラついてるらしくもう一度手を押さえるように同僚に言う。

「おい、テメツ　!？」

いつまで建つても手伝うどころか返事すら寄越さない同僚にしびれを切らしたのか振り返る。

護衛は状況を素早く整理、理解すると懐から拳銃を出した。

それを蓮ではなく、少女のこめかみに押し付ける　少女は息を飲む。

「へへへ、動くなよ？」

拳銃のセーフティを右手の親指で解除すると、次は銃口マズルを蓮に向けた。

左腕を少女の首に巻き付け、体勢を立て直す。

相手の的確な状況判断と行動の速さに唇を噛む。

「ゆっくりと両手をあげる」

蓮は相手の要求に従った　フリをして肩のナイフホルスターに手を掛ける。

そのまま右手のナイフを投げようとした時、右肩に激痛が走った。ナイフは護衛を捉える事なく、カランと床に落ちた。

「……余計な事をするとは頭だからな」

右肩を押さえる。

とめどなく溢れようとする血をどうにか押し留める。

暫くして、鼻を突く火薬の匂いに自分は撃たれたのだと遅まきながら理解する。

「誰に雇われたかは知らんが、そんな奇抜な格好でノコノコとお前、自殺志望者か」

ケラケラと唇を歪める護衛。

「ま、男より女の方と遊んでいたいでね」

シングルハンド右腕で拳銃を蓮のフードの奥　眉間に向ける。

「恨むなら自分の運のなさをうらやっ　!?!」

護衛が突如、咆哮する。

何事かと少女を見る　自らの首に巻き付く腕に必死に歯を突き立てていた。

この機会を逃すまいと、床に落ちたナイフを拾いすぐさま投擲。スローイング

ナイフは直進し、護衛の左腕に突き刺さる。同時に解放される少女。

護衛は左腕腕に刺さるナイフをそのままに拳銃の引き金を引く。トリガー
蓮は右手で懐の【GSR】をホルスターから抜こうとして気付く
いまだ血の止まらない右肩を見やり駆け出す。

引く、引く、引く。
銃口から吐き出された銃弾は見当違いの方向へ飛翔し、火花を散らし壁を抉る。

「クソっ !！」

弾切れを起こし、スライドストップスライドが後退したまま、動かない拳銃を投げ捨てる護衛。

護衛は左腕に突き刺さるナイフを抜き、上段に構える。
蓮のそれに呼応するように左手を反らし、【アサシンブレード】を展開。

降り下ろされるナイフに下段から対応する。

鏝競り合いになれば下段であるこちらが不利だと判断。

【アサシンブレード】の刃を相対するナイフに沿って滑らせる。

ナイフは【アサシンブレード】の鞘と籠手に挟まれ、動きを止める。
蓮は護衛のナイフを握る手を包むように握り、手前に引く。

接近する護衛の鼻頭に己の額を打ち付ける。もう一度、ただどさっきより強く。

「くっは!？」

鼻骨が折れ、不自然な方向に曲がる鼻から血を撒き散らしながら倒れる護衛。

逃すまいと蓮は左手を首の付け根に突き立てた。

「おっ、お前が殺^やつたのか…?」

蓮は背後　　店の入り口に目をやる。

店の入り口には2人の護衛と目標である神田が立っていた。ターゲット

おそらく、先ほど護衛が放った銃声を聞きつけて来たのだろう。

すでに護衛は銃口を蓮に向けている。

蓮は振り向きざまに、右肩のナイフホルダーからナイフを抜いて、護衛に投擲する。

蓮の左腕から投擲されたナイフは護衛の銃を構える右手を射抜いた。

「ぐっ、ぐぎゃああああ！」

護衛は自分の右手を手で押えた後、銃を落とす。

「キ、キサマ！」

一人の護衛が小刀を抜き放ち、こちらへ駆けてくる。

蓮は駆けて来た護衛の小刀を持つ方の手首を掴み軌道を反らす。

そして、その勢いのまま護衛の太腿へと導く。

更に蹴る。

片方の足が太腿からナイフの生えさせた護衛は蹴りの衝撃に耐え切れず転倒する。

「このっ」

太腿に自分の小刀刺されて尚、立ち向かってこようとすする護衛の咽頭に足を振り下ろす。

「ひっ、ひい!!」

神田が愛人を置いて走り出す。

「た、助けてくれえ!」

さすが人間の生存本能と言うべきか、神田は道路を物凄い速さで駆けしていく。

蓮は建物の屋根に上り、その姿を追う。

「助けてくれ!」

神田は見回り中の警察に駆け寄って行く。

「アサシンだ、アサシンが追って、くぎゃあ!」

神田のうなじに突き刺さる刃。

はためくマント。

灰色フード。

驚愕に目を見開く警察を他所に、世界が二人を中心に崩れた。

「どくだ……」

何も無い、白一色の世界で蓮は目の前に居る男に問いかける。
神田は蓮の問いに答えず、先ほどとは違い落ち着いた。何かを
悟った様子で口を開いた。

「アサシンか……。お前は何の為に命を奪う？」

神田はため息を一つ吐くと、自分を殺した男に問う。

「……。」

答えれない。

沈黙したまま口を開かない蓮にしびれを切らしたのか神田はぼつり
ぼつりと語りだした。

「この世界には管理者が必要だ」

男は語る。

この世界の影を。

そこで必要になる力。

【エデンの果実】

「そろそろ時間だな、アサシン。私は先にあつちに逝ってるよ」

「……………」

語る事を辞めた男は目を閉じた。

第7話：一人目の目標（後書き）

誤字脱字があれば、報告お願いします

第8話・白色

『無事殺すことができたようね』

神田が語ることを止めた、暗殺者と目標^{カンダ}だけ存在する白い世界。

鼓膜を震わせるモノではない何か、蓮の脳を震わせる。

さっと左右に視線を走らせる　　白、白、白。

その”何か”は見えず、あるのは辺り一面の白。

『この世界は私が貴方の為だけに造った世界であり、私そのものもある』

「俺の為だと…?」

460

『まず一人目の目標の暗殺……というか殺害、おめでと〜』

足元に転がって来る丸い物体。

『それで、それは饑^{フレイゼン}別　　初めて、いや二回目かな……にしては
上出来』

「……………」

左手を反らし【アサシンブレード】を展開　　周囲にとめどなく
視線を走らせ、警戒する。

辺りを警戒しつつ、足元に転がる丸い物体を慎重に拾い上げながら言う。

『帰ったら大輔に渡しなさい』

「お前に聞きたいことがある」

得体の知れない”何かの声”を遮るように言う。
数秒の空白　　ややあって再度響く。

『私が答えられる範囲内ならば、良いわ』

「お前の名前は……？」

聞いたことある声　　思い出そうとするが、濃い霧に掛かったかのように答えは導き出せない。

『私は鏡であり母でもある……意味分かる？』

「分かるわけないだろ。中学生が考えた詩^{ポエム}より酷^{ひど}えぞ」

『……それもそうね、自分でも後悔してる』

「聞かなければ、良かった…」

どっと汗が吹き出る。

緩やかで独特な雰囲気^{ポエム}に安心した所以か、脚の力が抜ける　　そのまま白い地面に腰を下ろす。　　そ

『安心はしないで……貴方はまだ走って追っ手から逃げなければならぬ』

まだ大仕事が残ってると思うと、いつそのままこの白い世界にいたいとさえ思えてくる。

『ダメ……貴方は帰ってやるべき事がある』

「ああ、死なないうちを付けるよ」

『じゃあ、また二人目を殺した時会いましょう』

崩れる白い世界。

再び構築される世界。

色付く世界に蓮と神田の亡骸は戻って来た。

目眩 頭痛。

目に写る景色が歪み、脳は激痛を訴える。

「……っ」

痛む頭を手で押さえ、大きく深呼吸する。

「動くな!!」

後頭部にひんやりした感触が伝わる。

「今、お前の後頭部には銃が突き付けられている……おかしな事をすれば撃つぞ」

しまった、と蓮は心の中で毒つく。

神田は見回り中の警察に助けを求めている事を思い出し、唇を噛む。この状況を打開する方法はないのか。

「ゆっくり……ゆっくり両手を上げる」

蓮は言われた通りにゆっくり両手を上げる。

相手が悪党ならいざしらず、警察とあれば殺したくはない。

「……？」

蓮の正面、約600メートル先のビルの屋上で何か反射して煌めく。

「……そうか」

「ん、何か言ったか」

ビルには見覚えがあった。

そこにはあいつがいる　太陽の光を受けてキラキラ輝くそれは

勝利の女神。

片目をつむる。

「ゆをつ！？」

「なんだ!？」

刹那、飛来する風を切り裂く音。

音は蓮と警察のすぐそばを通過し、コンクリートを喰い火花を吐き出す。

警察は自分が狙撃されたことを悟ると行動は速かった。

しかし、それよりも速く蓮は警察の握る拳銃のリボルバーをがっちりと握りこんでいた。

「リボルバーってのはシリンダーこを握られると撃てないんだろ」

ハシマイ
拳銃を起こす前に限り、こつすれば良いと大輔から言われた事を思い出していた。

たまには、あいつダイスケの豆知識という名の長話に付き合ってやるうと思つた。

「くつ、離せ……!!」

蓮は両手を使い、拳銃を握る警察の手ごと捻る。

「ぐう……」

警察は顔を赤くし、歯を食縛る。

トリガーガードが指に食い込み、警察の顔色は苦痛に歪む。

蓮はそのまま力業で拳銃を奪い取ると、蹴りを放つ。

腕で顔を庇った警察は蓮の蹴りの衝撃を流しきれず、地面に背を打つ。

警察が体勢を立ち直す前に、背を向け地面を蹴る。

「待て!!」

背中から静止の聲が飛んできたが無視して走る。

背後で警察が二輪車を立てる音がした。

直線ではこちらが劣勢である事は明白と考えた蓮は路地裏に駆け込

む。

ゴミ箱を踏み台に飛ぶ。

通気口のカバーに手を掛ける。

「よし、このままあー!!」

背面に突き出たベランダの手摺りへと飛ぶ。

ベランダの窓は開いていたが、人氣が無い。

寝ているかこの部屋の主のうっかりだろう、と判断した蓮は開いてる窓に自分の体を押し込む。

「頼むから、盲まし程度にはなってくれよ……!!」

一般人から見れば、今の蓮の格好は奇抜……もとい、変出者そのものだろう。

見る人が見ればコスプレだと思っだろうが、コスプレした見ず知らずの人間が窓から入って来たとなれば、見る人が見ても通報は確実だろう。

パトカーのサイレンが聞こえてくる。

「頼むぜ……神様、仏様……」

誰にも聞こえないよう呟きながら、物陰に身を隠した。

第8話・白色（後書き）

誤字脱字の報告お待ちしております。

第9話…ありがとう（前書き）

少々、ダーク……？

第9話：ありがとう

蓮がこの部屋に隠れてから数十分が経つ。

開いた窓からは時折、パトカーのサイレンの音が入ってくる。

しかし、サイレンの音は隠れ始めた頃よりは繁栄に聞こえては来ない。

「そろそろいいだろう」

蓮は一人呟くと窓に手を掛けた。

これ以上長居してこの家の住民に騒がれでもしたら面倒なことになる。

しかし、長居しなくてもこの家の住民がこの部屋に入ってきて来ないという保障はない。

その時、ガチャリと、ドアノブが回り、ドアが引かれ、人が入って来た。

つまりは、ドアを開けて人が入ってきたのだ。

そして、偶然にもその人物と目が合ってしまった。

「ま、待ってくださいっ!!」

部屋に入ってきた人物は窓から出ようとする蓮に声を掛ける。

「こちらを向いてください」

アルタイルは相手を刺激しないようにゆっくりと振り向く。
そこにいたのは15才ぐらいの白い髪の女の子だった。

「顔を見せてください」

蓮は迷った。

目撃者は少ない　居ない方がベストだ。

さらに言えば顔は絶対に見られてはいけない。

警察にとって、顔は重要な情報の一つだからだ。

一瞬の逡巡の後、フードに手を掛ける

フードをとると露^{あら}わになる蓮の顔。

「先ほどは助けて頂き、ありがとうございました」

少女は蓮の顔を自分の瞳に焼き付ける様に見た後、頭を下げる。

「ああ、君はさっきの…」

「はい、先ほどは危ない所を助けていただき、ありがとうございました」

白い髪が窓から入って来た風に撫でられ揺れる。
人は許容できない量の恐怖やストレスを受けると髪の色素がぬけるとか小説で見たのを蓮は思い出していた。

「君の父を助けられなくて、ごめん」

「いえ……もう、良いんです」

エイフが顔を伏せる。

「……ひっく」

「もしかして泣いてる……？」

俯き、涙を零す少女の対処法など知っているはずもなく、蓮はただ立ち尽くしているしか出来なかった。

「だ、大丈夫だよ！？君に乱暴しようとした悪い人たちやその親玉も懲らしめておいたから……だから、その……そう、もうあの店には来ないよ！」

「はい……あり、がとう……じぎいます」

「何しているんだろっ、俺？」

たくさんの料理を前に自問する蓮。

テーブルを挟んだ向こうには白髪の少女がいた。

「どうですか、味付け…薄くなかったですか？」

「いや、ちょうどいい……ッああ!？」

蓮は軽いデジャブを感じていた　そして、耐え切れない程じゃないにしろ、まあまあな頭痛も。

「白髪の少女……俺はこの子と出会っている……?」

「うえ!?!?どうかしましたか？」

白髪の少女が身を乗り出して、蓮の顔を覗き込む。

「君の名前は……?」

白髪の少女ははっとした様子で答えた。

「ああ、自己紹介してませんでしたね、まだ。」

私の名前は栄^{エイ}、栄 風流^{フウリュウ}です。

変な名前でしょ？

この名前の所為で去年はちょっとした人気者になっちゃいましたけど、私的には気に入ってます。

それで、あなたの名前は？」

「待ってください」

私は立ち去ろうとする白い男に声を掛けた。

「こちらを向いてください」

白いフードの男は焦らすかのようにゆっくりと振り向く。

しかし、肝心の顔は深く被ったフードの所為で見ることができない。

「顔を見せてください」

一瞬の間を置いて、男はフードに手を掛ける。

そして、露になる、その顔。

ハッキリ言えば、特徴のない顔だった。

艶のある黒い直毛でやや整った顔立ちをしているものの、気を抜けばすぐに忘れてしまいそうな顔だった。

「先ほどは助けて頂き、ありがとうございました」

感謝の言葉を述べ、頭を下げる。

何かをしていないと父の最期の姿が頭のなかに浮かんでくるのだ。

『どうか、どうか娘だけはっ！』

唇をきつく噛み締める。

「ああ、君はさっきの…」

白いフードの男は思い出したように口を開く。

「はい、先ほどは危ない所を助けていただき、ありがとうございました」

再び頭を下げる。

感謝してもしきれない位だった。

「君の父を助けられなくて、ごめん」

「いえ……もう、良いんです……」

目の奥が熱を持つ。

思わず、顔を伏せる。

「……ひっく」

堪えても堪えても、堪えようとしても。

口からは嗚咽が漏れるばかりだ。

「もしかして泣いてる……？」

困ったような声が聞こえる。

違うな、困った声が聞こえる。

「だ、大丈夫だよ！？君に乱暴しようとした悪い人たちやその親玉も懲らしめておいたから……だから、その……そう、もうあの店には来ないよ」

手をつないでも良い！

誰も文句を言わない、怒らない！！

だって、パパは死んだから

もう人前で服を脱がなくても良いし、知らない人にも触られない
パパのカメラの前に立たされる事も無いのだ

なんと言おう事だろう！！

なんと姉たちの運の無いことが

哀れで惨めで運が無い、悲惨で残酷な行為の果てに帰って来ない二
人の姉

可哀想なお姉ちゃん

自分の恋愛を全うする事無く、売られ、辱められ、晒された果てに
命を断った姉

狂った性癖の男に操られ、切られ、折られ、焼かれ、ちぎられ、抉
られ、果てに食われた姉

ありがとう！！

ありがとう、神様！！

ふと顔を上げる

目の前の男はまだ私が泣いてると思っているのか、未だにおろおろとしている

そうだ、この男が良い

地獄の番人を殺し、私を自由にしてくれたこの人なら

自分を束縛し続けたパパとは違うハズだから

私の自由をより一層、輝かせてくれる事だろっ

男の服を引き、顔を押し付ける
なぜなら、笑っているから

この笑顔は見られてはいけない

黒いこの感情はしばらくしまっておこう

暗いパパとの記憶と共に奥深くへ

鍵もかけなきや、ね

そうすれば、私は自由だから!!!!!!

第9話：ありがとう（後書き）

御無沙汰しております

そして、明けましておめでとございます。

年末で帰省した際に埃をかぶったまま放置されてるmynorパソコンが
目に入ったので

また、続きを書こうかなと

まあ、そんな訳で今年もよろしく願いしますね

第10話：帰還

「存外、馬鹿な事をするものだな…お前も」

帰って来た蓮を冷たく評価する勝。

「警察共の目の前で人を殺す暗殺者がどこにいる？」

警察官の目の前で神田ターゲットを殺して、騒ぎを作った暗殺者がそこには居た。

いや、暗殺者と呼ぶには相応しくない。
正確には、殺人者。

「ゲームと現実は違うわけか…」

「当然だ、このたわけ！」

蓮は勝に聞こえぬよう小声で呟く　　が、しっかりと勝にも聞こえていたようで、叱責受ける。

「すみませんでした……」

鋭い視線を向ける勝から目を逸らす蓮。

いきなり襲われて、訳の分からぬまま此処へ来て、人を殺す訓練を受け　　暗殺を実行。

まるでゲームの様な話だと、叱責を受けた後も蓮は考えていた。

「少しはしゃぎ過ぎたな、当分は奴らに手を出さない方がいい」

「そついえば奴ら^らってなんだよ？」

「……その事について話が有る……が、その前にお前の親友様^{ダイスケ}がお話したいそつだぞ？」

「その通りだぞ、お前にしつかりと……そう、しつかりと話を聞かせたいし聞いてもらいたい！！」

「のうわっ!?!」

いつの間にか大輔^{ダイスケ}が自然に会話に入ってきているのに驚愕の声もとい、素つ頓狂な声を上げる。

「い、いつの間に来たんだよ!! つか、どつから湧いてきやがった!?!」

「俺がいつ湧き出したは問題ではない……。今、一番問題なのは、お前だ!!」

大輔は蓮の抗議を受け流すどころか回避^{スルト}し、逆に蓮に食って掛かる。蓮は理解出来ないといった様子でその手を振り払おうとするが、大輔の予想以上の力の強さにたじろぐ。

「いきなり出てきて、何言つてんだよ! 一から話せ!! むしろ、その手を離せ!!」

「ん……、ああ、すまん……」

大輔は自分を律する事が出来ない程に熱くなっているのを遅まきながら理解する。

蓮の胸ぐらを掴んでいた手を離し、距離をとる。

「ったく、なんなんだよ、その話って？」

大輔も大分、冷静さを取り戻したようなので改めて問う。

「お前、本当に気づかないか……？」

蓮には大輔が何の事を言ってるのか分からなかった。

「言い方が悪かったな……。言い方を変えよう。お前、忘れ物がある^{モン}だろ？」

「忘れ物が多いのはいつもの事だろ……。なんか土産でも買ってこいって言われて……。すまん、さっぱりだ」

茶化した態度をとる蓮にしびれを切らした勝の踵が蓮のつま先を捉える。

そして追い打ちを掛けるかのように、グリグリと踏む、踏む、踏む、踏みまくる。

蓮はつま先の痛みに耐えながら、表情は平静を保つ。

ぶわつと脂汗が吹き出る　体の悲鳴が上がる。

「お前………P90置いてったる」

【P90】と言う単語を蓮は脳内の辞書にて調べる　最近、大輔からそのような単語を聞いていた事を思い出すが、それ以上ソレについては思い出せなかった。

頭上に疑問符を浮かべる蓮に大輔の堪忍袋は耐えきれずに切れた

キレた。

大輔は右腕に持っていた長方形の金属の塊を蓮に突き出す。

「そう。これはFN社のP90だ。フィリピン経由の輸入品で、一見SF映画の光線銃のようだが、性能は折り紙付きだ。複雑な給弾機構のわりには弾詰まりも少ない。五・七×二八ミリの少口径高速弾^キって特殊な弾薬を使ってる所為で、弾が中々手に入らない。弾倉^{ヤバ}容量は50発だ」

シーリングライトの白い光を浴び、鈍色に煌めく銃口^{マスル}。

蓮はソレに見覚えがあった。

神田の暗殺を請け負った際、懐の【GSR】と共に受け取った
ハズだった。

「ちょー！！ それ銃だろ！？ 危ないからこっち向けんなって！！」

S I D E : 夏原
勝

ア
ッ
ー

今回の相手はちょっとした会社の社長だった。

しかし、裏商売でお金を稼ぎそれなりに危険な相手だった。

それに、奴らの事もある。

自分たちの収入源なのだから、これからは一層厳しい戦いを強いられるだろう。

「言い方が悪かったな……。言い方を変えよう。お前、忘れ物があるだろ？」

「忘れ物が多いのはいつもの事だろ……。なんか土産でも買ってこいつて言われて……。すまん、さっぱりだ」

その上、警察には奴らの息の掛かった奴らもいる。

警察まで敵に回せば苦戦は免れない。

「お前……。P90置いてったろ」

大輔の蓮を心配する様は無線越しにも伝わって来た。

もちろん、私だって心配だ。

私の援護が不甲斐ない所為で蓮が死ぬような事があつたら、私は一生自分を恨み続けるだろう。

「そう。これはFN社のP90だ。フィリピン経由の輸入品で、一見SF映画の光線銃のようだが、性能は折り紙付きだ。複雑な給弾機構のわりには弾詰まりも少ない。五・七×二八ミリの少口径高速弾^キって特殊な弾薬を使ってる所為で、弾が中々手に入らない。弾倉^{ヤバ}容量は50発だ」

だから、私は蓮の為にと思って、その場は佐藤に任せる事にした。

「ちよ！！ それ銃だろ！？ 危ないからこっち向けんなって！！」

蓮、 死なないよな……？

第10話：帰還（後書き）

誤字脱字の報告お待ちしております

第11話：お話

大輔の説教をたつぷり聞いた蓮は、勝と共に薄暗い通路を最深部へと進んでいた。

一定を歩けば二人組みで小銃を肩に掛けた無骨な巨漢が立っている。そんな嚴重なセキユリテイなんていらなだろ、と心の中で呟く。

所々に監視カメラや巨漢たちが立っているのを見て、むさ苦しいと毒つく。

どうせなら可愛い女の子の方が良い、100倍良い。

そう思つてふと、隣を見る　無言で歩を進める勝。

視線を下げる　余りに起伏の無い胸。

おそらくAA……大きく見積もつてもAマイナスと蓮は見当をつける。

こんな胸では異性として意識出来ないばかりか、勝の男じみた言葉遣いがそれに拍車を掛ける。

「はあ……」

誰に心境を漏らす事無く（漏らせば死ぬのは確實だから）、ため息をつく。

いきなりため息をついた蓮を怪訝そうに見た勝であったが、すぐに目の前に迫ったガラス状の扉に視線を戻しカメラに合図を送る

扉が開き、大男がケースを右手に出してきた。

どうやらそこに持っている得物を置けということなのだろう。

蓮は腰のホルスターからハンドガン SIG・GSR1911
を抜き、ケースの中央に置く。

勝も同じように拳銃を一挺とナイフを八本を大男の持つケースの中
へ置く。

大男はケースを閉じ、鍵を掛ける　そして始まる、ボディチェック身体検査。

正直な所、蓮には大男に体のあちこちを触られるという感覚に慣れ
ずにいた。

「なあ、勝？」

「ん？　なんだ？」

「人を殺した事ってあるか……？」

勝はややあつて言葉を返した。

「ああ、あるぞ　お前より昔に、お前より多く……な」

「そうか……。」

勝の余りに淡白な返事に蓮は言葉を失う。

「いつから……？」

「そこらへんは良く覚えていないのだが……そうだな……。　お前
と公園で会った時にはもう人を殺した事があつたな」

大男が異常なしの旨を扉の向こうに伝える　扉が開く。

「正直、羨ましかったよ……お前が」

蓮に目をやる事もなくただ呟くように語る勝に、蓮はただ黙って彼女の話聞きながら歩を進めるしか出来なかった。

「私の両親は先の大戦で死んだんだ……別に第二次世界大戦の事じゃないぞ？」

テンプル騎士団とアサシン教団の戦いのことだ。

蓮、お前もやったことがあるだろう？ 『アサシンクリード』ってゲームを。

あれはな、真実だ　　ほんの数年前の出来事だ。

それで私の両親は騎士団の幹部だった。

デズモンドはアニメスの流動現象により最強の暗殺者^{アサシン}として当時の騎士団の首長を討伐。

その後、彼は【エデンの果実】を手に失踪。

しかしそれだけで終わらなかった。

^{リーダー}主導者を失った騎士団に追い打ちを掛けるかのように、アサシン教団の残党狩りが始まった……。

同じく^{デズモンド}主導者の居ないアサシン教団は歯止めになるものが何も無く、ただ残党狩りを続けた　　つまり、狩る側だった騎士団と狩られる側の教団の形勢逆転だ。

その中、両親は私たちを最も信頼出来る腹心に預け、戦いに身を投じた。

両親を犠牲にして生き残った私たちは隠居生活をつづけた。

……ある時、残党狩りはピタリと止んだ。

最初は畏かもしれないと警戒していたが、そうでは無かった。

奴らも派閥同士の争い　　内紛が起きていて、とても残党狩りに回す手など無かったのだ。

内紛の勝者は現在の政治の腐敗を気に入らないようで、矛先は騎

土団の残党よりも先に私腹を肥やすだけの政治家へと向けられた。しかし、殺すだけでは問題解決にはならない。

そこで教団は完璧な指導者を創ろうとアニメスに
ルタイルに目をつけた。 いや、ア

記憶と遺伝子によって、彼のクローンを創ろうと研究を始めた。

『アサシンクリード』は布教だな。

キリスト教がイエス・キリストをいかに世に知らしめるかみたいな……洗脳的な意味合いもあるか。

……長話が過ぎたな。

さて、続きは姉に聞くと良い」

そう言つて、勝は最深の扉を指す。

「……勝は一緒に来ないのか？」

「ああ、すまないがここまでだ。私は呼ばれていないのでな」

「そうか、ありがとな……勝」

「良いからさっさと行け、このノロマ」

勝に催促され、ドアノブを捻る。

「待つてたぞ、蓮　　警察の前であんな事やこんな事まで…
…最近の若者はすごいな」

「誤解を招き兼ねない事言わんで下さい」

「しかし、当分、身動きは取れないな……そこ・で・D A!!」

勝葉の台詞の妙なイントネーションにイヤな雰囲気を感じ取っていた蓮は身構える。

「今まで通りに学校へ通え!!　安心しろ、生徒は一人たりとも変わってねえぜえええええ!!」

蓮は勝葉の異様に高いテンションについて行けず、言葉の意味を数秒の間、理解出来なかった。

「……ふあ……??」

思わず、口からはだらしない声が漏れる。

「勉強、青春、恋愛だけはしないと人生、損だからな、存分に楽しめ!!」

未だ理解出来ないと言った様子で口をパクパクさせる蓮に聞いて

るかどろかは別として、形だけの説明をする。

「私立学校の理事長なんあのさあ、私。

時の内閣総理大臣の古泉さんの援助の下にな！！

もちろん教師は私の息の掛かった傀儡どもだ セキュリティも

バッチリだから安全かもだぜ？

詳しい事は教頭に任せてあるから、まずは月曜日に登校して校長室へ行って説明を受けるんだな

……健闘を祈る！！」

第11話：お話（後書き）

誤字脱字の報告、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3654j/>

鏡の境界線

2012年1月4日01時49分発行